10月は3R推進月間です。

reduce reuse recycle 3R

3Rの推進で、ごみゼロ・循環型社会の構築へ！

第11回 3R推進全国大会 in 徳島

開催報告書

TOKUSHIMA

とくしまから発信！
広がる つながる ３Ｒの輪

開催日	平成 28 年 10 月 20 日（木）	会　場	徳島文理大学アカンサスホール
		施設見学	上勝町ゼロ・ウェイストアカデミー

平成 29 年 3 月

第 11 回３Ｒ推進全国大会実行委員会

環境省　環境省中国四国地方環境事務所高松事務所　徳島県　３Ｒ活動推進フォーラム

目　次

1. 大会概要 …… 1

2. 式典

（1）主催者挨拶 …… 2

梶原成元地球環境審議官　飯泉嘉門徳島県知事　細田衛士3R活動推進フォーラム会長

（2）来賓挨拶　嘉見博之徳島県議会議長 …… 5

（3）表彰式　循環型社会形成推進功労者環境大臣表彰 …… 6

3R促進ポスターコンクール最優秀賞表彰 …… 7

3. 記念シンポジウム

（1）基調講演「循環型社会の道筋を展望する」 …… 8

講師：3R活動推進フォーラム会長（慶應義塾大学経済学部教授）細田衛士氏

（2）成果報告「おいしい食べきり運動　昨年度3R推進全国大会の成果」 …… 20

発表者：福井県安全環境部循環社会推進課主任　大石光紀氏

（3）事例発表「緑のリサイクル・ソーシャル・エコ・プロジェクト」 …… 22

発表者：徳島県立新野高等学校及び徳島県立小松島西高等学校勝浦校の皆さん

（4）特別講演「3Rとエコライフを楽しもう」 …… 27

講師：シンガーソングライター（環境省3R推進マイスター）白井貴子氏とマイバッグガールズ

（5）パネルディスカッション「今後の3Rの取組と主体間連携のあり方」 …… 33

＜コーディネーター＞

3R活動推進フォーラム副会長（NPO法人持続可能な社会をつくる元気ネット理事長）崎田裕子氏

＜パネリスト＞

環境省大臣官房廃棄物・リサイクル対策部企画課循環型社会推進室長　田中良典氏

福岡県大木町副町長　境公雄氏

NPO法人ゼロ・ウェイストアカデミー理事長　坂野晶氏

株式会社日誠産業環境推進部長　岸野正和氏

徳島県県民環境部環境首都課課長補佐　尾関勉氏

（6）次回開催地挨拶 …… 48

沖縄県環境部環境企画統括監　棚原憲実氏

（7）名刺交換会 …… 49

4. 関連行事

（1）施設見学会　上勝町ゼロ・ウェイストアカデミー …… 50

（2）3R推進展示コーナー …… 51

5. 資料

（1）3R推進全国大会開催案内（参加申込書） …… 53

（2）参加者用パンフレット …… 54

（3）来場者アンケート …… 55

（4）報道掲載記事 …… 60

１．大会概要

●開催日時　平成28年10月20日（木）　13：00～16：50

●会　　場　徳島文理大学アカンサスホール（〒770-8514 徳島県徳島市山城町西浜傍示180）

●主　　催　環境省、環境省中国四国地方環境事務所高松事務所、徳島県、３Ｒ活動推進フォーラム

●開催内容

（１）式典（13：00～13：50）

・主催者挨拶　梶原成元地球環境審議官
　　飯泉嘉門徳島県知事
　　細田衛士３Ｒ活動推進フォーラム会長

・来賓挨拶　嘉見博之徳島県議会議長

・表彰式　循環型社会形成推進功労者環境大臣表彰
　　３Ｒ促進ポスターコンクール最優秀賞表彰

（２）記念シンポジウム～とくしまから発信！ 広がる つながる ３Ｒの輪～（14：05～16：45）

・基調講演　「循環型社会の道筋を展望する」
　講師：３Ｒ活動推進フォーラム会長（慶應義塾大学経済学部教授）　細田衛士氏

・成果報告「おいしい食べきり運動　昨年度３Ｒ推進全国大会の成果」
　発表者：福井県安全環境部循環社会推進課主任　大石光紀氏

・事例発表　「緑のリサイクル・ソーシャル・エコ・プロジェクト」
　発表者：徳島県立新野高等学校及び徳島県立小松島西高等学校勝浦校の皆さん

・特別講演　「３Ｒとエコライフを楽しもう」
　講師：シンガーソングライター（環境省３Ｒ推進マイスター）白井貴子氏とマイバッグガールズ

・パネルディスカッション　「今後の３Ｒの取組みと主体間連携のあり方」
　＜コーディネーター＞
　　３Ｒ活動推進フォーラム副会長（NPO法人持続可能な社会をつくる元気ネット理事長）　崎田裕子氏
　＜パネリスト＞
　　環境省大臣官房廃棄物・リサイクル対策部企画課循環型社会推進室長　田中良典氏
　　福岡県大木町副町長　境公雄氏
　　ＮＰＯ法人ゼロ・ウェイストアカデミー理事長　坂野晶氏
　　株式会社日誠産業環境推進部長　岸野正和氏
　　徳島県県民環境部環境首都課課長補佐　尾関勉氏

（３）次回開催地挨拶（16:45～16：50）

　沖縄県環境部環境企画統括監　棚原憲実氏

（４）名刺交換会（16：50～18：00）

（５）当日のその他のイベント

　３Ｒ推進展示コーナー
　３Ｒ体験コーナー
　施設見学会

●参加者数　385名

第 11 回３Ｒ推進全国大会式典の模様

２．式典

（１）主催者挨拶

●梶原成元氏（環境省地球環境審議官）

本日は、３Ｒ推進全国大会に御参加をいただき、誠にありがとうございます。また、本大会の開催に当たり、御尽力をいただいた飯泉知事を始めとした徳島県の皆様、そして関係団体の皆様に心から御礼を申し上げます。

大会の開催に当たり、環境省を代表して一言御挨拶を申し上げます。

本日は、副大臣が参る予定でしたが、ただいまこの時間、大臣以下、副大臣、政務官がすべて国会答弁に立っており、大変恐縮でございますが、私が代理で御挨拶させていただきます。

皆様、御存知のとおり、現在、我々日本人は大変恵まれた環境のもとで豊かな生活を享受しています。ただ、世界を見てみますと、人類を取り巻く状況は大変に深刻であります。例えば環境問題ですが、資源が不足をしている、あるいは貧困であえいでいる方々が非常に多いということで、途上国の方々を含めて世界の人類すべての人々の生活を守ろうと、昨年の9月にアメリカのニューヨークで2030年に向けた持続可能な開発の目標に合意をいたしました。

また、深刻な地球温暖化と闘うために昨年の12月には世界の首脳がパリに集い、2020年以降、脱炭素化に向かうというパリ協定に合意をしました。

そして、今年の５月には、こうした目標とか約束を達成するために、３Ｒの推進を通じて、資源の利用を減らしながら経済を成長させるという社会づくりが急務の課題であると警告する科学者たちの報告書が、先進国のリーダーたちに渡されております。豊かな地球の恵みを次の世代に引き継いでいくためには、ごみの発生を抑制して自然と共生する社会をつくる必要があり、そのためには、私ども一人ひとりが生活を見直して、行動していくことが必要になっております。

皆様に本日御出席を賜っていますこの３Ｒ推進全国大会は、国民一人ひとりの方、事業者一社一社の方々、そして地方公共団体の方々が一堂に会して、３Ｒの推進に連携して取り組むという思いを共有し、そして具体的な取組を全国に発信するという重要な機会でございます。

この全国大会の場において、本日表彰を受けられる方々がおられます。心からお祝いを申し上げます。循環型社会形成推進功労者環境大臣表彰は、循環型社会をつくっていく上で御功績があった方々を表彰させていただくものでございます。今後とも、皆様方のそのすばらしい行動を全国に広げていくリーダーとして、なお一層の御活躍をお願いしたいと思います。

そして、今日は子供たちにも来ていただいております。３Ｒ促進ポスターコンクールにおきましては、約8,500点の応募作品の中から、見事に最優秀賞に選ばれました小学生の方々、中学生の方に来ていただいています。３Ｒの大切さをたくさんのお友達に広げていただいて、そして日本の「もったいない」という心を世界に広めていく、そういう御活躍を期待しております。

最後に、本日御参加のすべての皆様、環境省は皆様方とともに循環型の社会づくりに一層努力をして参りたいと考えております。皆様方にとってこの大会が、３Ｒに関する知識を広め、深め、連携をより密にするよい機会になることを心から祈念いたしまして、挨拶に代えさせていただきます。

本日はどうもありがとうございます。

●飯泉嘉門氏（徳島県知事）

本日は３Ｒ推進全国大会が第11回目にして、初めて中国四国地方で、また徳島で開催されますこと、心から名誉なことと感じるとともに、この大会の開催に御尽力いただきました環境省、また３Ｒ活動推進フォーラム始め、関係の皆様方に心から感謝を申し上げたいと思います。本当にありがとうございます。

また、この後、循環型社会形成推進功労者環境大臣表彰、また３Ｒ促進ポスターコンクール最優秀賞を受賞される皆様方の御栄誉に心から敬意を表したいと思います。本当におめでとうございます。

さて、今日10月20日は、10一回り、20二回りで、リサイクルの日と定められております。また、10月は３Ｒ推進月間となっていまして、ちょうどこの大会を行うにはぴったりの日、もっと言うとピンポイントで今日しかないという日になるわけであります。そこで、徳島での取組を少し皆様方に、せっかくの機会でありますので御紹介を申し上げたいと思います。

全国的には今、地方創生でそれぞれの地域の知恵が試されていると言われます。知恵は地方にありで、葉っぱビジネスで高齢者の皆様方が大変元気、なんて言うと怒られてしまいますが、葉っぱビジネスの「いろどり」のお母様たち、最高齢90歳でも現役です。この「いろどり」は上勝町が有名ですが、実はもう一つ有名なのがゼロ・ウェイスト宣言、2020年ごみゼロということで、すばらしい分別を行い、今では、リサイクルをさらに一歩進め、リメイクの時代となっているところであります。また、サテライトオフィス、新しい働き方、テレワークの拠点と言われている神山町は、今では全国の取組となったアドプト・プログラム、それぞれの公共財を養子縁組した我が子のように愛で、清掃活動を行うアドプト・プログラム発祥の地とも言われます。

これらの二つの町だけではなく、徳島全体が今、「環境首都とくしま」としてさまざまな環境施策を先進的に進めております。そしてこれを次世代に向けていくため、昨年の１月、「環境首都とくしま・未来創造憲章」を制定し、特にキッズバージョンは、子供のうちから地球環境問題に対し地域で考え、グローバルに展開していこうという、シンクグローバル・アクトローカルの精神で今進めているところであります。

さらに未来に向けて徳島は、34道府県、また200を超える企業が集まった自然エネルギー協議会、自然エネルギーの導入、促進を図る団体でありますが、その会長県であります。率先垂範で自然エネルギーを越え、究極のエコエネルギーと言われる水素をベースとした水素グリッド社会を県民の皆様方と一歩先の未来にするということで、既に今年の３月、二酸化炭素フリーの水素ステーションを中四国で初めて徳島県庁に、また四国初となる移動式の水素ステーションを導入いたしますとともに、究極のエコカー、燃料電池自動車、トヨタのＭＩＲＡＩを公用車として２台、またホンダのクラリティをもう間もなく４台導入をする運びとなり、率先垂範と言う形で新たな水素グリッドも徳島から発信いたしております。

そこで、今、９月の定例県議会真っ最中ですが、一つの条例を提案しております。いよいよマラケシュでＣＯＰ22が開幕するという中で、世界中が脱炭素社会へ向かってまっしぐらに進んでいますが、そのモデルは地方からということで、徳島県では脱炭素社会実現に向けた気候変動対策推進条例を今、提案をしています。この中で、脱炭素社会の実現を掲げるとともに、水素社会、水素グリッドの実現、さらには従来の緩和策だけではなく、適応策もこの中に組み込んでいます。もし今議会で可決をいただければ、年明け来年の１月１日施行を目指しているところあります。

ぜひ、皆様方におかれましては、今回の第11回３Ｒ推進全国大会におきまして、多くの新機軸をここ徳島から発信をいただきますことを心からお願い申し上げたいと存じます。

結びとなりますが、今回このすばらしいアカンサスホールを御提供いただきました徳島文理大学の皆様方、特にここは文理大学120周年記念でつくられ、今でもまだまだ珍しい地中熱を活用した空調設備を導入した、まさに最先端の施設であります。この施設を提供いただき、心から感謝を申し上げますとともに、今回の３Ｒ推進全国大会からこれからの日本の新機軸が打ち出されることを御祈念申し上げまして、少し気合いが入って長くなりましたが、私からの歓迎の御挨拶とさせていただきます。本日は誠におめでとうございます。

●細田衛士氏（３Ｒ活動推進フォーラム会長）

皆様には日ごろより３Ｒの推進に多大なる御理解と御尽力を賜り厚く御礼申し上げます。開会に当たりまして、一言御挨拶申し上げたく存じます。

本日は第11回３Ｒ推進全国大会の開催に当たりまして、全国からたくさんの方々に御参加いただき、主催者の一人として心から御礼申し上げます。

また、本日、循環型社会形成推進功労者環境大臣表彰を受賞される皆様、３Ｒ促進ポスターコンクールで最優秀賞を受賞される皆様、誠におめでとうございます。今回の受賞を機にさらに３Ｒ活動を推進されますことを御期待申し上げる次第であります。

ところで、３Ｒ活動推進フォーラムですが、平成18年に設立されました。そのきっかけは、平成16年６月に米国シーアイランドで開催されましたＧ８サミットにおいて、当時の小泉首相がごみの発生抑制（リデュース）、再使用（リユース）、そして再生利用（リサイクル）の３Ｒを通じた循環型社会の形成を目指す３Ｒイニシアチブを提唱し合意されたことでございます。翌平成17年には、我が国は３Ｒを通じた循環型社会の構築、国際的に推進するための日本の行動計画、「ごみゼロ国際化行動計画」と呼ばれておりますが、これを発表いたしました。こうした動きを踏まえまして、我が国の３Ｒに関する社会的取組や循環型社会への変革のための３Ｒ活動の一層の推進を図るため、それまでのごみゼロパートナーシップ会議を拡充、発展させ、平成18年１月に３Ｒ活動推進フォーラムが発足しました。当フォーラムは136団体（都道府県をはじめ自治体が68会員、民間団体68会員）で構成され、具体的な活動としては、本日開催の３Ｒ推進全国大会、小学生、中学生を対象にしました３Ｒ促進ポスターコンクール、10月の３Ｒ推進月間には、行政、事業者の協力による環境にやさしい買い物キャンペーンなどのほか、自治体や民間団体と連携した３Ｒ連携セミナーなどを全国で展開しています。また、ホームページやメルマガの配信などインターネットを活用した啓発、情報提供活動を活発に推進しております。

３Ｒ推進全国大会は、毎年、環境省及び自治体の御協力を得て３Ｒ推進月間中に開催しております。本年は徳島県様の御協力を得て、環境省、そして環境省中国四国環境事務所高松事務所、３Ｒ活動推進フォーラムにより式典と記念シンポジウムを開催することといたしましたところ、このように大勢の方々に御参加いただくことができました。心から御礼申し上げる次第でございます。

御承知のように、日本は多くの資源を輸入に依存しておりますが、近年、資源ナショナリズムが高まり、国際的な資源の需給逼迫が憂慮されております。このことは、我が国にとってはもちろんですが、地球規模で循環型社会形成に向けて３Ｒ活動を推進しなければならない事態に直面していると申し上げても決して過言ではございません。また、３Ｒの中でも、リデュース、リユースの促進強化を図り、３Ｒ活動の環境負荷削減を定量的に見える化し、各主体の行動が高度化されるような事業も進めていかなければなりません。当フォーラムでは、国内を中心として３Ｒ活動を推進しているわけですが、引き続き環境省や地方自治体、また民間団体等と連携して、今後とも循環型社会形成に向けて積極的に３Ｒ活動を推進して参る所存でございます。

皆様の一層の御協力をお願いいたしまして、御挨拶とさせていただきます。どうもありがとうございました。

（2）来賓挨拶

●嘉見博之氏（徳島県議会議長）

本日ここに第11回３Ｒ推進全国大会が盛大に開催されるに当たり、徳島県議会を代表してお祝いの言葉を申し上げます。

本日は、全国から多くの関係者の皆様に徳島にお越しいただきまして、誠にありがとうございます。心から歓迎申し上げます。

そして、この後、栄えある表彰を受賞される皆様方に対しまして、心からお慶びを申し上げますとともに、その御功績に対しまして、深く敬意を表する次第でございます。

さて、御存知のとおり、我が国はこれまで大量生産、大量消費、そして大量廃棄型の社会をつくり上げることによって、豊かで便利な生活を得ることができました。しかしながら、その結果として膨大な廃棄物の排出による環境への負荷が深刻化をして参りました。さらには天然資源の枯渇までもが懸念される状況になっております。美しい地球を守り、限りある資源を未来の子供たちに引き継いでいくためには、３Ｒ活動をより一層推進し、早急に循環型社会を構築していくことが何よりも肝要であると存じます。これまで皆様方の取組により、３Ｒという考え方が国民全体に広がり、環境に対する意識も大きく向上しておりますが、この３Ｒ推進全国大会を契機として、循環型社会の構築のため、さらに御活躍をいただきますよう、お願い申し上げる次第でございます。

また、せっかくの機会でございますので、時間の許す限り、徳島県での滞在を満喫して、その魅力に触れていただければと思います。

結びになりますが、本大会の開催に当たり、多大なる御尽力を賜りました環境省を始め、関係者の方々に対しまして深く敬意を表しますとともに、本大会の御成功と、並びに本日お集まりの皆様方のさらなる御活躍を祈念いたしまして、私のお祝いの言葉とさせていただきます。

本日はおめでとうございました。

（３）表彰式

●平成28年度循環型社会形成推進功労者環境大臣表彰

循環型社会形成推進功労者環境大臣表彰は、先駆的又は独創的な取組により、循環型社会の形成について顕著な成果を上げている企業、団体又は個人に対して、環境省が毎年表彰しているもので、平成28年度は、企業７件、団体11件、個人１件が表彰されました。受賞者と功績内容は以下の通りです。

区分	都道府県	企業名・団体名・氏名	取組内容
企業	北海道	株式会社きのとや	平成17年より搬入・搬出作業用の段ボール箱のコンテナへの切替えを開始し、以降、容器びんの回収、食品残さの再資源化に取り組んできた。さらに、平成24年にはお菓子の切れ端を活用した製品の開発・販売を開始するなど、ゼロ・エミッションに向けた取組を展開している。
	北海道	生活クラブ生活協同組合北海道	全国の生活クラブ生協と連携し、生産者・地域の資源回収業者の協力のもと、平成5年に独自のびん再使用システムを構築し、回収率90％を目指している。平成26年度の回収実績は76.9％となった。
	岩手県	株式会社エヌエスオカムラ	金属製品の塗装に必須の前処理工程では、スラッジの発生が不可避であったが、処理工程の見直しや技術開発により年間15トン発生していたスラッジをゼロにするとともに、平成27年度には、工場全体の熱原単位の前年度比16％削減に成功した。
	東京都	サントリー食品インターナショナル株式会社	ペットボトルの環境負荷低減のために、3Rを進化させた「2R＋B」（リデュース、リサイクル、バイオ）戦略に基づき開発・設計に取組み、平成28年には世界で初めて飲料用ペットボトルに植物由来原料30％を使用したキャップを導入した。
	東京都	森永乳業株式会社東京工場	平成25年に微細な気泡を排水に吹き込むファインバブル装置を導入して、平成27年度には汚泥発生量を平成24年度比約80％削減するとともに、平成25年よりこれまで食品廃棄物として処理してきた豆腐おからを乳酸発酵させサイレージ飼料を製造し、酪農家に全量販売するようになった。また、この飼料を食べた牛の乳を工場で受け入れて乳製品の原料としている。
	長野県	株式会社星野リゾート軽井沢事業所	ホテル事業による周辺環境への負荷を最小限にとどめながら、最高の顧客満足度と利益を生み出すことを企業ビジョンとし、平成12年からゼロ・エミッションに取り組む。平成23年11月にはホテル業界初のゼロ・エミッションを達成した。
	岐阜県	株式会社りゅういき	下水汚泥の土質固化材へのリサイクルを異業種交流により進め、平成9年に岐阜県リサイクル認定製品の第1号となった。平成19年度からは、下水汚泥のバイオマス燃料化に取り組むなど、下水汚泥の完全リサイクル化の取組を実施している。
団体	埼玉県	志木市くらしの会	昭和50年から資源の有効活用、生産者・販売者・消費者の相互の意思疎通をテーマにし、資源の有効活用法を提案する消費生活展やリサイクル講習会を実施。また、夏休み子ども消費者教室の開催など地道な活動を続けている。
	石川県	石川県リサイクル認定製品取得企業連絡協議会	平成13年から県のエコ・リサイクル認定製品の認定を受けた企業が集まり、認定製品の利用拡大とリサイクル産業の発展のため、各種イベントへの出展やPR等を、全国に先駆けて実施している。
	静岡県	消費研究グループいそじ会	昭和51年の結成以来、ごみ減量、再資源化について市民への啓発活動を実施。上質紙の回収事業や不要になったバスタオルから防災ずきんを作る等の再利用製品の作成実習、小売店への包装改善依頼などを実施している。
	京都府	京田辺エコパークかんなび	平成19年より京田辺市のごみ処理施設の一フロアを借り、市民から出た不用品を引取り、点検・修理して市民に安価で販売する活動を実施。さらに不用品の再活用のための教室も実施。
	鳥取県	鳥取県商工会女性部連合会	ごみの減量・リサイクル活動を20年間実施。平成23年度からはミックスペーパーのリサイクル、段ボールコンポストを推進。また、平成26年からは県内でいち早く食品ロス削減の運動にも取り組んだ。
	徳島県	NPO法人ゼロ・ウェイストアカデミー	平成17年よりゼロ・ウェイスト社会をつくるために、34分別を行う上勝町内唯一のごみ資源集積所の管理や、不要となった衣類・雑貨等のリユースや布類からリメイク商品の作成販売する施設を運営。さらに、全国から訪れる多くの視察者の対応等も行っている。
	福岡県	学校法人本城学園本城東幼稚園	平成16年から資源ごみの回収を開始し、現在では生ごみの堆肥化を園児とともに行い、その堆肥を使用した野菜栽培から調理まで関わることで、食べ物の大切さを園児に教えている。そのほか、保育参観での環境教育や園だよりを通じて保護者へのエコの普及を図っており、さらに地域にも資源回収などの活動を広げている。
	福岡県	洞南四地区活性化委員会	平成17年から地域の祭りである祇園山笠競演会後のごみ拾いを開始。平成22年度からは資源ごみ回収とエコ活動の啓発を目的としたイベントを年2回開催するなど、地域一体型のエコ活動を目指している。
	福岡県	NPO法人こすみんず	廃食用油の回収事業を地元飯塚市に提案し、平成20年には市内3自治会をモデルとした廃油回収事業を実施。その結果を踏まえ授産施設でのバイオディーゼル燃料の製造、それを市の公用車で活用するという仕組みを構築した。
	福岡県	ボランティア団体おもちゃ病院伊都国	平成19年より壊れたおもちゃを無償修理する「おもちゃ病院」を開始。また、「おもちゃ修理体験学習支援」などの多角的な活動を実施し、子供たちや地域住民への環境意識の定着化に寄与している。
	熊本県	NPO法人熊本県有機農業研究会	発足以来、有機農業の普及だけでなく、菜の花栽培から廃食油の回収とバイオディーゼル燃料の農業機械での使用を進める「菜の花プロジェクト」の実施や、竹チップを使った堆肥化等を実施してきた。平成22年からは、毎年開催のイベントにおいて、食器洗浄を授産施設に依頼してリユース食器を導入するようになった。
個人	佐賀県	西本勝次	多年にわたり3Rの推進に多大な功績を残してきた。平成23年度からは市区長会長・環境衛生推進協議会長としてマイバックキャンペーンや生ごみの堆肥化等を推進するなど、循環型社会形成のためにリーダーシップをとってきた。

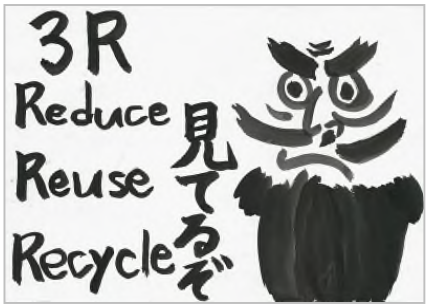
循環型社会形成推進功労者の表彰式（写真左は企業の部、右は団体・個人の部）

●平成28年度３Ｒ促進ポスターコンクール最優秀賞表彰

３Ｒ促進ポスターコンクールは、環境省と３Ｒ活動推進フォーラムが全国の小学生と中学生を対象に、３Ｒを促進するための普及・啓発用ポスターを公募し、優秀な作品を選考・表彰することにより、国民一人ひとりが循環型社会のあり方について考えるきっかけにすることを目的としています。募集は平成28年６月10日～９月13日の期間に行われ、小学生低学年の部783点、同中学年の部2,163点、同高学年の部2,628点、中学生の部2,884点、合計8,458点の応募があり、各部門で、最優秀賞１点、優秀賞３点、佳作10点を選定し、大会で最優秀賞の表彰を行いました。なお、大会会場では入賞作品のパネル展示も行いました。最優秀賞受賞作品は以下のとおりです。

◆小学生低学年の部
栃木県大田原市立薄葉小学校１年

◆小学生中学年の部
宮城県亘理郡山元町立山下小学校４年



◆小学生高学年の部
岐阜県海津市立石津小学校６年

◆中学生の部
香川県丸亀市立飯山中学校１年

３Ｒ促進ポスターコンクール表彰式の模様（写真上）と入賞作品のパネル展示（写真下）

３．記念シンポジウム「とくしまから発信！広がる つながる ３Ｒの輪」

（１）講演「循環型社会の道筋を展望する」

３Ｒ活動推進フォーラム会長

慶應義塾大学経済学部教授　細田衛士氏

（略歴）

1977年に慶應義塾大学経済学部卒業。1987年慶應義塾大学経済学部助教授、1994年同学部教授となり現在に至る。大学で「環境経済論」を教えるかたわら、環境省中央環境審議会委員などを務めています。廃棄物やリサイクルの問題などを経済学の観点から分析し、循環型社会のあり方を検討している。

今日は、「循環型社会の道筋を展望する」というタイトルでお話しさせていただきたいと思います。毎年、この大会で話をさせていただきますが、今日はちょっとスタンスを変えて、平成28年度版環境白書・循環型社会白書・生物多様性白書から見る日本の資源循環ということで、いわゆる環境白書をひも解いてみようと思います。環境白書はすごく厚いのですが、最近は、ネットダウンロードしてＰＤＦですぐ見られるので、私の話を聞いて、「あ、おもしろいな」と思ったらぜひダウンロードして見ていただければと思います。

●日本の資源循環

これ（図1）は物質フローと書いてありますが、私たちの体と同じです。私たちは、空気、酸素を取り入れ、それから栄養物を口から取り入れて、体の中に栄養分を取り入れる。一部体の中に蓄積します。健全に蓄積して、そのエネルギーで活動する。私たちは、寝て呼吸するだけで大体1,400キロカロリーぐらい必要です。カツ丼１杯ではだめです。カツ丼１杯は多分900キロカロリーぐらいですから、それプラスアルファ2,400キロカロリーぐらいあると運動ができ、勉強ができ、活動ができるようになります。蓄積もできる。経済も同じです。左側から栄養分、つまり資源とかエネルギーを取り入れて、経済活動で使って、社会活動で使って、要らないものは出していく。このクルクル回る部分が循環利用といって、もったいないから捨てないで使う

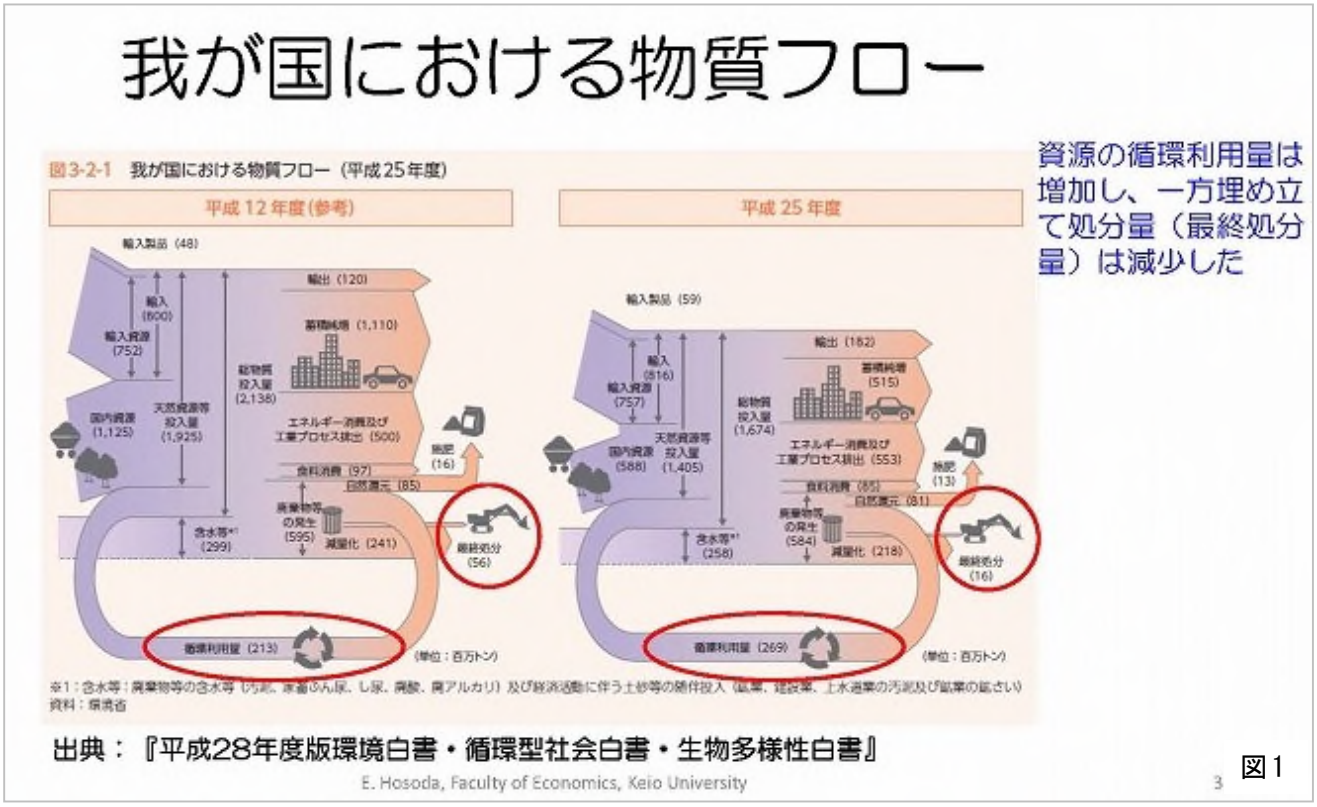


図１

部分です。最終処分が、平成12年度の5,600万トンから平成25年度の1,600万トンへと、随分減っています。捨てる部分が減り、循環的に利用する部分が増えている。つまり、リデュース、リユース、リサイクルでどんどん使いまわしている経済になっていることがわかると思います。

これ（図2）は、皆さんが一番なじみのあるある家庭から出るごみとか、事業所から出る一部のごみの流れです。大体１年間に4,500万トンぐらい出て、それを集団回収してリサイクルするなり、また、ごみステーシ

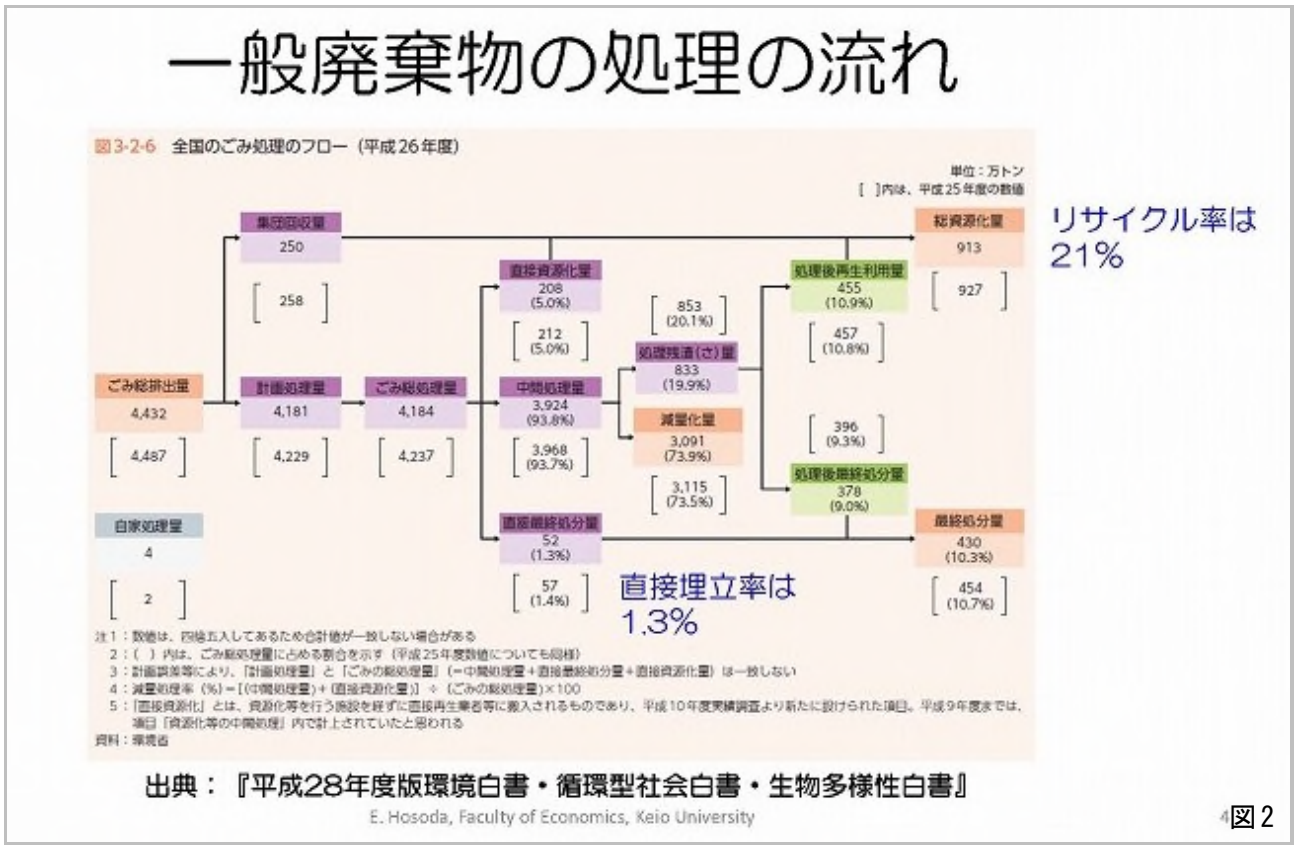


図２

ョンから市町村の人に持って行ってもらって、中間処理、焼却する。リサイクルしたものが大体913万トンで、最終処分するものは430万トンとなっています。一般廃棄物のリサイクル率は約21%、最終処分、埋め立てる量は大体10%。ただ、ここで気をつけていただきたいのですが、直接埋め立てるものは1.3%にすぎない。もちろんリサイクルしてもリサイクルできないものが残るし、焼却しても焼却の残渣が出るので、それは埋め立てなければいけない。それらの間接埋立を含めると10.3%。埋立が1.3%というのは、すごいパフォーマンスで、ＥＵもできない。ただ、ヨーロッパの場合はリサイクル率が、コンポストを含めないと、27～28%になっているので、この辺はまだまだ日本が後塵を拝しているわけで、もっと３Ｒを進めていかなければいけない。

これ（図3）が今度は事業活動から出てくる産業廃棄物ですね。産業廃棄物は一体どれぐらい出るかというと、３億8,000万トン、そのうち、やっぱり直接的にリサイクルする部分があって、あるいは中間処理して、そこからまたリサイクルするものもあります。中間処理した後、どうしても最終処分場で埋め立てなければならないのですが、全体で３億8,000万トンぐらい出ている。このうち再生利用（リサイクル）するのが2億7,000万トンで、リサイクル率は大体53%です。一般廃棄物の場合は21%のリサイクル率ですけど、産業廃棄物の場合は約53%もリサイクルしている。それで、最終処分量、つまり埋立は、直接埋立が２%、間接埋立を含めても３%にしかならない。ということで、産業廃棄物の場合は、随分埋め立てる量を減らしていることがおわかりになると思います。

これ（図4）が、産業廃棄物の内訳です。よく産業廃棄物というと、我々とは違う世界のことのように思われる方がいるかもしれませんが、実は私たちの生活に身近なものはいっぱいあります。例えば電気、ガス、水道等から出てくる廃棄物や、農業からも、例えば農業用のビニールシートとか、牛や豚を飼っている人からは、糞尿や動物の死体が出てきます。それから、私たちが家を建てたり、橋を利用したり、古い建物をリノベートしたりしていますが、そういう建設業から出てくるものも結構あります。このように、実は私たちがすごく恩恵を被っているものも産業廃棄物として出てくるということを、ぜひ覚えておいてください。

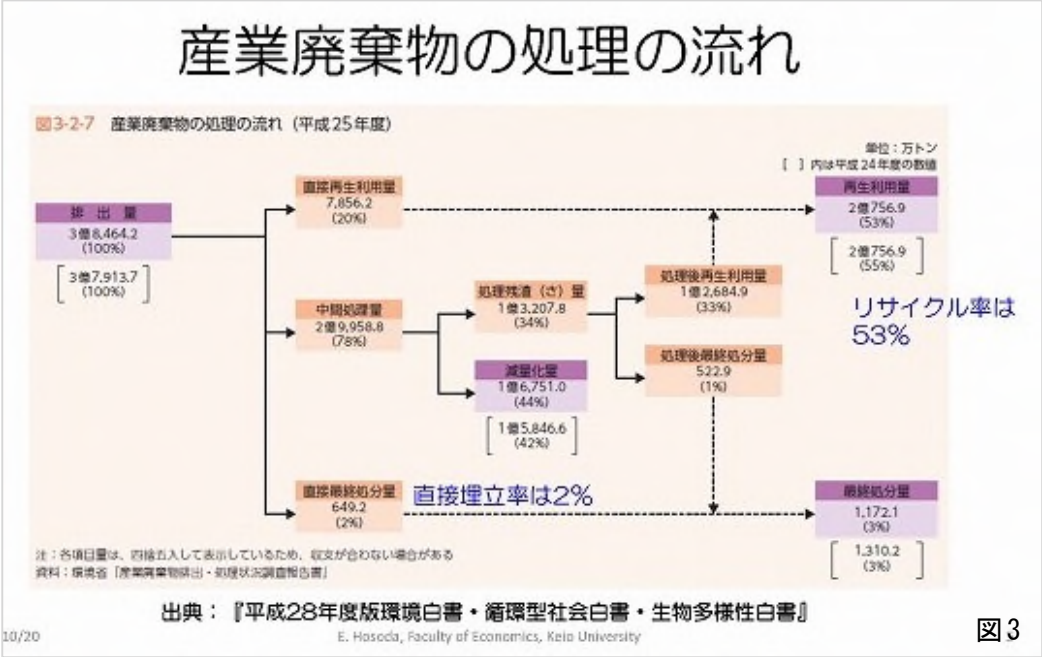


図3

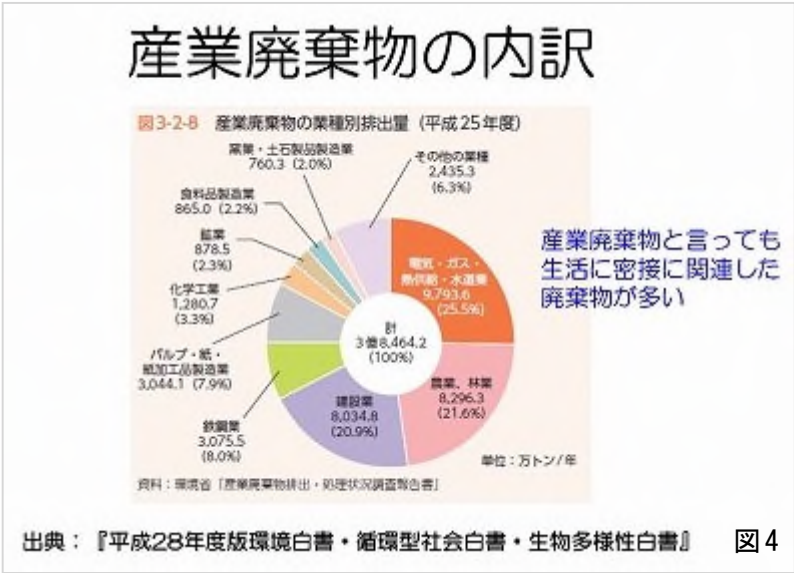


図4

では、私たちのごみの排出は、どのぐらいの規模でどれぐらい変化してきたのでしょうか。

これ（図5）は、一般廃棄物排出量の推移です。昭和62年から平成元年にどんどん増え、とうとう平成12年には5,483万トンと最も多くなった。実は、この時はもうバブルは終わっていましたが、その後も人々はごみを出し

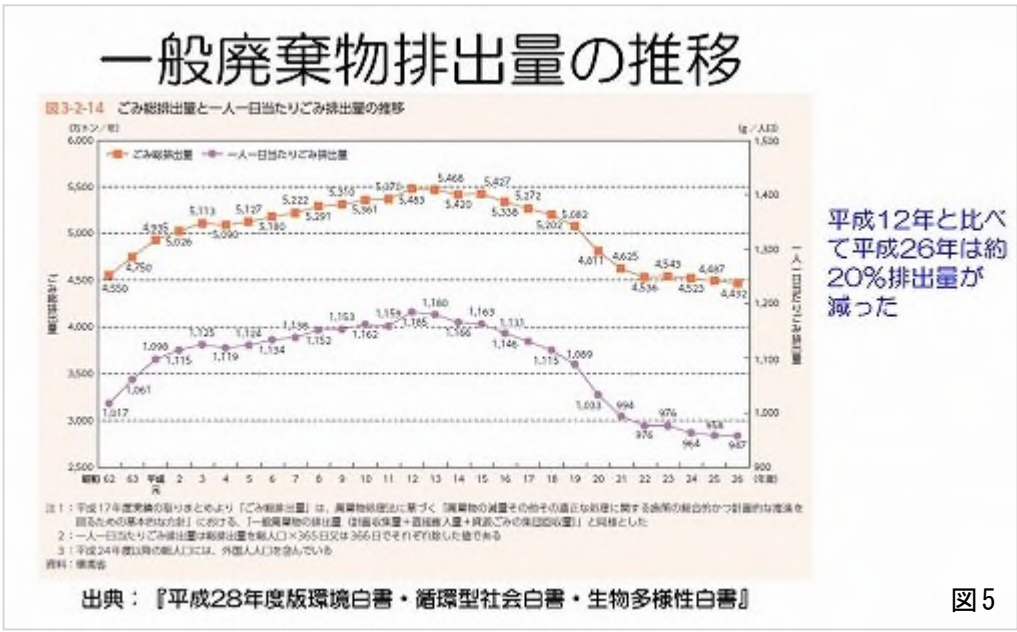


図5

続けました。つまり、ここに気をつけていただきたいのですが、私たちの生活習慣というのは、一度なじんだら、なかなかそれを捨てられません。その結果、ごみがどんどん出てきて、平成12年ごろまでごみが増加し続けました。その後、ごみがだんだん減り始め、今4,400万トンで最も多い時から1,000万トンも一般廃棄物が減りました。これはすごい努力です。国の努力でもあり、市町村の努力でもあり、一番は皆さんの努力です。簡易包装にしたり、マイバッグに変えるなど、リデュース、リユース、リサイクルを進め、この努力が実ってこれだけごみを減らしました。下の折れ線グラフは、１人１日に出すごみの量ですが、ざっくり言って１キログラムです。それも昭和62年ごろからだんだん増えて、やっぱり平成12年には1.185キロ、1,185グラムへと200グラムも増えました。そこから今は950グラムです。１キログラムを切ったということは、私たちも発生抑制に努力しているということです。

これから東京オリンピックに向けて、全国でいろんな会場の建物が建ちます。そうするとごみも出てきます。今、減らす努力もしています。例えばリニア新幹線を通すと、残土が出てきます。残土は廃棄物ではないのですが、経済活動の一環として捨てなければいけないものは出てきてしまう。産業廃棄物は、一般廃棄物と違って景気に影響されやすい。ですから、図（図6）のように波を打っています。産業廃棄物もようやく平成17年を契機に下がり始めてきています。どれぐらい出てきたかと言いますと、一般廃棄物の実は８倍です。一番大きいときは４億2,200万トン。今はようやく４億トンを切り、３億8,500万トン。一般廃棄物は5,000万トンの壁を切って下がり、産業廃棄物も４億トンの壁をようやく切るようになった。リサイクルによって最終的な埋立処分を減らすという排出抑制を日本は長い間進めてきましたが、日本はもとからごみを絶つということは苦手でした。それがようやくできるようなった。一般廃棄物は平成12年から、産業廃棄物は平成17年ごろから元を断って、ごみを出さなくすることが可能になってきました。

図6

今度は、一般廃棄物の話に戻ります。図（図7）は１人当たりの排出量と最終処分量を示しています。日本は38万平方キロメートル、そのうちの25万平方

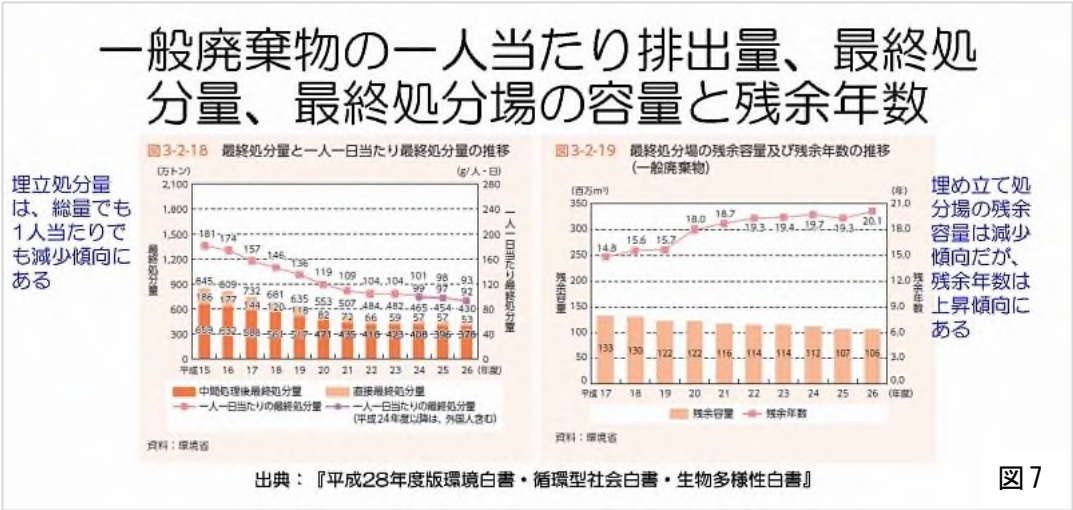
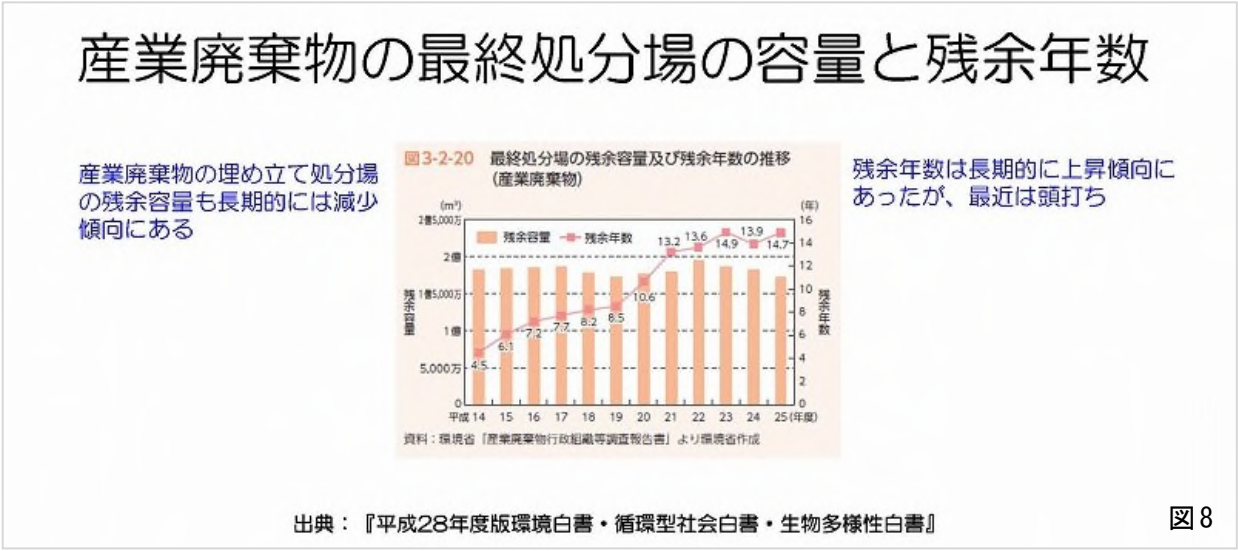


図7

キロメートルは森林です。残された3分の1に人々がひしめき合って住んでいて、そこで経済活動をし、出てくるごみを捨てています。ということは、埋立処分場も私達の生活圏にあるということです。これは大変ですね。誰もごみの埋立処分場が近くにあることをあまりよしとはしません。でも必要です。埋立処分をゼロにはできないので、今ある埋立処分場を大事に使うことが必要です。今ある天然資源、これは将来世代も使わなければいけない。同じように、今ある埋立処分場も大事に使わなければいけないということです。そうすると、最初の図（図1）でいうと、天然資源の投入量を抑えて、３Ｒを進めることによって埋立処分も減らす、つまり、入り口と出口のパイプを絞って、循環のパイプを増やすしかありません。

図（図7）の折れ線は１人１日当たりの最終処分量で、平成15年には１人１日181グラムに相当するごみを埋め立てていた。ところが今は100グラムを切っています。相当埋立処分量を減らしてきた。徳島県のほとんどの市町村がそうだと思いますが、埋立処分場はほとんどありません。だから、今ある処分場を大事に使うしかない。図7を見てください。最終処分場の容量がだんだん減っています。だけど、希望があります。それは、上の折れ線です。これは残余年数といって、あと最終処分場をあと何年使えるかという数字です。平成17年にはあと15年しかなかったのに、平成26年には20年に増えています。なぜ最終処分場の容量、キャパシティーが減っているのに、残余年数は増えているのでしょうか。そうです。先ほど話した循環のパイプを増やしたからです。つまりインプットを絞って最終処分として捨てるものを絞ると資源としての循環利用が増えている。そうすると埋立処分場を使わなくていいわけです。だから残余容量が減っても、それ以上に埋立処分場に捨てる量を絞っているから、残余年数が増えているのです。これが希望の光です。だから、皆さん、いかに３Ｒが大事かわかるでしょう。天然資源も大事、今ある最終処分場も大事、両方とも大事に使わなければいけないとしたら、循環利用を増やして最終処分場の残余年数を増やして、石油、天然ガス、それから石炭、銅、鉄、そういう天然資源を使う量も減らしてやる、これが重要なことなのです。

同じことは産業廃棄物にも言えます。これ（図8）も、残余容量はあまり増えていません。長期的に言うと、実はこれはずっと減っています。最近では産業廃棄物の最終処分場を見つけるのはなかなか大変です。新しくつくることはとても難しい。適切な場所を見つけるのが難しいのです。だけどこの折れ線を見てください。やっぱり希望の光です。平成14年にはあと4.5年で最終処分場は終わりという数字だったのです。ところが猛烈に努力して、産業廃棄物も循環利用するなど、リデュース、リユース、リサイクルが進んだために、この折れ線で示すとおり、どんどん最終処分場の残余年数が増えて、今14.7年まで増えています。ただ、油断はなりません。なぜかというと、今までは残余年数が増えてきましたが、最近ちょっと頭打ちになっています。ひょっとすると、下がってしまうかもしれない。そうすると最終処分場がないという困った事態になります。



だから、私たちはもっと３Ｒを進めていかなければいけないということです。

希望の光はまだほかのところにもあります。これ（図9）は産業廃棄物の不法投棄の状況を示していますが、不法投棄も随分減りました。平成10年から13年までは不法投棄件数が1,000件以上あって、悩みの種でした。ところが最近では200件以下まで減らすことができました。だけどこれはもっと減らさなければいけない。そのためにはどうしたらいいか。それは、この廃棄物にかかわる人たちが日本の将来を考えて、健全なビジネスをするということが求められるということです。では、健全なビジネスといったときに一体どういった方々に努力していただきたいか。これ（図10）見てください。産業廃棄物の不法投棄の内容ですけど、平成25年、26年では、大体がれき類とか木くずなど建設系の廃棄物が８割です。先ほど申しましたように、建設系の廃棄物は、産業廃棄物の中でも20%と多い。建設系は多かれ少なかれ私たちがお世話になっていて、この建物

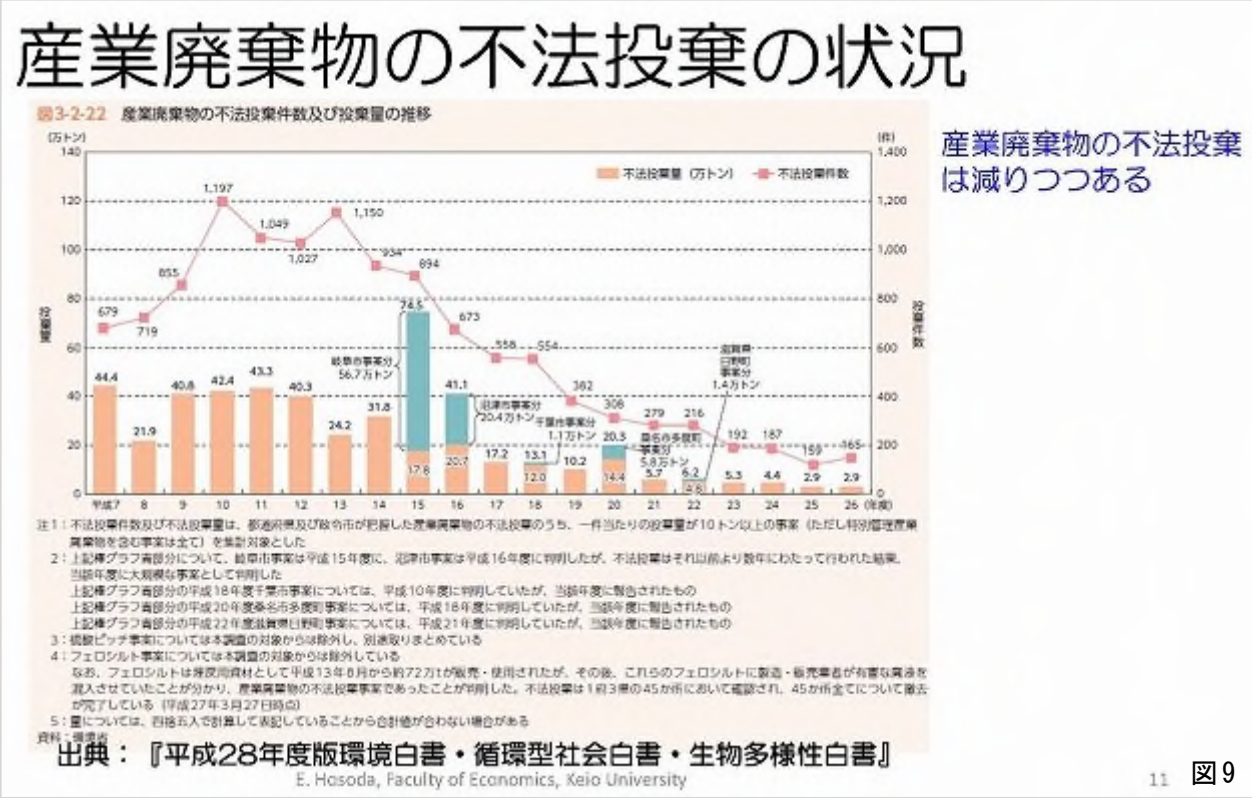


図9

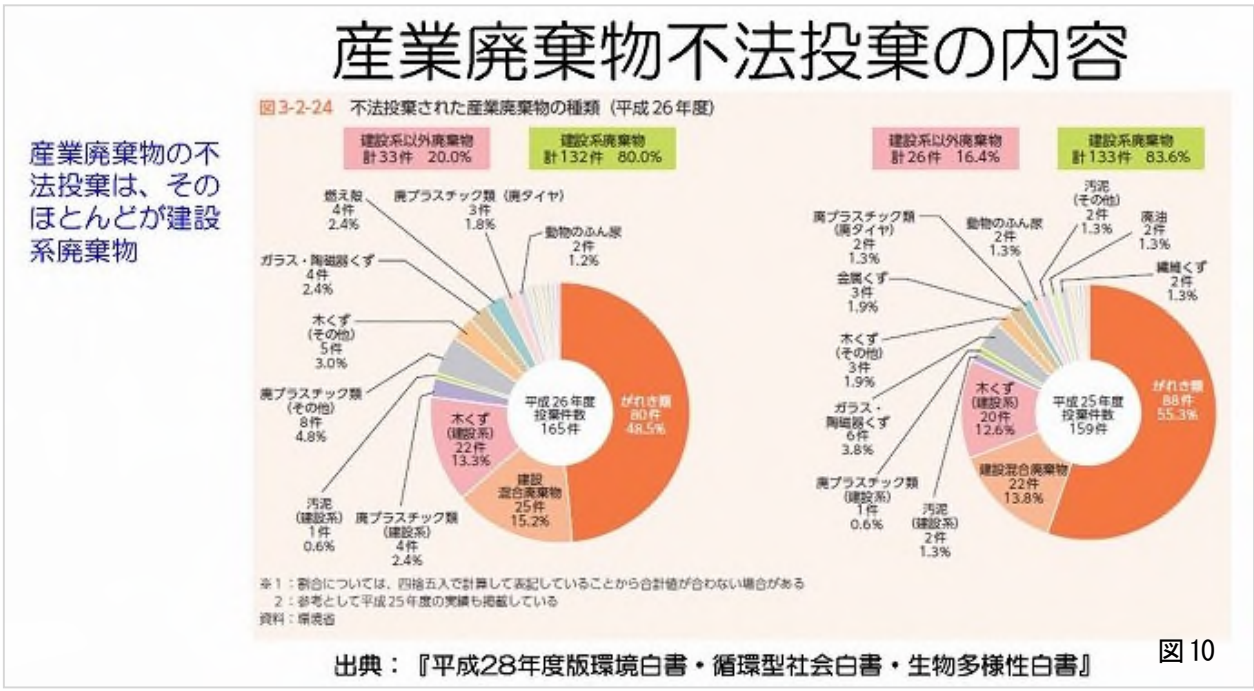


図10

も50年あるいは60年経ったら壊されるかもしれない。そのときに、かなりリサイクルされると思いますが、一部はどうしても埋め立てなければならない。それを悪い業者は不法投棄してしまう。そうすると土地が汚染されて大変なことになります。それを絶対止めなければいけない。そのためには、ビルのオーナーであるとか、解体する人とか、あるいはそれを監督する人、県も市町村も、みんなが協力してこの不法投棄をやめさせなければならない。

●リサイクルは進んだか

そこで、これからのことを考えましょう。リサイクルは進み、循環のパイプを太くしたから最終処分場を使うのを減らすことができた。残余容量は増えています。これ（図11）がリサイクル率の推移です。これは環境省のいろんなデータをつなげて私がつくったものですが、上が産業廃棄物、下が一般廃棄物、長期的にはともに伸びています。一般廃棄物の場合は、５％ぐらいから始まって、今21％ぐらいのリサイクル率です。産業廃棄物の場合は、大体40％から始まって50数％にきています。長期的には伸びていますが、最近は頭打

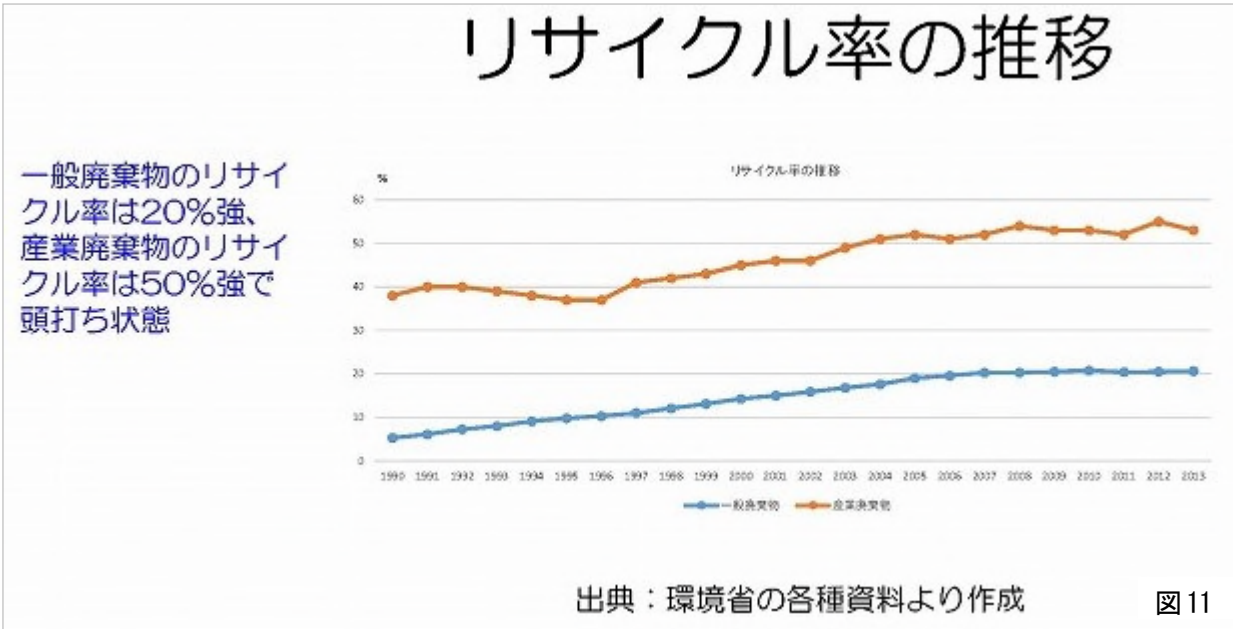


図11

ちになっています。ＥＵ、ヨーロッパ連合は、一般廃棄物のリサイクル率は27％ぐらい、コンポストを入れると50％ぐらいになります。日本はＥＵに負けています。悔しいじゃないですか。日本人みたいに真面目の人たちがＥＵに勝てないというのは、もう少しいろいろ努力が必要だと思いませんか。我々はできます。オバマ大統領ではないけれど、“Ｗｅｃａｎ”ですよ。それをこれからやっていかなければいけません。

では、個別の品目を見てみましょう。古紙の回収率は80％、青がリサイクル率で64％、結構進んでいます（図12）。少しは優等生。だけど、考えてほしいのは、サイエンス。データを見て、「あれ？」というクエスチョンマークを必ず持つことが重要。リンゴが落ちて当たり前だと思ったらサイエンスは出てこない。「なぜ」という問いが必要。

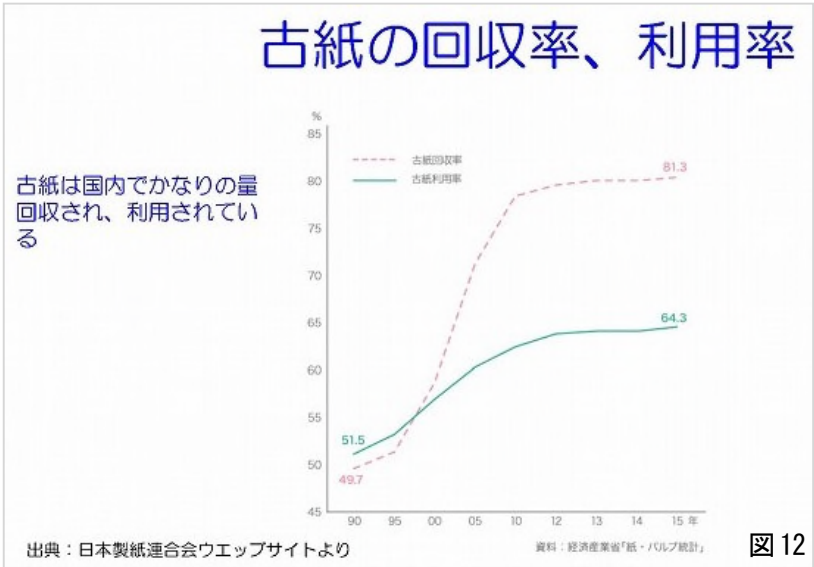


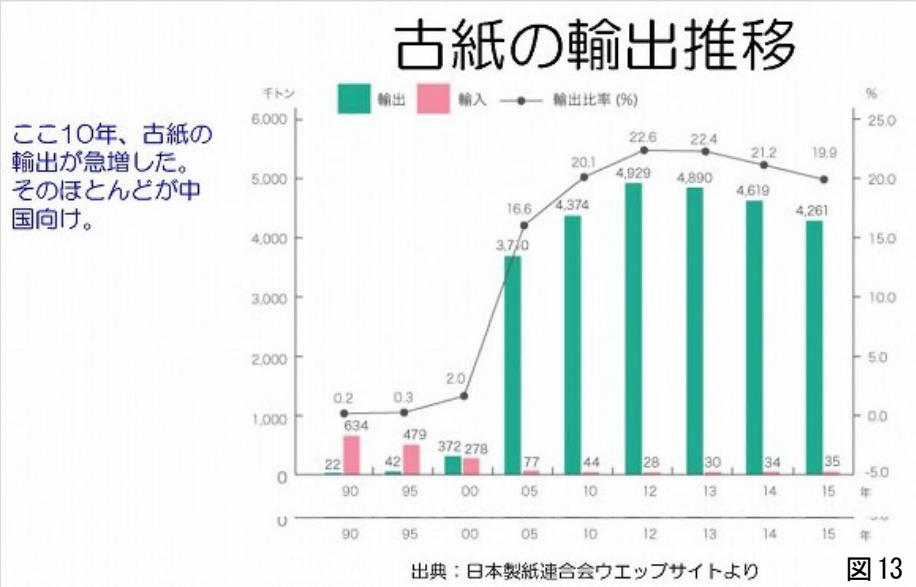
図12

なぜ、回収率は80%なのに利用率は64%なのか。

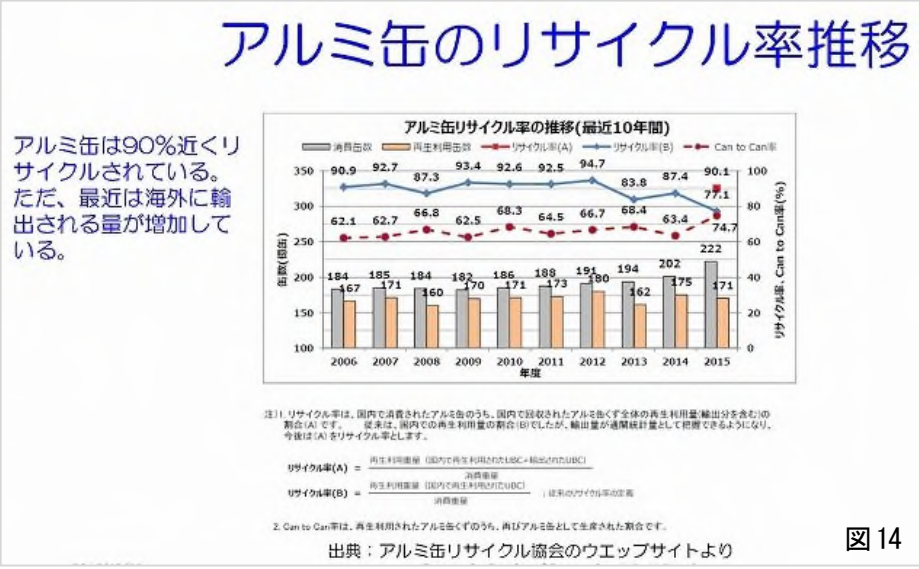
その理由がこれ（図13）です。大量の古紙が最近輸出されるようになりました。輸出が悪いとは私は思いません。ただし、中身を見ると、もしかして悪いかもしれない。今では、率としては20%ぐらい輸出されています。だから、先ほどの図（図12）で見ると、８割回収して６割がリサイクル率ですから、残りの20%は海外に出ているということになります。

これ（図14）はアルミ缶のリサイクル率ですが、アルミ缶は優等生で９割リサイクルしていたのですが、いきなり７割に落ちました。これはなぜか。ここに赤い点が書いてありますがこれは、海外で行われているリサイクルも含めたもので９割になります。これ（図15）を見てください。アルミスクラップの輸出です。近年、アルミスクラップが相当海外に流れている。その多くは、中国や韓国です。アルミは日本ではとれません。日本は無資源国です。その無資源国の日本が、貴重なアルミをどんどん海外に輸出しているのは変ですね。

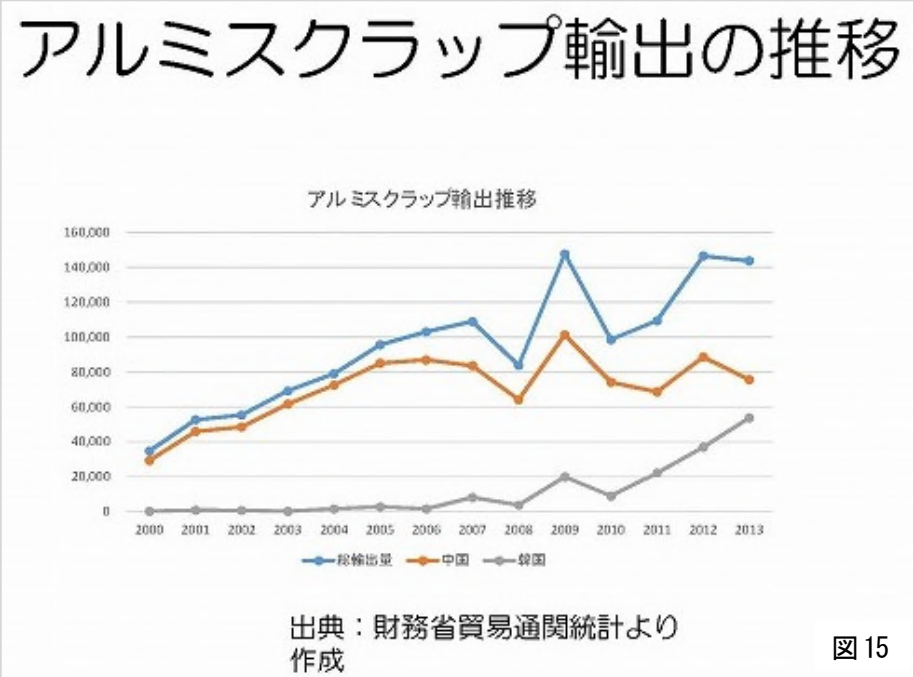
ペットボトルの場合（図16）は、日本も優秀で９割方回収していますが、40万トンぐらいのペットボトル



出典：日本製紙連合会ウエッブサイトより　図 13



出典：アルミ缶リサイクル協会のウエッブサイトより　図 14



出典：財務省貿易通関統計より作成　図 15

が海外に出ている（図17）。日本で発生するのが60万トンから70万トンぐらいですから、半分ぐらいが海外に出ている。日本は、３Ｒで一生懸命頑張ってごみを減らしてきました。最終処分量もそこそこ減らしてきた。だけど、集めた資源ごみを再資源化して海外に流している。無資源国の日本が、なぜでしょうか。国内で回収された使用済み製品、部品、素材のかなりの部分が海外に流出してしまっています。つまり、日本国内での資源の循環利用がちょっと停滞している、リサイクル率が止まっているということが、そこに表れています。ということは、私たちはごみを減らして３Ｒを推進してきたが、そこからできた資源を国内でうまく使い回すということができてない。ＥＵはこれにつき進んでいます。一週間前にオランダもすごいプランを出しました。フランスはもう2020年までワンウェイプラスチックはだめ、スーパーの食品ロスは全部フードバンクに回すか最低エネルギー回収してくださいと言っている。ヨーロッパはどんどん資源循環の方向に舵を切り始めているのに、日本はなぜか今、安心している状況です。ちょっと困ったことです。

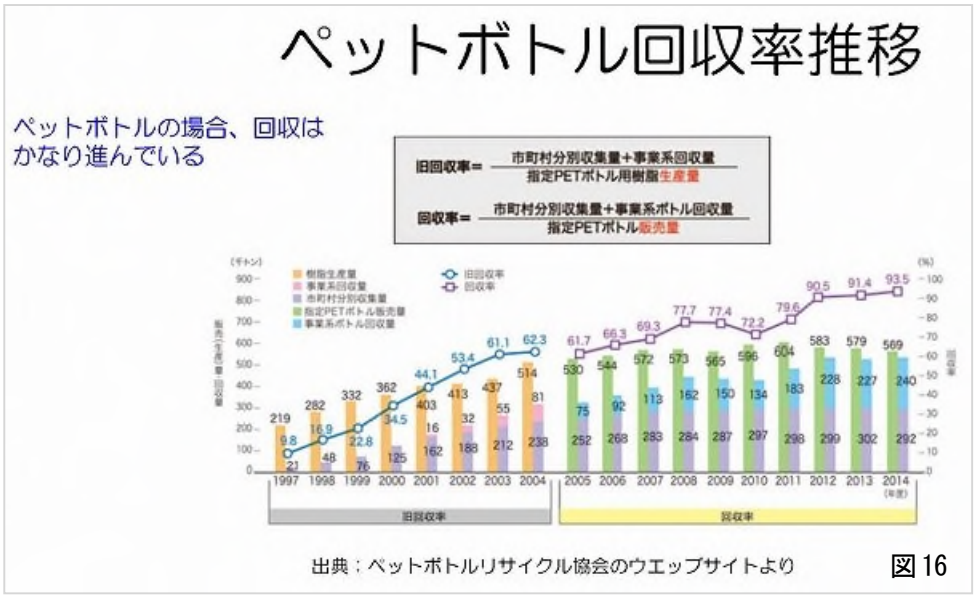


図16

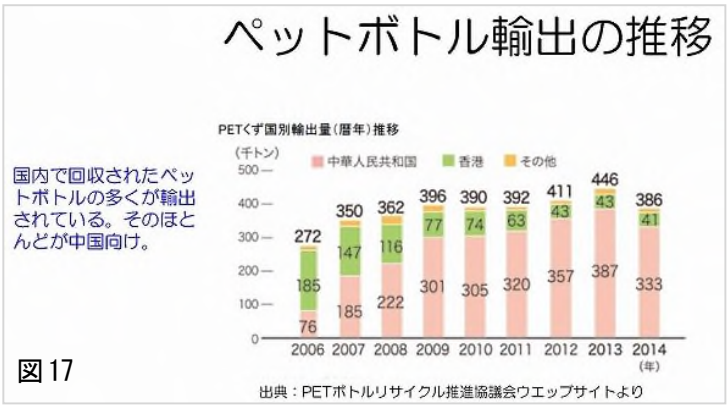


図17

●資源循環の目標

これ（図18）は循環型社会推進基本計画という計画でつくっている目標で、資源生産性、資源を投入してどれぐらいＧＤＰをつくるかというと、１トン当たり今40万円弱ですが、これを平成32年までに46万円にするというものです。まだ現状に比べてギャップがあります。この状態からもう少し資源生産性を上げ、つまりインプットを少なくして、より多くのＧＤＰを出さなければいけない。

これ（図19）が循環利用率です。循環利用率は、投入した資源の中でどれぐらいリサイクル資源を使って

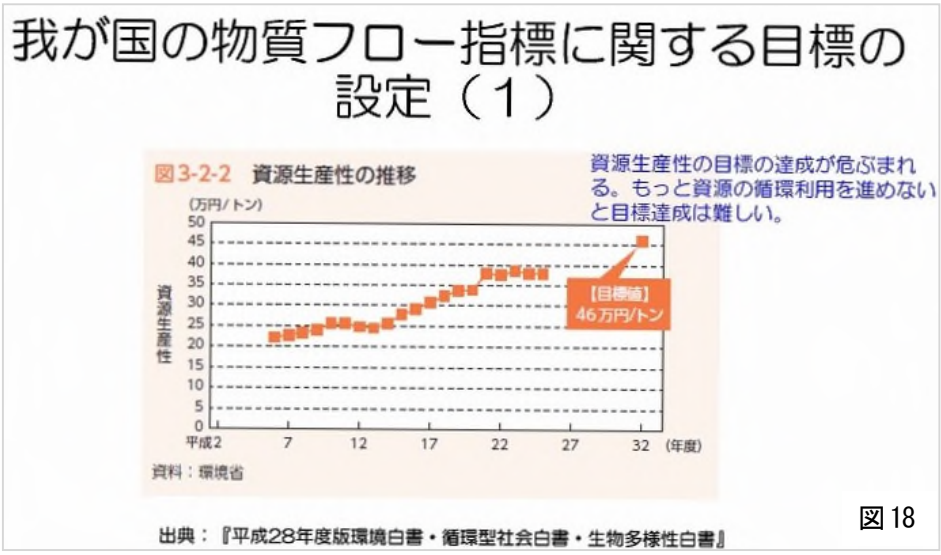


図18

いるかという割合を示すもので、目標は平成32年までに17%です。現在16%ですから、もうちょっと頑張れば達成できます。だけど、この頑張りはとても重要です。

最後は最終処分量の推移（図20）です。平成32年までに1,700万トンとする。今もう1,600万トンですから、これは達成してしまった。ということは、私たちはこの資源生産性と循環利用率をもっともっと高めなければいけないということになります。ですから、もっともっと私たちは循環型社会の構築に向けて努力しなければなりません。

図19

図20

●循環型社会構築に向けて

地球温暖化問題では、このままいけば海面が７メートルあるいは10メートル上がるかもしれないと言われています。2100年には化石燃料も燃やせないかもしれない。2050年には70%から80%の温室効果ガスを減らさなければいけない。そうしないと南極の氷が溶けてしまうかもしれない。アルプスの氷も溶けるかもしれない。事実、今、氷河がどんどん溶けています。18世紀、宮城県でオーロラが見えました。17世紀の中ごろから18世紀の中ごろまでヨーロッパは一番寒かった。テムズ川が凍り、ロンドンでオーロラが見えた。それが今、どんどん暖かくなっている。

図21資源のピークアウトに対しての備え

- 天然資源は枯渇しないが、徐々に少なくなってゆく（ピークアウト）。
- 地政学的な影響も受けて、今後供給が不安定になる恐れ。
- 天然資源（地下資源）に代替する地上資源（使用済み製品・部品・素材）の循環利用を高める必要がある。
- 天然資源は将来世代のためにとっておかなければならない。

これと同じように、私たちのごみの世界も大変です。天然資源は不思議なことに枯渇しないけれども、どんどん少なくなってきます（図21）。それからもう一つは、天然資源の供給国が偏っています。ロシア、南ア、中国、チリ、そういう地域で政治的な異変が起きたり、軍事活動が起きたら、供給が不安定になって、天然資源をとれません。天然資源に頼ってはおられません。つまり地下資源に代替する地上資源、都市資源の循環利用を高めなければいけません。それから天然資源は、私たちの子孫も使えるよう、将来世代に残しておかなければなりません。

さらに、生活に関連した問題（図22）ですが、プラスチック廃棄物と食品廃棄物は、今すぐにも解決しなければいけない問題です。このまま何もしなければ、2050年には海洋中にあるプラスチック廃棄物の総重量

は、魚の総重量と同じになってしまいます。しかも、マイクロプラスチックと言われるプラスチックが有害物質を吸着し、それを魚が食べてしまう。我々はその汚染された魚を食べなければいけない。こんなこと許されません。だとしたら、今すぐ廃プラに対しては行動を起こさなければいけないということです。

それから、日本の食品廃棄物の量は2,800万トン。そのうち、632万トンは食品ロスという、食べられるのに捨てられているごみです。世界にはまともに食べることができない人が約８億人います。だけど、私たちは食べられるのに捨てている。これはまずいですよね。これは倫理的に許されません。だとしたら、食品ロスを少なくする。仮に出たとしても、フードバンクなどに提供する。日本にも６人のお子さんのうちに１人は、いいですか、食べられない子がいます。３食まともに食べられない子が６人に１人います。だとしたら、仮に食品ロスが出たとしてもフードバンクを使ったりしてうまくその食品を捨てないようにして、いろんな人々に食が行き渡るようにするということが今後、ますます大事になると思います。

プラスチック（図23）はワンウェイの利用を止める。先ほど言いましたが、フランスでは決まりました。素材をリサイクルする、別回収する、それから、プラスチック廃棄物が自然の生態系に漏れ出ないようにする、こういうことをますますやっていかなければなりません。

繰り返しですが、食品廃棄物（図24）の場合は、食品ロスや食べ残しはなくす。食品ロスが出た場合はフードバンクなどを利用する。食べられない食品廃棄物は、できれば自宅でコンポスト化する。あるいは市町村がメタン発酵などによってエネルギー回収するのも一つの手。ただし、悪臭問題などが発生する恐れがありますから、周到な用意が必要になります。だけど、みんなの知恵を合わせてやれば、こういう資源の循環利用は可能になると思います。そういう食品ごみではない非有機系のごみの場合は、生産者を巻き込んだ回収、リユース、リサイクルなどの仕組みが必要になります。今ある個別リサイクル法をもっと有効に機能させ、回収率、リサイクル率を上げることが重要。そうすると循環利用率が上がっていく。国内での再生資源の循環利用を、私は進めなければいけないと思います。海外に出してはいけないということはないけれども、私たちが無資源国なのにどうして国内資源を使わないのかという発想が必要だと思います。

再生資源の規格や市場の整備、これは国、自治体の役割ですから、どうぞ環境省さん、あるいは自治体さん、頑張ってやりましょう。これが今日のメッセージです。

そして、自由で柔軟な発想が必要です（図25）。ＥＵではシェアリングが盛んになっています。

生活に関連した問題　図22

- プラスチック廃棄物と食品廃棄物は今すぐに対処すべき問題。
- このまま何もしなければ、海洋のプラスチック廃棄物の総重量は魚の総重量よりも大きくなるという予想。
- 日本の食品廃棄物の量は約2,800万トン、そのうち632万トンは食べられるもの、すなわち食品ロス。
- 世界にはまともに食べることができない人が約8億人もいるのに。

プラスチックの場合　図23

- プラスチックの容器包装についてワンウエイの利用を止める。
- これは既にフランスで決まったこと。
- 繰り返し利用し、使用できなくなったものは素材リサイクルする。
- それができなければ熱回収する。
- プラスチック廃棄物が自然環境中に漏れ出ないようにすることが重要。

食品の場合　図24

- まずは食べ残しをなくすことが重要。
- どうしても食品ロスが出た場合、フードバンクなどを利用する。
- 食べられない食品廃棄物は、できれば自宅でコンポスト化する。
- 市町村がメタン発酵などによってエネルギー回収するのも一つの手。
- 但し、悪臭などが発生する恐れもあるので、周到な用意が必要。

柔軟な発想の重要性　図25

- EUではシェアリング（車やオフィスなどを共有利用すること）、リマニュファクチュアリング（使用済み製品を元の状態に復元して利用すること）が進んでいる。
- 日本でもエアクロゼット、カーシェアリングが始まっている。
- 資源の節約利用、高度な循環利用を進めるためには多様な知恵の集積が必要。

車やオフィスを一人が一つ持つのではなく、みんなでシェアしましょう。あるいはリ・マニュファクチャリング、１回使い終わったもの、今日もこいのぼりとしては終わったものをジャケットにしたという話がありましたが、驚きの柔軟な発想です。これは、ダイバーシティです。多様な発想を取り入れれば、いろんなことができるはずです。日本でもエアークローゼット、つまり、クローゼットはうちにない。注文すれば服を届けてくれる。シェアリングです。あるいはカーシェアリングなどが始まっています。そうやって資源の節約利用、高度な循環利用を進めるためには、いろんな人々の知恵が必要です。環境省だけでやってもだめです。環境の研究者だけがやってもだめ、ＮＧＯだけやってもだめ、いろんな人がコラボする、これが大事です。３人寄れば文殊の知恵と言いますが、この日本の発想を高めていかなければなりません。

繰り返しですけれども、最終処分場と天然資源は両方ともなくなっていく（図26）。これを両方とも将来世代に残していかなければならない。それを進めるためには、地上資源を使う、そして個別リサイクルを有効利用する。そして、消費者、生産者、企業、国、自治体がダイバーシティのうちにコラボするということがとても大事だと思います。

日本は高度な３Ｒ技術を持っています（図27）。でも、まだまだ有効に利用し切れていません。技術は人々のコラボレーションの中で初めて生きてきます。だからこそ、今日の展示にあったような、各主体の責任と連携、協力のもとに新たな資源の循環利用のシステムを磨き上げる必要があります。もうＥＵではそれどんどんやっています。日本にできないことはありません。国内資源循環を進めるために、使用済みになった製品、部品、素材、そして有機系物質のフローをみんなでコントロールする。インプットを少なくし、アウトプットも少なくし、循環利用のパイプをどんどん太くする。再生資源の市場をもっともっと整備しようではありませんか。例えば、将来は埋め立て処分場に税などを課するような方法も市町村、あるいは県、国などで考えていただければとってもいいのではないかと思います。

御清聴ありがとうございました。これで私の話は終わらせていただきます。

図26 二重の資源制約から逃れるために

- 今人類は天然資源のピークアウトと埋め立て処分場のピークアウトという二重の資源制約に直面している。
- これを回避するためには、資源の節約的利用、資源の高度な循環利用を進めるしかない。
- そうしないと、将来世代に貴重な資源を残せないことになる。
- 地上資源（都市鉱山）の管理を進める必要がある。
- 個別リサイクル法はその一つの手法だが、まだまだ主体の巻き込みが少ない。
- 消費者・生産者・企業・国・自治体の連携・協力を強化する必要がある。

おわりに 図27

- 日本は高度な３R技術を持っている。
- しかしまだそれを有効に利用しきれていない。
- 技術はシステムのなかで初めて生きる。
- だからこそ、各主体の責任と連携協力のもと、新たな資源の循環利用のシステムを磨き上げる必要がある。
- 国内資源循環を進めるために、使用済み製品・部品・素材そして有機系物質のフローを制御すべき。
- 再生資源の市場をもっと整備しなければならない。
- 埋立処分には税を課するなどの方法も将来は考えるべき。

（2）成果報告「おいしい食べきり運動　昨年度３Ｒ推進全国大会の成果」

福井県安全環境部循環社会推進課主任　大石光紀氏

昨年11月に第10回３Ｒ推進全国大会を福井県で開催させていただきました。その際には、全国から多くの皆様にお越しいただきましたこと、心から感謝申し上げます。今回、私から昨年度の３Ｒ推進全国大会の成果を皆様に報告したいと思います。

昨年の大会では、大会行事としてパネルディスカッション「全国食べきりサミット～おいしい日本を食べきろう～」を実施しました（図1）。このディスカッションの最後に、本県からおいしい食べきり運動など食品ロスに取り組む自治体間のネットワークを形成して、継続的な情報共有と取組の拡大を図ることを提唱させていただきました。そして、今年度に入りましてから、本県から全国の自治体にネットワークへの参加を呼びかけましたところ、北海道から沖縄県まで日本全国44都道府県、201市区町村の自治体に御参加いただきまして、今月10日に「全国おいしい食べきり運動ネットワーク協議会」が設立されたところです(図2)。会長には３Ｒ活動推進フォーラム副会長の崎田裕子様、事務局は福井県循環社会推進課が務めます。設立に当たりましては、環境省、農林水産省、消費者庁の関係省庁から多大な御協力をいただきました。また、今後の協議会の活動もサポートしていただけると伺っております。本当にありがとうございます。

図1

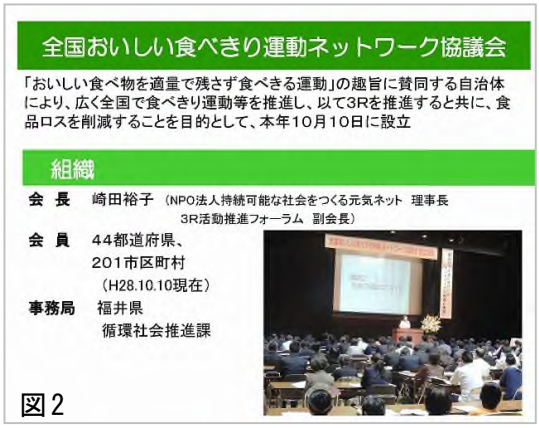


図2

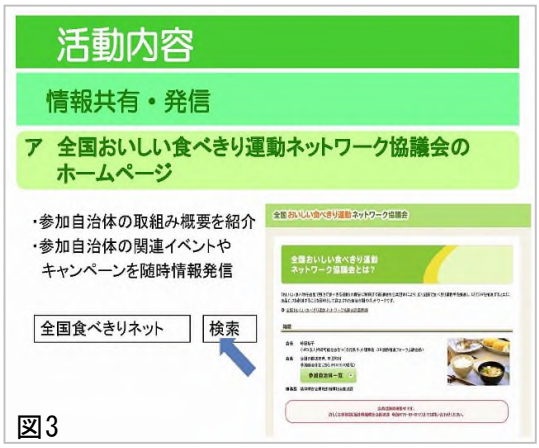


図3

今回、全国ネットワークづくりの行程で、崎田会長や関係省庁の方々、他の自治体の皆さんの御意見を伺う中で、全国おいしい食べきり運動ネットワーク協議会の役割は、食品ロス削減という目的に対し、住民が具体的な行動を起こすために、「おいしい食べきり運動」というメッセージを強く訴えてかけていくことなのではないかと考えました。住民へのメッセージとして、「おいしい食べきり運動」の「おいしい」ということを大切にしていきたいと思っています。食事を食材や会話、雰囲気などを含めて、すべてを大事にしながら、おいしく食べきること、それが住民の皆様の心に届く強いメッセージとなると考えているからです。

そこで、設立総会では、協議会の活動として「情報共有と発信」、そして「全国共同キャンペーン」の大きく二つに分けて実施していくことを決定させていただきました。

まずは、「情報共有と発信」です(図3・4)。近年、他の自治体からの「おいしい食べきり運動」について

の問い合わせも多くなり、食品ロス削減に向けて同様の取組を始めたいと思っている自治体が多いと感じていました。そこで、協議会ではまず、参加自治体間で政策の情報共有と発信に力を入れたいと考え、ホームページを立ち上げました。参加自治体が実施しています食べきり運動のページへのリンクもありますので、全国の自治体の運動がわかっていただけるのではないかと思います。既に「おいしい食べきり運動」を実施している自治体の施策内容、ノウハウなどを参加自治体で共有していきます。それにより、これから運動を始めようとしている自治体を増やし、既に取り組んでいる自治体には、今の活動をよりよくするヒントが得られると思っています。また、消費者庁の御協力を得て、リメイク料理や食材使いきりレシピをクックパッドで紹介していきます。各自治体で作成したレシピを共有し、情報を発信することで具体的な食材使いきりのアイデアが広がっていくと考えています。

図4

図5

図6

次に共同キャンペーンを実施し、住民、スーパーや飲食店、企業の皆さんに「おいしい食べきり運動」への協力を働きかけていきたいと考えています(図5・6)。各自治体が行ってきた働きかけをネットワーク協議会で集約することで全国への波及を行いたいと思っています。そのために、会員の皆様に外食時の「おいしい食べきり」の全国共同キャンペーンを提案しています。まずは、12月から１月の宴会が多い時期に食べ残しをなくすことを呼びかけるキャンペーンを参加自治体の皆さんで実施したいと考えました。一つひとつの自治体での呼びかけは地域的なものになりますが、全国に広がることで大きなムーブメントになり、全国的な発信にもつなげていけるものと考えています。福井県でも食べきり運動協力店や食べきり家庭応援店の登録を行っています。小盛りサイズメニューの導入など、各自治体が働きかけてきた内容を全国チェーンの飲食店などにも協力をお願いしたいと思っています。

もう一つは、家庭での「食材おいしく使いきり」の全国展開です。家庭での食材使いきりを進めるためにネットワーク協議会で全国チェーンの食品販売店に対して、食品ロス削減のための取組、例えば少量パックやばら売りなどの充実をお願いしていきたいと考えています。また、行政だけではできることも限られますので、婦人会等の消費者団体や住民団体と連携して家庭への働きかけを行っていきたいと思います。

このような活動を「全国おいしい食べきり運動ネットワーク協議会」で実施していくことで、「おいしい食べきり運動」が全国に展開し、おいしい食材を食べきることが当たり前の習慣となっていけば、食品ロスは削減していきます。それにはまず、食べきることということを皆さんが意識するということが必要になってきます。皆さんの気持ち一つで、今からでも参加できる運動、それが「おいしい食べきり運動」です。本日お集まりの皆様にもぜひ実践していただきまして、また、食品ロス削減のための本協議会の活動に積極的な御支援と御協力をお願い致したいと思います。

御清聴ありがとうございました。

（3）事例発表「緑のリサイクル・ソーシャル・エコ・プロジェクト」

発表者：徳島県立新野高等学校及び徳島県立
小松島西高等学校勝浦校の皆さん

ただ今から、私たちのプロジェクトチームの取組を報告します。

初めに、両校の共通する特色は、環境学習に熱心に取り組んでいることです。新野高校では昨年、希少植物のイシマササユリの保護・増殖活動に対して、環境大臣表彰を受賞しました。また、勝浦校では、棚田の環境保全活動に積極的に取り組んでいます。

そこで、両校の環境問題への取組を生かし、緑のリサイクル・ソーシャル・エコ・プロジェクトチームを立ち上げ、未来の地球のために私たちができることを活動のテーマに地球温暖化防止活動に取り組んでいます（図1）。

図1

近年、温暖化の影響により世界各地で未曾有の自然災害が発生し、その温暖化対策が急務であり、私たち一人ひとりが共有する課題として取組が求められています。そこで、私たちは道路や河川等の維持管理で発生する刈草が有効活用されておらず、植物廃材として焼却処分され、多額の費用とともにCO_2として排出されていることに着目し、平成22年から徳島県と連携し、刈草を有効活用する研究に取り組みました。そして３年かけ刈草を分解、発酵させる元堆肥、「もったいない１号」の開発に成功しました（図2）。この取組から、平成25年、植物廃材であった刈草をリノベーションした資源循環型肥料「もったいない２号」を開発し、平成26年からは両校で活動の輪を広げています（図3）。

図2

主な取組は次のとおりです。この資源循環型肥料は、徳島県立農林水産総合技術支援センターにおいて、成分分析を行い、土壌改良材としての有効性が認められ、徳島県知事より安心・安全な肥料として全国では初めて、高校生が主体となった組織として、肥料取締法に基づく特殊肥料の製造業並びに販売業の登録許可を受けました。この許可を受けて、一般市民の方への提供が可能になりました。

「もったいない２号」が完成するまでの流れです（図4）。①刈草を徳島県が搬入、②生徒による踏み込み作業、③元堆肥、もったいない１号と米ぬかを混入、④散水及び踏み込み作業、⑤切り返し、⑥発酵、⑦完成、⑧振るいがけして袋詰め作業の流れです。最後に肥料取締法に基づく

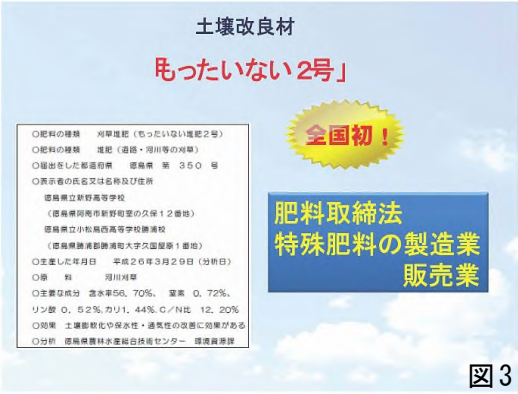


図3

成分表示を添付して「もったいない２号」ができ上がります。

「もったいない２号」の成分分析の結果は次のとおりです（図5）。作物の三大栄養素である窒素、リン酸の施用効果は小さいですが、根の発育を促すカリは１平方メートル当たり５キロ程度の施用効果が期待できます。むしろ、土壌の防軟化や保水性、通気性の改善などの植物の生育に必要な土壌環境の改善に効果があるという結果が出ました。

「もったいない２号」をいろんな場面で活用しています。まずは、花いっぱい運動（図6）や出前授業の様子です。プランターに植えた四季折々の草花を公共施設に年３回配布設置しています。

次にイシマササユリ保護活動です（図7）。バイオ技術で増殖した希少植物イシマササユリの球根を四国最東端の島に移植しています。今年で30年目を迎えます。

環境学習の場としてのモデルガーデンの様子です（図8）。植物の魅力についても「驚き」を発信しています。また、小学校へ環境教材として「もったいない２号」を提供しています。県民の方へも「もったいない２号」を配布しています。

図4

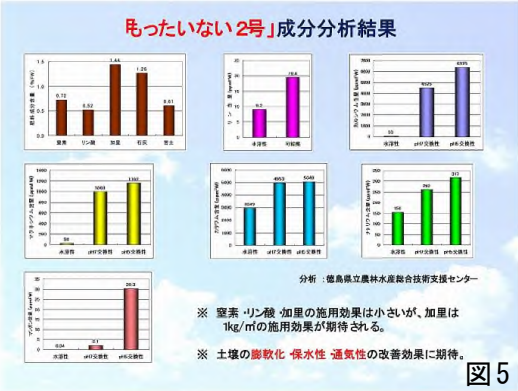


図5

徳島駅前にて温暖化防止キャンペーンを実施しました（図9）。夏場の緑のカーテンづくりをアピールし、徳島県を始め、徳島県のマスコットすだちくん、とくしま環境県民会議、プロ野球独立リーグ四国アイランドリーグに所属する徳島インディゴソックス球団の選手の皆さんと、徳島駅を利用する人たちにアサガオの種と「もったいない２号」をセットにした緑のカーテンセットを配布し、温暖化防止キャンペーンを展開しました。中段の写真は、徳島インディゴソックス球団と連携しての活動の様子です。スコアボードに私たちの願いも表示してもいました。

上板町、勝浦町の小学校を始め、阿南市内全小学校22校の代表児童にヒマワリの種をセットにして地球に優しい暮らしのあり方についての出前授業を実施しました。

阿南市立加茂谷中学校で

図6

図7

図8

図9

の台風による水害の様子です。「もったいない２号」を通じて災害復興活動や温暖化防止に向けた啓発活動を展開しました（図10）。

ＮＨＫのニュースや徳島新聞にも掲載されました（図11）。

～ニュース映像～

除草作業で出た刈り草を１年がかりで堆肥にして、きのう市民に配りました。無料配布しております。本日会場でもお配りしていますので、もしよければお持ち帰りください。

図10

堆肥を配ったのは、阿南市の新野高校で農業技術を学ぶ生徒たちです。生徒たちは、県が道路や河川の除草作業をした際に出た刈り草を地域の緑化に生かそうと、米ぬかなどを加えて１年間発酵させて堆肥を作りました。昨日堆肥500グラムとひまわりの苗をセットにして、阿南市役所を訪れた市民に無料配布しました。

平成25年度より３年連続ボランティアスピリット賞を受賞することができました（図12）。また、ことし２月には、環境省第１回全国ユース環境活動発表大会で優秀賞を受賞し、全国トップ20校に選ばれました。

図11

活動の自己評価並びに活動成果です(図13)。私たちは資源循環型肥料「もったいない２号」の開発とともに、地球温暖化防止への取組の１つと考える緑のカーテンづくりを啓発し、学校や家庭、地域に「もったいない２号」を提供しています。県民の方からは、「『もったいない２号』は身近にある環境学習の教材として効果的である」、「刈草が堆肥になることを初めて知りました」、「環境問題を考えるきっかけになりました」等の意見をいただきました。さらに、植物廃材としてのイメージのあった刈草を資源として捉える意識変革の効果があったと感じています。平成26年度より、少量ですが、毎年６トンの刈草100%の土壌改良材の生産を行い、徳島県が取り組む事業やイベントなどを通じて県民の方に無償で提供しています。

これからも、この取組を継続していくことで、産・官・学・民が連携し、高校生が主体となった地域密着型資源循環脱炭素社会

図12

図13

の構築に向けたモデル例として、緑のリサイクルの先導的な事例を生み出し、節電、省エネ、CO_2の排出削減といった地球に優しい暮らしのあり方を発信しています（図14）。また、緑のリサイクルモデルは、次の時代を担う環境人材の育成にも大いに期待が持てると考えています。

図14

今年は、とてもうれしいことがありました。県民の方から、昨年いただいたアサガオの種から、今年も緑のカーテンをつくっていますとの励ましの声をいただきました。本当に活動をしていてよかったと感じた瞬間でした。そして、私たちの意識も変わってきました。「緑のカーテンづくりからクーラーに頼らない生活のあり方が体験できた」、「やわらかい光が気持ちいい」、「とてもやわらかい風が流れている」等の感想が出されました（図15）。

私たちは、学校や地域を越えて、高校生、中学生が集まり活動しています。一人一人の環境に対する意識の違いをスタートに、その問題点を共有化し解決していくことの大切さを学びました。そして、未来の地球のための暮らしのあり方を知るきっかけになりました。

今後の取組ですが、私たちは、この実践啓発活動から、両校での取組の輪を広げ、緑のリサイクルのトップランナーとして、その手法や技術を全国に発信していきます。しかし、地球温暖化の予測データによると、今後50年間は、今まで排出した温室効果ガスにより温度上昇が予想され、海水の酸性化も懸念されています。そこで、今年、新たに環境と健康をキーワードに、誰でも、どこでも楽しみながら取り組める持続可能な温暖化対策に取り組んでいます（図16）。

図15

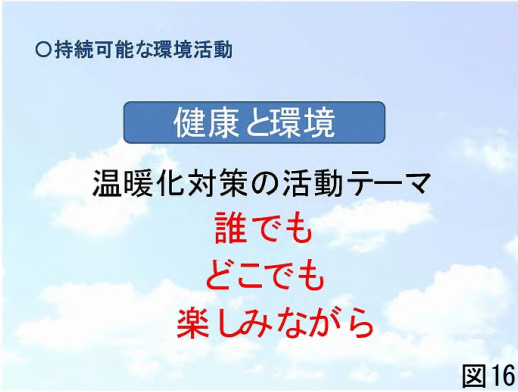


図16

徳島県は昨年まで糖尿病ワースト県でした。今まで緑のカーテンと言えば、ゴーヤやアサガオがよく知られていますが、栽培した感想では、緑がきれい、ゴーヤがおいしかった等の感想だけで、収穫の喜びから産業にまでつながってなかったのが現状です。そこで、糖尿病ワースト県の高校生の発想として着目したのがパッションフルーツです（図17）。

パッションフルーツの種には、ピセアタンノールという成分が含まれており、最近の研究で血糖値を下げる効果があることが認められました（図18）。

私たちは温暖化対策の次の一手として、緑のカーテンから収穫の喜びを生み出し、環境創生に向けた地域の活

図17

図18

性化に取り組んでいます。

今年４月には勝浦町において、温暖化の影響についての報告を行いました（図19）。

５月には、12地区の代表者にパッションフルーツの栽培講習会を開催しました（図20）。この取組は、県内外から多くの反響がありました。

図19

図20

勝浦町役場でのパッションフルーツを使った緑のカーテンの設置の様子です（図21・22）。町全体をフィールドにモデル栽培を行っています。このことは「もったいない２号」の活用推進にもつながっています。７月に開催された徳島気候変動フォーラムで、パッションフルーツを使った新しい特産品の試食を行い、大変好評でした。

私たちは、これまでの取組から、今年、新たな一歩に向けて徳島県と阿南市との三者で刈草の有効活用に向けた協定を結びました（図23）。全国では初めて高校生と徳島県南部総合県民局、そして阿南市が主体となって刈草のリサイクルに向けた４名の地域雇用を行います。始めは季節雇用となりますが、私たちの環境問題への取組から環境創生につながる雇用を生み出せたことは、大変大きな成果があったと感謝しています。

図21

これからも地球に優しい人づくり、まちづくりを通じて、「もったいない２号」をツールに未来の地球を守ります。そして未来に誇れる環境首都とくしまの活性化に取り組んでいきます。

今日、皆さんに「もったいない２号」とヒマワリやコスモスの種をセットにしたミニ緑化セットをお配りしました。ヒマワリは植物の中でもCO_2の吸収がとても多い植物です。身近にある刈草が資源として環境保護につながるということを知っていただき、大会のスローガンである「ごみゼロ」の循環型社会を目指して徳島から世界に向けて環境日本を発信していきましょう。

終わりになりますが、このような活動報告の機会を与えていただいた皆様に感謝申し上げまして、報告を終わります。御清聴ありがとうございました。

図22

図23

（４）特別講演「３Ｒとエコライフを楽しもう」

シンガーソングライター（環境省３Ｒ推進マイスター）白井貴子氏とマイバッグガールズ

（白井貴子の略歴）

神奈川県出身。1981 年にデビュー、ロックの女王と呼ばれ、女性ポップ・ロックの先駆者的存在。88 年から 2 年間充電のため移り住んだロンドンで環境のことを考えるようになり、帰国後から全国植樹祭テーマソング「森へ行こう！」、神奈川県清川村キッズソング「みんなの未来」など、未来を担う子供たちへの応援歌を多数発表。環境省３Ｒ推進マイスター、神奈川県環境大使。2014 年に愛知県と岡山市で開催された「ＥＳＤユネスコ世界会議」オフィシャルサポーターとしてＥＳＤメッセージソング「僕らは大きな世界の一粒の命」を作詞、作曲。そのＣＤとダンスＤＶＤが文部科学省を通じて全国に 800 あるユネスコスクールに無料配布された。この夏、「帰ってきたヨッパライ」や「あの素晴らしい愛をもう一度」の作詞でおなじみのフォーククルセダーズの北山修さんより「北山修楽曲を次世代に歌い継ぐ歌手」に抜てきされ、北山修さんの「涙河」をリリース。11 月 23 日には東京赤坂でデビュー35 周年記念コンサートを開催。ＮＨＫ総合「ひるどき日本列島」で３年間レギュラーとして活躍。エンディングソング「元気にな～れ」で全国 50 カ所を旅した。

（マイバッグガールズの略歴）

2010 年、徳島県吉野川市でのマイバッグ持参運動をきっかけに有志で結成したグループで、徳島のマイバッグ推進キャラクターに起用されている。歌やダンス、環境クイズを通じて、マイバッグ持参推進やエコをＰＲしている。オリジナルソング「ＥＣＯみらいとくしま」の動画が「環境首都とくしま・未来創造憲章・普及啓発動画」において最優秀賞を受賞した。

○白井貴子氏　徳島の皆さん、そして全国からこの徳島にお集まりの３Ｒ推進の皆さん、お元気ですか。白井貴子です。まず、写真ですが、これ実は、もう20年前になります。私先ほど紹介していただきました「ひるどき日本列島」というＮＨＫの番組で、実は初めてロケに来させてもらったのが徳島だったのです。何とそのときの視聴率がものすごくよかったのです。それがきっかけでその後、次の年の春から３年間もひるどき日本列島のレギュラーをすることになりました。ですから、徳島なくしては私のテレビ人生は語れないという感じです。徳島で学んだこと、１粒の体験が、10粒に100粒にもなって、私のエコロジックにつながっていく、そんな大きなきっかけを徳島の皆さんにもらったのです。今日は、その恩返しするようなつもりでお話ししたいと思います。

これ、私が持っているのが、徳島のお豆腐、すごく頑丈です。びっくりしたのが、縄で縛っても切れない、崩れないという豆腐をつくらせていただいて、もう私は感動しました。最初の放送は一人のおばあちゃんのところから始まりました。トロッコで山を上がっていって、そのてっぺんに一人で住まれていて、五右衛門風呂に毎日入り、ドクダミをお庭からとって、いつもそれを薬草茶にして飲んでいるおばあちゃんでした。

この何日か後にコンニャク芋の取材に行きました。どうでしょう、学生の皆さん。コンニャクをつくったことがありますか。徳島の子だったら、絶対コンニャクづくりを覚えてほしい。私も、この当時は、35、6歳でしたが、コンニャクはコンニャク芋をすってそのままゆでたらできるのではないかって思っていて、コンニャクのつくり方を知らなかったのです。簡単にできると思っていたら、ところがどっこいで、コンニャクはコンニャク芋を１年育てたら、それを掘り起こして、家の納屋とか２階の天井裏に置いて、それで年を越して、またもう１回土に埋めて、もう１年育てる。それを３回ぐらい繰り返してやって初めてコンニャク芋がちゃんと成長して、やっとコンニャクができ上がるということを、この「ひるどき日本列島」で教えてもらったのです。もうそのときは何か目からうろこで、「えっ、こんなもの」と言ったら失礼だけど、このふにゃふにゃ

したものが３年も４年もかけて、手塩にかけて育てあげて、自分たちの口に入っていくことを初めて徳島で教えてもらいました。ですから、そんな大変な作業をしている皆さんのその工程を知ってしまったら、「もういいや、おでんの最後の一つ、二つ捨てちゃえ」なんて絶対言えない人間になりました。

だから、まず先ほどから、いろんな皆さんすてきな発言をされていて、いろんなアイデアもいただきましたけれども、何か食べ残しをしないとか、ごみを出さないとか言う前に、きっとみんなが１回コンニャクづくりをやったら、自然とそんな人になるのではないかと思います。私はこれはすてきなことだと思ったら、どんどんまねをして、自分の生活で実践していきたいというほうなので、そんな話をしたいと思います。

そのお話に移る前に、この徳島のときには歌わなかったのですけれども、その後、テーマソングとしてこの番組のためにつくった曲を早速１曲歌いたいと思います。ギターの本田さん来てください。彼は、私が20代の時のクレイジーボーイズというバンドの時からの相棒です。大体、ギターリストとかミュージシャンは、全然アウトドアはだめです。だから私は音楽業界と反りが合わなかったのかなと思うのですが、大体不健康で、大自然で遊ぶことは下手くそな人が多いのです。彼は、私の影響で大分自然と仲よくしてくれるようになりました。改めまして、ギターの本田清巳です。

では、この徳島の「ひるどき日本列島」に感謝をして、「元気にな～れ」を行ってみたいと思います。

（曲「元気にな～れ」）

「元気にな～れ」を、お届けしました。

写真をお願いします。私のひるどきのようなすばらしい番組で徳島に来させてもらっていたにもかかわらず、それからもいろんな環境で、おなかが痛くなるような旅を一杯してきました。例えば、産業廃棄物で大変な瀬戸内海の豊島に行きましたが、あのインク色の汚い、汚い海の水を浄化している姿を見て、本当に涙が出ました。

１枚写真出してください。これは新緑の美しい、私は神奈川県の生まれで全国植樹祭という天皇皇后両陛下に来ていただいて、未来の美しい空気をつくるための植樹のお祭りに出させてもらった時の写真ですが、非常に５月の新緑がきれいな丹沢という有名な山に登りました。次の写真です。どんどん登っていくと、何やらフェンスで仕切られた場所がありました。これは何だろうと思って伺ったところ、手前のほうは、鹿が増え過ぎてしまって、鹿が全部下草を食べてしまっている。下草を食べたら、これが土砂となって川に流れて、川に生息する魚たちが生きられなくなってしまうということで、それをちょっとでも阻止するためのフェンスです。広大な山なのにこんな大変な作業して、鹿にはかわいそうですが、下草を食べられないように作業しているところを通りました。

次の写真お願いします。そして、どんどん登っていくと今度は、新緑で本当に美しい山のはずが、ところどころ、立ち枯れていて、何か荒涼として廃墟のような場所が出てきたのです。これは、聞くと酸性雨の影響なのだそうです。次の写真です。頂上は、もうご覧のとおりで、ここは風が強いところだそうですが、ほとんど木が育っていないのです。こんな姿を私見たときに、やっぱり自分の寿命が縮まってしまうような、そんな恐ろしい気持ちになりました。

次の写真ですが、これはレプリカですが、東松島の里浜遺跡です。つい５年前には大震災で大変な被害があったところですが、この里浜遺跡だけは、5,000年前から守られている場所でほとんど被害がなかったのです。そこのレプリカの貝塚の写真です。上にいるのはニホンオオカミです。もう絶滅してしまいました。

次の写真。私はびっくりしました。この貝塚の中に人骨

もあって、これ何ですかって聞いたら、昔の5,000年前の縄文時代の皆さんは、貝塚で自分たちの食べ残したものを、あの世にまるで返すように同じ場所に一所に集めて、そこに人骨も埋葬しているというのです。どういうことかというと、すべての自分たちが食べた命は、また次の世に帰っていってもらうというか、輪廻転生してもらうような、そういう思いがあったのではないかという話で、何か縄文の人たちに会ってみたい、すごく美しい心の持ち主の皆さんではないかと思って感動しました。最初見たときはギョッとする写真だったのですが、この下に眠っている人骨さえもいとおしく思われました。ただ捨てたのではないということは、束ねられているからわかるのだそうです。それもすごくきれいに束ねられていて、きれいにあの世に行ってもらうために、みんなが集めたことがわかるそうです。

次の写真です。私もすべてを使い捨てるのではなくて、先ほども産業的な部分で取り込んでいくみたいなお話がありましたけれども、私、すごくうれしくなりました。私はもうエコロジックでどんどんお金もうけしてほしいと思うのです。昔は、お金もうけすることと、環境のことを考えるというのは別々な分野だったと思うのですが、私はずっと違うと思っていました。いいことをしながら良心を持ったビジネスの仕方をして、そこでもうけて、またそれをまた次のいいことに使っていくというふうになったらいいのにと思っていますが、小さな動きですが、例えばＴＡＫＡＫＯ　ＳＨＩＲＡＩと書いてあるのは、間伐材でつくったファンクラブのグッズです。多分いろんな芸能の世界で、間伐材を一生懸命使ったアーティストはきっと日本で、私が初めてではないかと思います。どうせ何か皆さんにプレゼントするのだったら、循環していく、いいことをしたいと思って、これも15年ほど前につくりました。

こちらのティーカップは多治見の皆さんと、ちょうど今から17、8年前ですけど、リサイクル陶器が出始めて、土も二度と焼き物になったら戻らないって言われていたのが、17、8年前から技術が生まれてきて、一旦、焼き物を粉にして土にまぜてもう一回焼くという。だから３割ぐらいリサイクルの土が入っている。そういうティーカップもつくりました。

そして次です。そんな思いを持って、全国植樹祭にも出て、とにかく土の上から始めようと、縄文の人たちを見習って、大地と通信をとるような気持ちで音楽やりたいと思って、120人の皆さんと、秦野というところの大地の上で歌いました。残念ながら雨だったのですが、このときに植樹した木は、雨のおかげで９割ぐらいがちゃんと育っているそうです。

次の写真お願いします。さて、そして今日はマイバッグガールズの皆さんとも、こんな姿見てもらえると思いますが、ちょうど２年前です。2014年ＥＳＤユネスコ世界会議という会議が愛知県と岡山市で開催されました。ＥＳＤのＥはEducation、それからＳはSustainable、そしてＤはDevelopment、開発していく。まさに先ほど私が言いました環境にいいことをしながらでも前進していく、そういうおしゃれな生活も諦めない、進化していくことも諦めないで、両輪で頑張ろうという、そして世界中の平和を願える子供たちを育てようというユネスコの動きです。私がテーマソングをつくらせてもらって、松岡修造さんと、さかなクンとか、みんなで一緒にわいわい発表会をしたときの写真です。「今日よりいいアースへの学び」という、確か徳島だったか、四国の子供がつけてくれたキャッチフレーズです。

次の写真を見てください。これが、実は、私の究極の学びの場です。さっきのＥＳＤの写真、「僕らは大きな世界の一粒の命」というＥＳＤのテーマソングを私つくらせてもらったのですが、そのテーマソングの中にけやきの木が出てきます。そのけやきの木が実は右側にある大きな木で、ちょうどその木の下で遊んでいたときに、黄色いかわいい昆虫が現れて、その昆虫ともおしゃべりするような気持ちでバーっとできた曲なのです。ここが私のアトリエというか、もう17、8年前に実践していくことが大切だと思って、コンニャク芋はまだつくったことないのですけれども、何か土の上から生きる時間をふやしたら、また自分自身も変わっていくだろうし、つくる曲ももちろん変わるだろうし、顔つきだって変わるだろうし、そんなことを試

してみたくて、手に入れた、めぐり会った森です。家を買おうと思って、間違って森を買っちゃいました。3,000坪ほどの森なのですが、ここにいつかお家を建てようと思ったのだけど、やっぱり都内に行くことも多いので、あそこに寝泊まりしながらアウトドアライフを実践していて、ここで時々子供たちがキャンプをして遊んでくれています。

さあ、次の写真です。さて、これが、今日私がプレゼントでいただいた藍染。これを見て感動したのですが、徳島は藍染が有名で、私も見習って、藍染の和紙をいっぱい使ってＣＤジャケットをつくりました。これはほんとにエコと産業の合体ではないですが、実はたくさん持ってきましたので、ぜひ今日のお土産に買っていってほしいのですけれども。こんな「涙河」というアルバムをつくって、ここに越前和紙の人間国宝の岩野市兵衛さんの和紙をちょっといただいて。私、市兵衛さんのところへ行って、「市兵衛さん。作品にならない、捨てちゃう端切れありますか」って聞いて、「あるよ、白井さん。」と言われて、「すいません、それください」と言って、ただでいただいてきたものを大切に使わせていただきました。

このアルバムの中から早速聞いてください。このＣＤは、「あの素晴らしい愛をもう一度」とか「戦争を知らない子供たち」などを作詞された北山修さんから、「白井さん、僕の歌を受け継いで歌ってほしい」っていうふうにすばらしいオファーがありまして、北山さんとともに一生懸命つくったアルバムです。「涙河」ということで、藍染和紙をいっぱい使った、末永く聞いてもらいたいというたくさんの私の夢が詰め込まれているアルバムの中から１曲聞いてください。「さらば恋人」。

（曲「さらば恋人」）

ありがとうございます。アルバム「涙河」から「さらば恋人」をお届けしました。

それでは、徳島のエコの女王を呼びたいと思います。マイバッグガールズの皆さんです。

すごいな。うわさでは聞いていましたが。２曲ほどやっていただきます。どうぞよろしく。

○マイバッグガールズ　ハロー、エブリワン。レディース＆ジェントルメン＆ボーイズ＆ガールズ、ウェルカムトゥースペシャルライブ、ウィーアーマイバッグガールズです。皆さんびっくりしていますね。はい、皆さんこんにちは。

（会場「こんにちは」）

はい、声が小さいですね。もっと元気な声出して挨拶してみましょう。もう一回いきますよ。改めまして、こんにちは。

（会場「こんにちは」）

サンキューソーマッチ。どうもありがとうございます。私たちマイバッグガールズは、徳島県下全域のスーパーで、主に徳島県と一緒に、マイバッグでお買い物をＰＲしているグループです。

私たち、初めはこういう格好ではなくもっと真面目な格好で、チラシをスーパーの店頭で配っていたのですが、なかなかそれでは皆様の目にとめていただけないもので、このようなちょっと派手な格好で、私たちマイバッグガールズは啓発をいたしております。

それでは、今日は記念すべきこの第11回３Ｒ推進全国大会in徳島。ゲストで呼んでいただきましたので、ホットな曲をお届けしたいと思います。それでは、ミュージックよろしくお願いいたします。

（曲）

サンキューソーマッチ。どうもありがとうございます。私たちマイバッグガールズ、続いてお届けする曲

は、マイバッグガールズのオリジナルソング「ＥＣＯみらいとくしま」という曲です。この曲の動画を、先ほどアナウンス、紹介していただきましたけれども、環境首都とくしま・未来創造憲章の普及啓発動画において、何と最優秀賞を受賞しました。今年２月に飯泉徳島県知事より表彰状をいただきました。今日はその最優秀賞をいただいた曲をお届けしたいと思います。徳島県の美しい自然を未来につなげていこうという曲です。それでは、ミュージックよろしくお願いいたします。

（曲「ＥＣＯみらいとくしま」）

ありがとうございます。というわけで、ぜひ、この私たちのマイバッグＰＲソングを一人でも多くのお客様に聞いて頂き、マイバッグ持って格好よく、エコなショッピングをしていっていただけたらと思います。ありがとうございます。

○白井貴子氏　すごいですね。私も20代のとき、こういう格好していました。もう今はいつか私のミュージアムつくって展示しようかと思っているようなスカートがいっぱいあって、リサイクルではいてもらえばよかったと思いましたけれども。マイバッグガールズの皆さんです。大きな拍手を。

そうそう。このマイバッグありがとうございます。実は、ライバルパワーを出すわけではないのですが、実は私もマイバッグガールズなのです。このマイバッグも今日売っております。これは、実は30％ぐらいペットボトルをリサイクルしたものが入っています。なので、マイバッグガールズの皆さんも次につくるときには、30％ぐらいペットボトル入れていただいて、つくっていただけたらと思います。

さあ、このマイバッグガールズの皆さんと白井貴子のコラボ。これは、なかなかないですよね。ほんとに環境省も文科省もびっくり。そんな感じのコラボですので、楽しんでいただきたいと思います。

本田さん、来ていただけますか。さっきのＥＳＤのメッセージソングをやりたいと思います。Education for Sustainable Developmentということで、持続可能で発展も可能な世の中をつくろうというもので、率先してやられている皆さんにまずは覚えていただいて、徳島の子供たちにも歌って、踊ってもらいたいなと思います。こんなＣＤを今日は５部ほど持ってきていますので、例えば学校でやりたいとかいう人がいたら差し上げますので、これも持って帰ってください。

○司会　白井さん。徳島県のマスコットキャラクターのすだちくんも何と応援に来てくれているのですよ。すだちくんも一緒に盛り上げてくれます。

○白井貴子氏　前のほうへ来てください。私、すだち大好きで、今朝、散歩をして市場で一袋、こんな大きいのを200円でいっぱい売っていたので、重いのに買ってきました。これを持って帰宅したいと思います。

踊りですけれども、マイバッグガールズの皆さんも、ぜひ一緒にやっていただきたいのです。

先ほどのけやきの木の写真を出していただいて、この木の下で生まれた歌で、おしりかじり虫とか、それからくまもんの振りつけで有名な南流石さんが、かわいい振りつけをしてくれました。

では、ちょっとだけやってみますが、まず、最初昆虫がバーっと出てくるのです。手をまず挙げます。昆虫です。みんなが一粒の命の昆虫になってください。そして、指を１本立てて、「ぷかぷか黄緑の若葉の森昆虫が目の前でダンスをしている」。はい、ここまで皆さんできました。いきますよ。マイバッグガールズの皆さんも大丈夫ですか。すだちくんもできますか。いきますよ。「きらきらと糸が見えた　けやきの木からおりてきたんだ」。これはどういうふうな意味があるかというと、こうやって肩を寄せ合って、隣の人た

ちとも仲よくしながらという意味があって、そしてこの三角形は心の瞳で世界を見ましょうという三角形です。くれぐれも上のほうにやらないでくださいね。上で三角形やるとお化けになっちゃいますから。心の瞳でおでこに三角形をつくってみてください。その心の瞳が風に揺れているというシーンが出てきます。マイバッグガールズの皆さん、踊りがとても上手なので、もっと前のほうでお願いいたします。格好の割にすごくシャイな感じで。

さあ、行ってみましょう。「僕らは大きな世界の一粒の命」。

（曲「僕らは大きな世界の一粒の命」）

ありがとうございます。マイバッグガールズの皆さんとすだちくんです。

どうでしたか。踊ってみて。

○マイバッグガールズ　昆虫になれた気がしました。

○白井貴子氏　本当にそうですよね。大きな宇宙からしたら、私たち昆虫の一粒みたいなものですのでね。その人たちが一生懸命マイバッグ持とうと言っているのですから、大したものですね、私たち。

もう１曲だけ歌ってもいいですか。せっかくなので、みんなの歌という感じで、「あの素晴らしい愛をもう一度」をみんなで歌っておしまいにしたいと思いますけれども、どうでしょうか。

私は一人の作曲家・歌い手として、いい曲もどんどんどんどん歌ってもらえないと、過去のものになって消えてってしまいます。今やＣＤも絶滅危惧種ですし、ほんとにだからこそ歌は人々の心に残っていくし、何よりいい歌を聞けば、ちっちゃい子たちはすごく心の豊かな子供たちになると思いますので、物を使い捨てないのと同じように、いい歌もどんどんどんどん歌い継いで残していってほしいし、私も頑張りたいと思っています。

私は35周年で11月23日に赤坂ブリッツで、貴子とクレイジーボーイズというロックバンドをまたやる予定です。皆さんのように細くないのですけれど、80年代のときのジーパンのスカートをはけたらいいなと思っています。リサイクルというよりは、自分の中でのマイビンテージになってしまっていますが。

それからもう一つ、今日はいろんな企業の方がみえていて、花王さんも来ておられるということですが、花王のビオレママって知っていますか。皆さんのようなすてきな楽しいお母さんたちが出てきてわいわいやるアニメ、その中心のあけみママのナレーションを私15年やらせてもらっています。最近うれしいことに、花王の皆さんとリサイクルボトルをつくったり、環境にもすごく配慮されているので、私もやりがいがありますが、そういうことで35年頑張っている白井貴子、この３Ｒの環境とともに頑張っていきたいと思います。これからもよろしくお願いします。

それでは、「あの素晴らしい愛をもう一度」をみんなで歌いましょう。

（曲「あの素晴らしい愛をもう一度」）

マイバッグガールズの皆さん、すだちくん、３Ｒ推進全国大会の皆さん、徳島の皆さん、今日はありがとうございました。

（5）パネルディスカッション「今後の３Ｒの取組と主体間連携のあり方」

【コーディネーター】

３Ｒ活動推進フォーラム副会長（ＮＰＯ法人持続可能な社会をつくる元気ネット理事長）　崎田裕子氏

【パネリスト】

環境省大臣官房廃棄物・リサイクル対策部企画課循環型社会推進室長兼リサイクル推進室長　田中良典氏

福岡県大木町副町長　境公雄氏

ＮＰＯ法人ゼロ・ウェイストアカデミー理事長　坂野晶氏

株式会社日誠産業環境推進部長　岸野正和氏

徳島県県民環境部環境首都課課長補佐　尾関勉氏

崎田氏

○崎田氏　これから、３Ｒに先進的に取り組んでいる皆さんにお話しいただきますが、３Ｒをこれから全国に広げるにはどういうふうにしていったらいいのか、そこのポイントをしっかりと皆さんにお話しいただきますので、会場の皆さんもぜひ新たな側面などいろいろなヒントをたくさん持って帰って、全国に広めていただければと心から願っております。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、１人４分で、それぞれの取組に関してお話しいただければと思います。最初に、環境省リサイクル推進室長の田中さんから、地域循環圏の構築に向けた主体間連携ということでお話しいただきます。

今日のキーワードは「連携」で、３Ｒを進めていくときに、自分だけではできないことを、いろんな方と連携をしていくことで相乗効果を上げていくにはどうしたらいいのかということについてお話しいただこうと思います。それでは、田中さん、よろしくお願いいたします。

○田中氏　皆さん、こんにちは。環境省のリサイクル推進室長の田中と申します。

田中氏

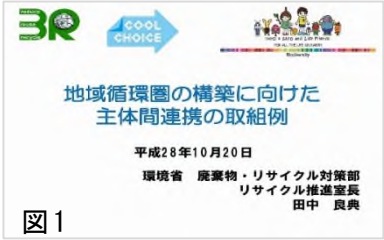


図1

先ほど細田会長から「なぜ資源を有効に利用して、循環型の社会をつくっていかなければならないか」というお話がありました。そして、国ではいろんなリサイクルを推進するための法律があります。しかしながら、実際に循環型社会をつくっていく主役は地域の一人ひとりの皆さんです。私たちは、地域で循環可能な資源はなるべく地域で循環させ、地域での循環が困難なものについては、循環の輪を広域化させていくという、循環の輪の積み重ねを形成していくことが必要と考えています（図2）。

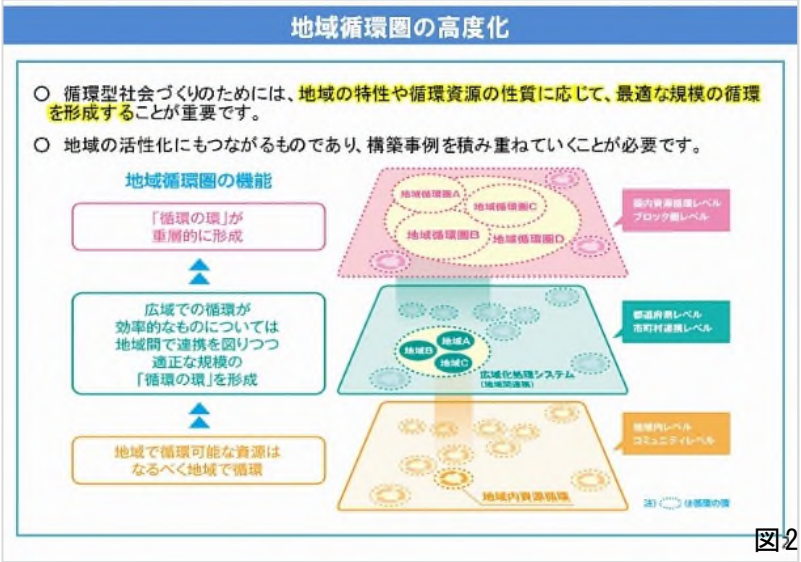


図2

こうした循環型社会の形成は、廃棄

物処理焼却施設ですとか、あるいは最終処分場、残り少ないものをしっかりと長く使っていくこと、あるいは効率的にごみを処理することによって、コストを減らすこと、そして技術の革新とか地域のビジネスの創出、そして何といっても地域の人と人との輪の創出、そして循環で、低炭素で、自然と共生する社会をつくる上で、この徳島あるいは四国の地で、循環の輪を各市・町・村あるいは広域につくっていただきたいという思いがあります。

例えば食品リサイクルについて言えば、スーパーから出てきたような食品廃棄物から豚の飼料をつくる。そして、それを使っておいしい豚肉を地域の中で生産していただき、それをまたスーパー等で売っていただく。こういった輪や、あるいは食品関連から出てきたものから肥料をつくって、それを地域でおいしい野菜や米や大豆、花などにして、それをスーパーで売るような輪（図3）。こうした輪が全国で少しずつ増えています。

また市町村が、携帯電話・ゲーム機・デジタルカメラなどを回収したものを中間処理して、リサイクルして、金とか銀とか銅とかあるいは鉄として、また製造工程に入れていくような輪。こうした取組も全国で広がっています（図4）。

あるいは、皆さんの毎日使っているようなトレイとかカップとかからプラスチックがまた生み出され、車の部品になったり、洗濯機の部品になったり、あるいはペットボトルからペットボトルを生み出したり、あるいは瓶をそのまま使ったり、あるいは一度カレットにして、またガラスの材として使っていく。こういった取組が進められています（図5）。

図3

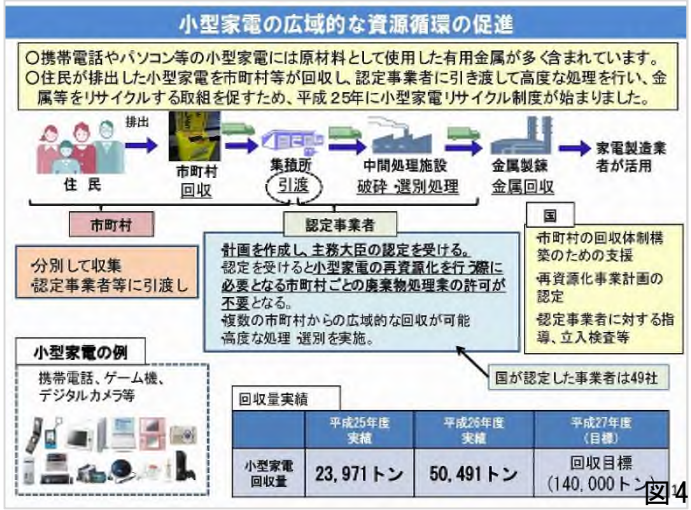


図4

図5

こうした取組を進めるための重要なポイントは、地域の主体がそれを自分が主役と考え、そして地域でどういった特性があるから、どういったものをリサイクル、リユースしていけばいいのか。そしてそれを一緒にやってくれる仲間をつくって、話し合う場をつくり、計画をつくって、目標をつくり、それが進行しているかどうかを、実際に行動しながら点検し、次の行動に直していく。こうした取組が重要であると思っています。

皆さんにこれから非常に魅力的な事例を紹介していただけると思いますので、私も今日は楽しみに聞きたいと思います。ありがとうございました。

○崎田氏　ありがとうございます。それでは、次にやはりとても先進的に取り組んでおられます福岡県大木町の境さんから、取組をお話いただけますか。

○境氏　皆さん、こんにちは。福岡県の大木町の境と申します。今日は坂野さんから御紹介いただき、参加をさせていただきました。上勝町と大木町は、ゼロ・ウェイスト仲間で、ずっとお付き合いをさせていただいています。私たちとか上勝町は、少なくてもごみの 90%から 95%以上を燃やしたり、埋め立てたりしない自由がある数少ない自治体です。

境氏

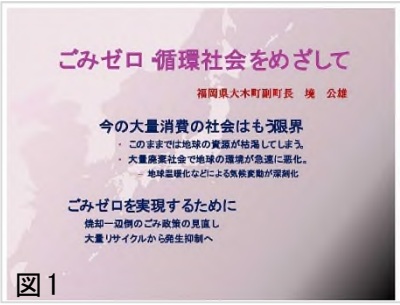


図 1

その中身を簡単に紹介したいと思います。今の社会のあり方は、明らかに持続可能ではない。大量に資源を消費することで、資源枯渇の問題が出てきます。また、大量のごみを燃やして、温暖化などのいろんな問題を起こしている。いわば、資源を食いつくしながら、子供たちにつけを残しているような状況ですから、こういう状況を続けること自体あり得ないというふうに考えるべきです。

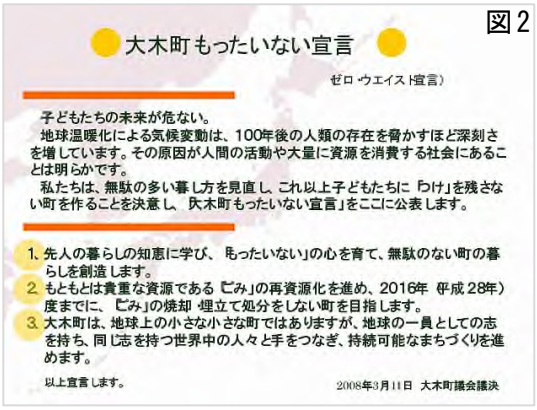


図 2

そこで、大木町ではゼロ・ウェイスト宣言であるもったいない宣言（図 2）を公表し、10 年以内にごみの焼却とか埋め立てをしないようにしようという目標を掲げて取組を進めてきました。多くの自治体では廃棄物・ごみは燃やすのが基本です。だけどごみは燃やすものではなくて、資源として向き合い、取り組んでいこうと宣言をして、住民と協力をするという取組です。

図 3

ちなみに、今、大木町が分別している内容は、資源物としては 28 分別しています（図 3）。とにかく資源として活用できるものは、すべて資源として活用する。住民の皆さんが分別したものは、自治体が責任を持って資源として生かしていく。そういう取組をしています。

その中で今リサイクル率が 63%ぐらいです（図 4）。問題は焼却をどう減らすかということだと思うのですが、重さでいうと 40%から 45%ぐらいは生ごみですから、これを減らすことで一気に燃やすごみが減ります。次に、プラスチックは、石油資源でもありますし、それを自然の中に放置するといろんな問題を起こすので、少なくとも責任を持ってすべて回収して資源として再利用する。やらないと大変なことになってしまう。

図 4　**大木町のごみ処理の状況**

生ごみなど分別排出の徹底により、平成 27年度のリサイクル率は 63．1%で、平成 17年度に比べて 48．2%伸びています。

町から出るごみの量及びリサイクル率

	排出量（t）		27年度／17年度	平成25年度1人1日当たり（g）
	平成17年度	平成27年度		
燃やすごみ	3004.9	1240.7	41.3%	236
燃えないごみ	95.9	2.5	2.6%	0.4
資源ごみ	541.1	2127.5	393.2%	405
（内生ごみ）	－	(1168.7)	－	(222)
合計	3641.9	3374.8	92.6%	641.4
リサイクル率	14．9%	63．1%	＋48．2%	

それと、雑紙類、例えばお菓子の箱とか調味料の箱とかトイレットペーパーの芯、そういうものがありますし、紙おむつなども分別すると、焼却ごみの 90%から 95%が資源化できます。間違

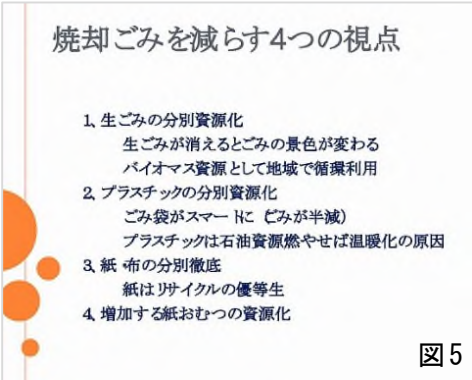


図 5

いなく燃やすごみが減ります。だから、これをやればいいのです（図 5）。そういう意味で、大木町では、ごみを資源として分別する自由を住民の皆さんに与えているということです。

雑紙類も紙袋に入れて、地域にいつも出せる場所があって、それを業者が買って地域の収入になっています。さらに、それに対しては、町が助成金を支払うという仕組みをつくっていますし、紙おむつもすべて集めて、大牟田市の業者に持って行って、主にパルプとしてリサイクルをしています（図 6）。

特に生ごみの分別については結構注目されていて、10 年前に、町の真ん中にバイオガスシステムをつくり、町内から出るすべての生ごみとし尿と浄化槽汚泥を全部集めて、メタン発酵によりガス発電をしています。その残さで有機肥料をつくり、それをすべて町内で使うという取組をしています（図 7）。ちなみに、施設の隣に非常に人気のあるレストランがあります。お昼はいつも満員で、大体 30 分ぐらい待たないと入れません。隣に直売所があり、人がたくさん集まってきます。そういう施設と併設して、こういう循環施設を設置しています。

要するに、住民の皆さんは、自分たちが分別した生ごみがどういうふうに資源になっているかというのをいつでも見られるというオープンな施設になっています。大木町をＰＲする施設として、誰でも見学できる施設にしています。住民の皆さんはほとんど分別して、ほぼ 100%に近い生ごみが集まってきていますし、住民の皆さんの意識調査でも 9 割以上の人が生ごみ分別に賛同しているという結果が出ています。

このように、生ごみ分別については、非常にうまくいっている。生ごみ分別をすることで、本当にたくさんの効果が出ています。ごみを地域で資源として生かすのは、町ぐるみの取組です。住民と一緒に協力してやらないとうまくいかない。そのことを住民一人ひとりがわかっている。しかし、まだ燃やすごみの 40%ぐらいを燃やしているわけですが、１回ごみとして出すのに慣れてしまうと、ごみを分別してもらうのはなかなか難しい。町民の半分ぐらいの人は大体きれいに分別してくれているのですけれども、あと半分ぐらいの人はまだまだ御理解をい

図 6

図 7

図 8

ごみ処理の値段 住民負担）

ゴミの種類	容 量	金 額
燃やすごみ	指定袋（中）35L	600円（10枚）
	指定袋（小）15L	300円（10枚）
プラスチック	指定袋（大）50L	150円（10枚）
	指定袋（中）35L	100円（10枚）
紙おむつ	指定袋（小）15L	150円（10枚）
粗大ごみ	指定シール	250円／1枚
指定施設直接搬入ごみ	10kgあたり	200円

※ 生ごみ、地区で分別した資源物は無料（家庭から出るもの）

図 9

ただいていない。それをできるだけ広めるために、例えば、学校の授業の中で、子供たちに分別をやってもらったり、町民対象のコンテストをやったりしています。全国平均で一人当たりの燃やすごみの量が 400 グラムぐらいになっていますが、コンテストをやると、ごみを４グラムとか５グラムしか出さない人もたくさん出てきています（図8）。

また、ごみを分別する人は経済的にも得をするようにしています。そうすることで町のごみ処理費用も減らすことができたという結果につながっています（図9）。かなり駆け足で話しましたので、分かりにくかったと思いますが、わからなかった方は、ぜひ、大木町のほうに来てください。ありがとうございました。

○崎田氏　ありがとうございます。でも、すばらしいチャレンジをされているということはよくわかりました。ありがとうございました。それでは、やはり、先進的なチャレンジを徳島の県内でやっておられるＮＰＯ法人ゼロ・ウェイストアカデミー理事長の坂野さん、よろしくお願いいたします。

○坂野氏　よろしくお願いいたします。先ほどは、大臣表彰をありがとうございました。これまで、約10年間、ＮＰＯとして活動してきました。同時に上勝町として、ゼロ・ウェイストに取り組んだのは 2003 年に宣言して以降ですが、その前の 1990 年代から分別の取組を始めています。分別をすることで資源にする、ごみだと思ってしまったらごみになるのです。それが、まだごみじゃない、使えるのではないかと思った瞬間に、それはもうごみではなくなるのですね。その発想そのものを変えてきたのが、大きな取組だったと思っています。

坂野氏

図１

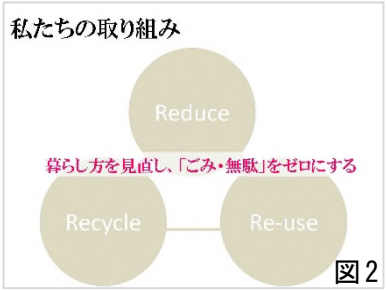


図２

この３Ｒに基づいて、私たち、ＮＰＯ法人ゼロ・ウェイストアカデミーとしては、行政とともに私たち自身の暮らし方を見直す過程で、ごみと思う、その考え方を変える、行動を変える、あるいは社会の仕組みを変えることを通じて、ごみをなくしましょうという取組をしています。それを、ゼロ・ウェイスト、ごみ・無駄をゼロにしていきますという取組で呼んでいます（図2）。

図３

リサイクルに関しまして、現在、上勝町では、最初 9 分別から始め、今 45 分別で取り組んでいます。これを通じて、集められたごみの約 79%がリサイクルされています。これは、いわゆる収集をしていくという方法ではなくて、一つの拠点に皆さんが持ち込むという方法をとっているということと、さらに、生ごみは回収せずに、すべて各家庭で堆肥化をしていただいています。それによって、拠点自体が生ごみのにおいがしないという特徴があります。また、皆さんがコミュニティスペースとしても捉えられる場所になっています（図3）。

さらに、写真だと見えづらいのですけれども、各コンテナに表示があり、例えば、アルミ缶を入れる場所に、アルミ缶と書いてあるだけではなくて、そのアルミ缶がどこに持っていかれて、何になるのか。さらに、その過程で幾らお金がかかるのか。あるいは、幾らお金になるのかということが書いてあります。なので、アルミ缶は自分にとってはごみかもしれないけれども、それを持っていくことでごみではなくなるということも、皆さんにわかっていただける仕組みになっています。

さらに、リユースということで申し上げますと、「くるくる」というコンセプトで長年リユースに取り組んで参りました。一つが、くるくるショップという場所で、ごみステーションの横にリユースの拠点をつくりました（図4）。町内の方であればどなたでも、自分はもう要らないけれども、まだ使えるというものを持ち込んでいいのです。逆に、町内外のどなたでも、まだ、使えるもので欲しいものがそこにあったら、無料で持ち帰っていいという場所になっています。これによって、無料なので、お金は生まれていないのですけれども、年間を通じて、持ち込みが約 13 トン、持ち帰りが約 11 トンということで、8割、9割、町内のどなたかにとっては要らないものが、誰かに使われるという循環を生んでいます。それだけ、ごみになってないということですね。

図4

さらに、鯉のぼりをジャケットにリメイクしています（図5）。今日、私が着ていますのは、鯉のぼりのリメイクになります。最近アップサイクルというコンセプトでも社会で知られてきていますけれども、何か要らなくなった着物とか、鯉のぼりとか、そういったものを、用途を変えて違う商品に作り変えましょうということで、これを地元のおばあちゃんたちが中心に作って販売をしています。

図5

さらに、不要な、ごみになりそうなものを減らしていくというリデュースと関連して、「くるくる食器」というリユース食器の貸し出しを行っています（図6）。例えば、町内のお祭りで、運営者と一緒に、すべてリユース食器を導入して、さらに、リサイクルの回収拠点をつくることで、例えば、今年、1,000人ぐらい集まった上勝町内の夏祭りですけれども、焼却ごみとして燃やさなければならないごみは、コンテナ１個分以下になりました。要は、１回しか使えない使い捨て食器や容器をなくしましょうという取組をしています。

図6

そんな中で、いわゆる、アドボカシーということにＮＰＯとしては取り組めるのかなということで始めています。これらが上勝町の 45 分別の冊子の中で、唯一、燃やさざるを得ないごみ、あるいは、埋め立てざるを得ないごみというペ

図7

ージになります。例えば、紙おむつとか、革製品、ゴム製品とか、難しいものがまだまだたくさんあります。こういったものをつくっている企業さんに御相談をして、何ができるのかということで、商品自体を変えていくとか、持続可能なリサイクル、あるいは、リユースし続けられるものに変えてくという取組を始めております（図7）。

図8

さらに、最近、このビデオを世界中で見ていただいていて、私もちょうど昨日、海外から帰国したばかりですが、ニューヨークとマレーシアでゼロ・ウェイストの講演をしてきました。ニューヨークでは2030年までに、ゼロ・ウェイスト、ごみの90%発生抑制をしようとしています。上勝町自体は非常に小さなモデルですけれども、この小さなコミュニティーでできることは、大きな都市というのは小さなコミュニティーの掛ける何倍というスケールですので、どこでもできるのではないかということで、最近、一緒に考えながらスケールアウトしていこうと取り組んでいます（図8）。

図9

さらに、町内では、ゼロ・ウェイストの認証制度というものを始められないかということで、取り組み始めているところです（図9）。小さなレストランとか、カフェが仕入れの段階から、もちろん、分別に至るまで、いかに、発生抑制をして、ゼロ・ウェイストに貢献できるのか、しかも、それによってもしかしたら、事業にかかる費用も抑えられるかもしれないし、ブランドイメージも上がるかもしれないということで、その基準をつくって、導入のお手伝いをしています。そういった中で発生抑制、リユース、リサイクルというすべてのプロセスで、企業に対しても、行政に対しても、お手伝いをするという役割をＮＰＯとして担って参りました。私も駆け足でしたが、ありがとうございました。

○崎田氏　ありがとうございます。ニューヨークなどでも2030年までにということでゼロ・ウェイストに真剣に取り組み始めたことを、今日徳島から発信するのは、時宜を得た大事なことかと思います。ありがとうございます。それでは、今回、事業者としてお越しいただいている日誠産業の岸野さんから、取組をお話しいただきたいと思います。よろしくお願いします。

○岸野氏　日誠産業の岸野と申します。よろしくお願いします。

岸野氏

当社はここから南へ車で１時間ほど走った阿南市にあります。牛乳パックを主な原料としてリサイクルパルプの製造・販売をしています。牛乳パックリサイクルは新聞、雑誌、段ボールらの古紙と違った点が一つあります。それは、牛乳が漏れないようにポリエチレンフィルムで紙がラミネートされていることです。当社は、その牛乳パックをパルプとフィルムに分ける技術に特化しています。昔は、このフィルムが処理できずに牛乳パックはリサイクルできない紙製品でした。紙はパルプとなり、ティッシュ等の、皆様がよく御存じの紙製品になっています。フィルムは、固形燃料による熱回収か、最近では樹脂原料としても利用され始めており、もはや牛乳パックには捨てるところがありません（図2）。

図1

ですので、リサイクルパルプ製造工程においては、最終処分される廃棄物が１％未満であり、このことが評価され、徳島県の３Ｒ促進事業所に認定いただきました（図3）。詳しい工程に関しては、今回割愛させていただきます。

このリサイクル技術をもとに、３Ｒ推進活動をさせてもらっています（図4）。紙コップのリサイクルを始めたきっかけは、５、６年前の阿波踊りのごみゼロステーションで、とある高校生がとった行動で、これなら、紙コップのリサイクルができるのではないかと思い立ち、始めました。お祭りとかのイベントの紙コップは、食べ残しなどいろんなごみが混じっているので、これらをきっちり分別しないとリサイクルが今のところは難しいのです。

ただ、マラソンだったら、もっと簡単にいけるのではないかと思い、取り組んでみました（図5）。マラソンは選手が、紙コップしか捨てていないと思って始めてみると、いろんなごみがありました。一番多いのはエネルギー補給の容器や、驚いたのは手袋やかっぱ等の衣服もあったことです。これは恐らくマラソン特有のものでしょうけれど、やはり全量のリサイクルは難しいのです。ただ、紙コップだけ回収していることが伝わると、皆さん、一つ一つきれいに分けてくれていました。なので、今後、これは期待できるかなと思っています。

図2

図3

図4

続いて、折り鶴昇華プロジェクト（図6）。広島の平和記念公園には、毎年千羽鶴が1,000万羽、重さにして10トンが送られています。これらは、捨てられずに一時期には100トンもの量に膨れあがっていました。これらを長年培った技術とネットワークを生かして、再び命を吹き込むことを目指しました。そして、現在は、特別な紙製品や衣服として再生され始めています。右側が折り鶴から取り出したレーヨンでつくったＴシャツです。あとは、うちわとか、特別なことに使われる紙などに再生されています。

そのほか、これまでも、取り上げられている循環型リサイクルですが、こちらは、大手外資系コーヒーチェーン店でラテなどに使う牛乳パック、これが年間 1,000 トンになっています。これらを同店舗で使用する紙ナプキンへのリサイクルの一端を当社で請け負っています。この紙ナプキンには英語でmilk cartons という文字がありますので、お立ち寄りの際には手にとって見てみてください。

図5

図6

簡単では

ございましたが、当社の事例を御清聴いただき、ありがとうございました。

○崎田氏　ありがとうございます。後ほど、いろいろなところでリサイクルやっておられるときの回収率を上げるために、どのように皆さんに呼びかけているのかなど、ぜひ、教えていただければと思います。ありがとうございました。それでは、最後に、徳島県の尾関さんからお話しいただきます。どうぞ、よろしくお願いいたします。

○尾関氏　よろしくお願いします。徳島県環境首都課の尾関と申します。全国からおいでの皆さん、徳島県へようこそおいでいただきました。少し、徳島県の宣伝をさせていただきたいと思います。皆さんにお配りの徳島県の藍染め、本藍と言いまして、非常に貴重でございます。今回は、一つ一つ手づくりですので、世界に二つとないデザインとなっています。それと、端っこのほうに３Ｒ徳島と入れていただいております。ぜひ、記念に持って帰っていただきたいと思います。徳島県の藍染め体験に、また来ていただけたらと思います。それと、本日は徳島県の観光ガイドマップも入れてあります。ぜひ、この写真の鳴門の渦ですが、明日にでも行っていただければと思います。徳島県といえば、阿波踊りも 400 年の歴史を持っていますので、ぜひ、阿波踊り会館で阿波踊りを堪能していただきたいと思います。西のほうには、三好市の祖谷のかずら橋もあります。いろいろな文化、自然を持っていますので、ぜひ、徳島県を堪能していっていただきたいと思います。

尾関氏

図１

それでは、徳島県の主な取組を御紹介させていただきます（図２）。徳島県の取組を後から振り返れば、昨年と今年が、もしかしたら、エポックメイキングの年になるのではないかと思います。皆さんにお配りしております、この「環境首都とくしま・未来創造憲章」は、昨年、策定いたしました。それと、先ほど、徳島県知事から、水素グリッド構想について御紹介させていただきましたが、昨年、徳島県水素グリッド構想を策定して、徳島県は新たなステージに入ったところです。この会場の外に、実際に水素で走る燃料電池車を展示していますので、見ていただけたらと思います。

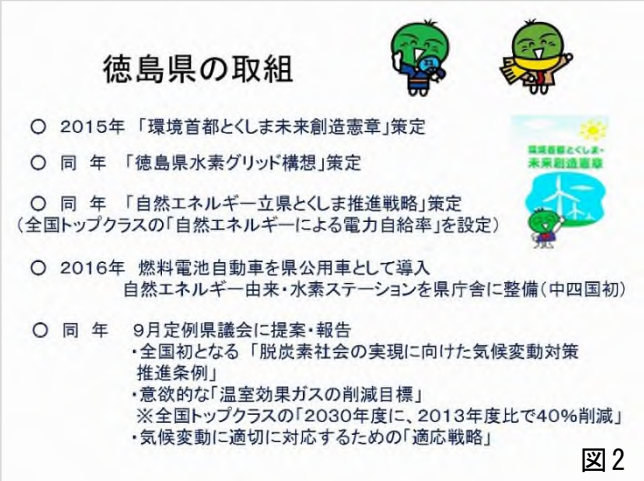


図２

現在、徳島県議会開会中ですが、その中で、徳島県が全国で初めてとなる、脱炭素社会の実現に向けた気候変動対策推進条例案を提案（図３）しています。このように、全国トップクラスの環境対策をこれから進めていこうと考えています。

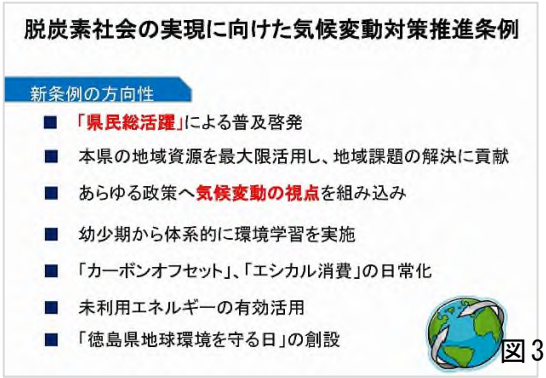
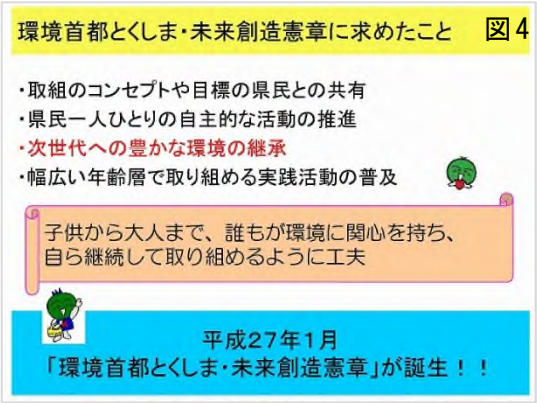


図３

特に、この推進条例は、徳島県民一人ひとりが環境活動に携わっていくことをコンセプトにしています。この条例よりも先に策定しました「環境首都とくしま・未来創造憲章」（図４）も、子供から大人までの幅広い人たちが取り組めるように工夫しています。その中の前文に、私たちから未来の皆さんへのメッセージを載せ、その後に 23 の行動指針を明記してい

ます。３階でパネルを展示しています（図5～6）。そのパネルと同じですが、家庭でこれを見ながら環境活動に携わっていただきたいということで１冊の冊子にまとめています。

未来創造憲章の特徴的なところは、キッズバージョンが小学生、幼稚園、保育園の子供たちを対象にしていることです。その子供たちの将来の環境の負荷を少しでも低減させていこうと考えています。



徳島県では、いろいろな普及啓発をしていますが、その中で、学生地球温暖化防止活動推進員が去年発足しました（図 7）。この前のパリ協定でも、今世紀末までに温室効果ガス排出実質ゼロを目指すということでしたので、若い人たちと一緒に行動するならば、そのうちの何人かの人たちが、環境問題について非常に関心を持っていただけるのではないだろうかということで、この会場をお借りしている文理大学の学生には大変多く参加していただいていますが、徳島大学、四国大学、鳴門教育大学４大学の学生にも学生地球温暖化防止活動推進員になっていただいて、自主的にいろいろな活動を、徳島県と一緒にしていただいています。パリ協定のもとになりましたＣＯＰ21 の前に、徳島駅前で学生たちと一緒にアースパレードをしました（図 8）。その中で、学生にストップ温暖化宣言をしていただいて、同時に四国大学の書道学科の学生に書道パフォーマンスをしていただきました。

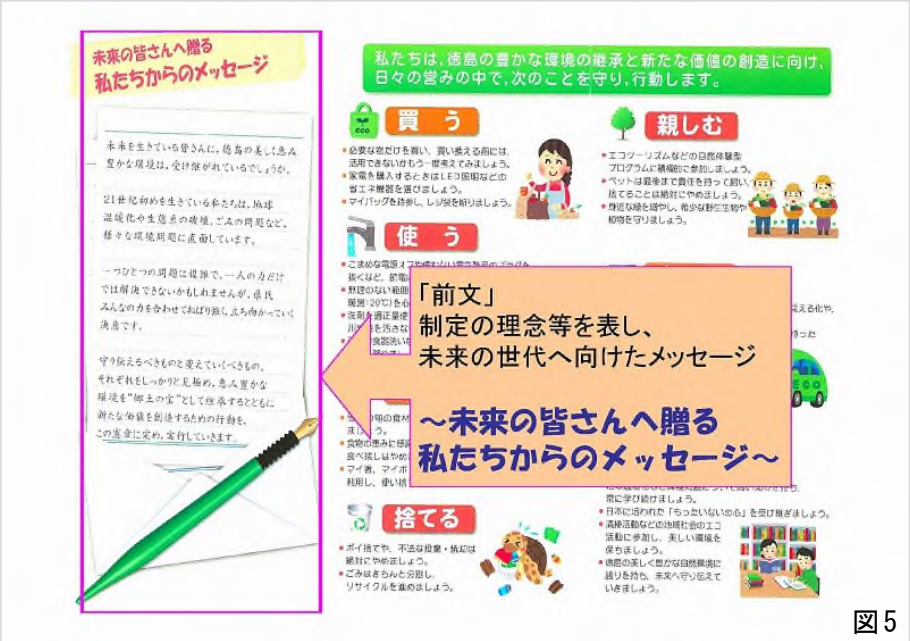


図5

図6

今年９月１日、２日に学生たちと一緒に合宿ということで、初めてこういう試みをやってみました（図 9）。それも、徳島県で一番高い山の剣山、約 2,000 メートル近くある山の頂上に徳島県の環境首都課、エコトイレを設置しています。しかしながら、2,000 メートルの山ですので、いろいろな物資、トイレットペーパーを持

っていくのも大変な状況です。最初は、合宿だけの予定だったのですが、せっかく行くので、剣山に行けないかということで、実は、大塚製薬さんが剣山に宿泊施設をお持ちなので、全面的に御協力いただいて、使わせていただくことができました。みんなでエコトイレの掃除をして参りました。この写真で学生さんが持っている白いものはトイレットペーパーです。山の頂上でトイレットペーパーを持って記念撮影をしました。

図7

私どもがいろいろ事業をするときには、できる限り高校生、大学生などの若い人たちと一緒にできないかと考えています。今のところ、こういったことをやりたいと言えば、手を挙げていただいて、高校生たち、大学生たちと一緒に啓発活動をすることができています。

今後も徳島県としては、若い人たちと一緒にこういった環境活動を続けていこうと考えています。ありがとうございます。

○崎田氏　ありがとうございます。それぞれ先進的に取り組んでいただいていますが、環境省の田中さんから、感想を一言言っていただいてから、皆さんにこれをもっと広めるためにどうするかというお話をしていただいこうと思います。

○田中氏　私は今、お話を聞いていて、大きく三つの感想を持ちました。一つは、大木町と上勝町の共通点として、どういうまちづくりをしていくかというときに、すべてのごみは資源であり、ごみを出さないという意識を宣言し、住民と共有していくというコンセプトがあるからこそ、全国の一般廃棄物のリサイクル率が20%という細田先生からレクチャーがありましたが、大木町63%、上勝町79%という、驚嘆すべきリサイクル率を達成しているということ。

二つ目は、そういった宣言を実行するために住民を巻き込む工夫をしていること。例えば、誰でも見える拠点に収集施設をあえて持ってきて、誰でもが見られるようにする、あるいは、そのアルミ缶を持ってくるところに、それがどこに行って、何になって幾らになるかということをわかりやすく表示したり、あるいは、徳島県も今、一つの基軸として、若い世代を巻き込むために、キッズバージョンをつくったり、学生地球温暖化防止活動推進員という、非常に斬新なアイデアで工夫を図っている。

三つめとして、日誠産業では、牛乳パックから、当初はリサイクル化できなかったような樹脂原料とか、マラソンカップ、あるいは折り鶴など、自分たちにとって何が資源なのか、ビジネスチャンスなのかを、地域、あるいは、自分の置かれた状況の中で、継続的に出てくる供給源としてのごみと販売していく需要先まできちっと捉えている点が非常にすばらしいと思ったところです。

○崎田氏　しっかりとまとめていただき、ありがとうございます。私は、それぞれの皆さんに、目標を明確に

決めて、その後、多くの方を巻き込むために、どこが大変で、どこが大事なポイントになるかというキーワードをいただいて、今日参加しておられる全員の方にお土産として持って帰っていただければありがたいと思っています。

まず、大木町の境さん、生ごみを回収し、資源化をしているというお話でしたが、多くの人を巻き込むために苦労されたポイントがあると思いますが、いかがでしょうか。

○境氏　住民の皆さんは結構真面目な方が多いのですが、ポイントは基本的に自治体のスタンスの問題です。自治体が本気で住民の皆さんに環境のこととか、ごみの分別のこととかを呼びかければきっと応えてくれると思っています。それと、２Ｒをどうしようかという話がありますが、３Ｒの優先順位が非常に大事だと思います。僕は20年ぐらい前に分別の説明会で全町内を回った時に、リサイクル万能みたいな言い方をしたのですが、それは間違いだと思います。リサイクルというのは、あくまで最後の手段で、基本的には、リデュース、リユースを優先すべきです。そのために一番大事なのは、一つは法制度です。国を挙げて、リデュースなり、リユースを推進するような制度をつくらないと、前に進まないということははっきりしていると思うので、ぜひお願いしたいと思います。

○崎田氏　ありがとうございます。境さん、町のスタンスとおっしゃいましたが、ごみを出さない町にすると決めたときには、町長さんはじめ全員すぐオーケーという感じだったのですか。町での合意形成では、どこがポイントだったか教えてください。

○境氏　生ごみの分別に関しては、住民の皆さんと、まず、話し合いながら方向性を出して、すべての地域に説明会に行ったのですが、きちんと説明することで、ほとんどの住民の皆さんは納得していただけたと思っています。住民の皆さんと話し合いながら、一つ一つ積み上げていったというのがすべてです。

○崎田氏　ありがとうございます。それでは、坂野さんに伺いたいのですが、ゼロ・ウェイストについて地域に広げたり、地域の方を巻き込んで行くときのポイントというか、これから全国の方が取り組むためのキーは何か、一言お話しいただきたいと思います。

○坂野氏　今、境さんが話されたとおりだと思いますが、そもそも何のためにやっているのかが、明確であることが必要であると思います。単純にごみを分けてくださいと言われただけでは、そんな面倒くさいこと、誰がやりますかという話だと思いますし、生活の中でごみを出さないようにしてくださいと言われても、先ほどの食べ切りのお話は非常にポジティブなアプローチだと思いますが、買いたいものが容器包装にまみれているから買えないというのは非常にネガティブな発想だと思います。そういったメッセージではなくて、今、必要課題を伝える、例えば、上勝町も、焼却が難しくなったからこそ、リサイクルに取り組み始めましたし、それが結果的に大幅なコストカットになっていて、経済的に見ても効果があると誰もが考えることです。

スマートシティという話が最近よく言われまして、マレーシアの国際会議ではそのテーマで話をしてきたのですけれども、彼らも単純にごみのマネジメントをすることは、もう既に取り組まれてきていることだし、大して意味がないのですが、

経済的に何の効果があるのか、個人個人が住民意識を持って取り組むときに、自分が払っている税金が何に使われているのかというところに興味があれば、これだけ違うことに使えますよというのは意味があることです。どうしても、日本だと、ごみを行政がお金を払ってマネジメントするのは当たり前と思われがちですけれども、それが別の教育とか投資に使われるのであれば、そのほうがよりいいという目標共有だと思います。

○崎田氏　ありがとうございます。やはり、きちんとした情報を地域の方にお伝えしながら、明確にしていくというところが巻き込むところの大事なポイントということですね。

それでは、日誠産業の岸野さんにもお伺いしたいのですが、取組の中で、しっかりと情報と伝えていくとか、巻き込んでいく、リサイクル率をもとっと上げるために、いろいろな立場の方と連携をしていくことが必要だと思うのですが、皆さんにとっては、どういう人たちと連携するのが一番ポイントになっているのか、効果が上がっているのか、そういうことをお話いただければありがたいのですけれども。

○岸野氏　まず、極端な話ですけど、トップダウンとボトムアップの２つですね。ボトムアップのほうは、もう皆さんの善意の上で成り立っているというのが正直な感想です。トップダウンというのは、各企業さんなどで、プロデュースされている方々がもう今はしっかり取り組まれています。減容容器とか、リサイクルしやすい設計をされると、今後進めやすいですし、皆さんもそれにもう乗っかるだけでいいので、進みやすくなっています。弊社も原料を買い取って、販売はしていますが、販売先の企画しているところに、直接話しかけて、こういったものできませんかというように進めています。

○崎田氏　ありがとうございます。会社同士もやっぱりきちんと相手の会社の企画部門と相対するというところですね。

○岸野氏　はい。

○崎田氏　どうもありがとうございます。それぞれの分野でいろいろ御苦労があると思うのですが、今日いろいろ主体間連携が大事だということでお話していますが、会場の皆さんで出てこなかった話とか、どうしてもこれは言っておきたいということがもしありましたら、30 秒ぐらいのコメントでお伺いします。

一人、手が挙がりました。お願いします。

○会場参加者　今日、白井貴子さんの話で、ＥＳＤの話があったと思います。そのＥＳＤと３Ｒ、例えば、「おいしい食べきり運動」とかをうまく組み合わせて、エデュケーションを使いながら、どういうふうに次の世代に伝えていくのかということに、ぜひ取り組んでいただければと思います。

○崎田氏　ありがとうございます。次の世代に伝えることが大事で、教育ということが出てきますけれども、そういうような社会的なＥＳＤの動きとしっかりとつないでやったらどうかという、すばらしい御提案いただきました。ありがとうございます。

それでは、福井県の大石さん、食品ロスをこれから主体間連携で広めるときに何がポイントになるかを教えてください。よろしくお願いいたします。

○大石氏　「おいしい食べきり運動」の協議会では何をやるかということを、明確に決めていただき、それに賛同していただいて、皆さんを盛り上げていく役回りを私たち事務局のほうでして、こちらが提案したものに、何かしらでも乗っかっていただければ、少しずつ全国の中で取組が広がるのではないかと思っています。

○崎田氏　はい、ありがとうございます。今、「おいしい食べきり運動」を全国に広めようということで、やり始めておられますが、忘年会シーズンになったらみんなで 30・10 運動とか、宴会５箇条とか、しっかり食べ切ろうという運動を全国でやっていくのも大事なことだと思います。

それでは、もう最後ですが、壇上の皆さんに、いろんな方を巻き込んで地域社会の運動としてリデュース、リユース、リサイクルの３Ｒを広げていくときに、何を大事にしたらいいのかということについて、皆さんから、言い残したこと、一言ずつお話いただきたいと思います。

○田中氏　廃棄物はきちんと分別すれば宝です。今まで、小型家電とか集めれば金の延べ棒が出てくるようなものを埋め立てていた。化石燃料とか鉱物資源にそれほど恵まれていない日本人として、廃棄物を分けて資源化すれば宝であるということを世界に発信していかないと、地球が２個半あっても足りないという時代になっています。私も海外を見て回りましたけれども、この国がやらないと、多分、だめだろうなという感じをもっているので、ぜひ、徳島から日本に、世界に、発信していけるようなきっかけに、一人ひとりが考えていただければと思います。

○境氏　日本人はもともともったいないという文化を持っているはずなので、そういう感覚が眠っていると思うのです。だから、そういうものを発揮してもらうような仕組みなどを提供すれば、結構皆さん、目覚めてくれるのではないかと思っています。特に、ごみとのつき合い方を考えないといけないと思うのです。すべてごみ袋に入れて出すというつき合い方は、ほとんど無感覚ですべてをごみにするのですね。でも、分別をするということは、例えば、プラスチックを分別するときに、自分はこんなたくさんプラスチックごみを出しているということを感じることができて、それを認識することができます。そうすることで、例えば、リデュースにつながったり、使い捨てのものを買わなくなったり、そういうことにつながってくると思うので、やはり分別は必要と思っています。

○坂野氏　先ほどの、どうやっていろんな方と連携していくのかという話にもつながると思いますけれども、一つはコミュニケーションです。それは、今、自分がやっていることを発信するのもそうですし、何でそれが大事なのかということを共有していくこともそうですし、それがわかれば、個人からできることもたくさんあります。もちろん、行政の仕組みとして、個人でできないところをカバーしていくこともちろん必要ですけれども、例えば、私はこの１週間、海外にいましたが、マイボトルを持っていたことによって、１週間で18本のペットボトルを使わなくて済みました。例えば、こういうフォーラムでもペットボトルが出ていますが、自分が代わりのもの、マイバッグでもいいし、ボトルでもいいのですが、それを持つだけでこれだけ変えられるというインパクトが見えるかもしれないし、分別によっても見えるかもしれないと思います。それは個人ですぐにでもできますので、その結果をぜひ周りでシェアしていただきたいと思います。

○崎田氏　まず、実践からということで、大事なことです。ありがとうございます。では、日誠産業さん、よろしくお願いします。

○岸野氏　３Ｒを進めていく上で、皆様、まず危機感を持ってやられている方と、逆に危機感だけではおもしろくないので、白井さんやマイバッグガールズさんのように楽しくやっていくという、この二つのバランスがとれていればいいのかなと思っています。あとは、若い方たちに教えられることが多いですね。私も、高校生の人たちやっているのを見て、はっとすることがあるので、彼らに任せてみるというのもおもしろいのではない

かと思っています。

○崎田氏　ありがとうございます。今日は３Ｒの一層の推進と主体間連携をテーマに進めてきましたが、徳島県として、今日をきっかけに、ぜひ発信したいということをお話いただければありがたいと思います。

○尾関氏　先ほど、昨年３Ｒ推進全国大会を開催された福井県の大石さんから報告がありましたが、徳島県はこれまで食べ切り運動をやっていなかったのですが、環境首都を標榜しています徳島県は、環境行政は徳島県が日本をリードするという決意のもとに環境首都課というふうな全国にない課名で、徳島県がやらないわけがないということで、子供、若い子たちをターゲットに残さず食べようと呼びかけています。徳島市では、ゼロリンピックと言って、給食残渣がだんだん減っていくように競い合っています。これからを担う若い人たちを巻き込んでいきたいと思います。

若い人たちは、本当に純粋です。何かやりたいということを持っているのですが、どうやっていいのか分からないということがあったりしますので、そういったところに、県とか大人のほうが少し手を携えると、高校生、大学生とかが、本当にこんなことができるのかということまで、やっていただくことができます。本当に、驚くべき力を発揮してもらえるので、若い人たちの力を徳島県が全国へ発信していきたい。これを全国の人たちに提唱していきたいと思っています。

○崎田氏　ありがとうございます。徳島県の皆さんとしては、若い人の知恵とか、柔軟な発想とか、アイデア力、そういうものをいただきながら、全国に３Ｒを広めていきたいというお話でした。私は、それを伺いながら、自治体あるいは組織などの方は、こういう機会にしっかりと資源の有効活用とリサイクルを本気でするという、そういう覚悟をもう一回しっかりとしていただくことはとても大事だと思っています。そして、なぜそうするのかとか、循環資源はその使った後どうなるのかとか、そういう大事な情報を地域社会にきちんと伝えていただくという基本をやっていただくのが、すごく大事と思っています。そのためにも若い方たちの息吹を大事にして、うまくそういう場づくりを広げていただければありがたいと思います。

今日をきっかけに、また若い方とも一緒になって、この３Ｒを進めていきたいと思います。どうも、ありがとうございました。

（6）次回開催地挨拶

沖縄県環境部環境企画統括監　棚原憲実氏

皆さん、こんにちは。御紹介いただきました、沖縄県の環境部環境企画統括監の棚原と申します。よろしくお願いします。

本日は、第11回３R推進全国大会が、海・山などのダイナミックな大自然の魅力にあふれる、ここ徳島県でこのように盛大に、また、成功裏に開催され、大きな成果を上げられましたことを心よりお喜び申し上げます。

また、先ほど、栄えある表彰を受けられました皆様、誠におめでとうございます。引き続き、３R活動に御尽力、御協力いただけることを心より祈念いたします。

さて、来年、第12回になりますが、全国大会を、私ども、沖縄県で開催させていただくことになりました。大変、ありがとうございます。本日の、この会場ですが、非常にすばらしい会場で、徳島県庁の方に聞きますと、この徳島文理大学は非常に沖縄と縁が深いということで、沖縄出身の学生が 250 名ぐらいいるという話を私聞きまして、本当にびっくりしました。この場で、私が挨拶できるのも何かの縁かなと思っております。沖縄出身の学生たち、ここの文化祭とかでエイサーなどを披露したりして、楽しく学業にも励んでいるのかなと思って、とってもうれしく思います。かなり沖縄からは離れているのですが、こういうところで子供たちが頑張っているのを聞くと、とてもうれしく思います。

沖縄県は先ほどのビデオでありましたように、亜熱帯海洋性気候ということで、広大な海に300余りの島、有人島だけでも 49 くらいあります。島の沿岸には、美しいサンゴ礁が発達し、各島々には、特徴的な地形、地質が見られます。それぞれ独自の生態系地域をつくり上げ、豊かな自然にも恵まれております。そして、つい先日、９月 15 日には、沖縄島の北部地域が「やんばる国立公園」として、国内33カ所目の国立公園に指定されました。ヤンバルクイナとかいろんな生き物が生きている地域になっています。そこも、ぜひ、守っていかなければいけないなと感じているところです。

沖縄県は昔から地理的な特徴から、琉球王朝時代には中国や東南アジア諸国との交易が行われて、また独特の伝統文化もございます。このような豊かな自然や文化を守り、次の世代に、ぜひ、引き継いでいくためには、循環型社会の構築が極めて重要であり、そのためには、３Rをさらに推進していきたいと考えております。

来年の３R推進全国大会につきましては、ここ徳島県の大会同様に、県民一同おもてなしの心を持ってお迎えしたいと思っております。大会の際には、３Rに関する新たな知見、情報をお互いに共有し、皆様とともに、循環型社会を推進して参りたいと考えております。また、御参加の際には、ビデオでもありましたように、10 月ですと、まだ泳げます。ぜひ、延泊されて、沖縄の独特の自然や文化に触れていただきたいと思っております。ぜひとも多くの皆様に沖縄にお越しいただけますようお願い申し上げまして、御挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

（６）名刺交換会

記念シンポジウム終了後、１階のアクティブラウンジで、主催関係者、講師・パネリスト、出展関係者と３Ｒ推進全国大会参加者による名刺交換会が行われました。出席者は、用意された地元徳島県の特産品の飲み物「さわやかすだち」「阿波の天然水」「阿波のこだわり緑茶」「すだちサイダー」や菓子「金長まんじゅう」「滝の焼餅」「阿波ういろ」「鳴門金時スイートポテト」を味わいながら、歓談しました。

４．関連行事

（１）施設見学会

10 月 20 日（木）午前中、午前 8 時に徳島駅前のサンルートホテル前に集合し、大型バス 1 台に乗り、徳島県勝浦郡上勝町にある上勝町ゼロ・ウェイストアカデミーが運営する日比ヶ谷ゴミステーションおよび介護予防活動センターひだまりを 34 名が見学しました。

上勝町ゼロ・ウェイストアカデミーでは、①ゴミステーションの管理・運営、②不要になった古布をリメイクする「くるくる工房」の管理・運営、③不用品交換場所「くるくるショップ」の管理・運営、の三つの取組について説明がありました。

ゴミステーションは、13 品目 45 種類を分別しています。紙ごみも、名刺サイズの紙から、トイレットペーパーの芯など細かく分別しているため、実際には 60 種類ほど分別しているそうです。

くるくる工房では、不要になった布や綿などからリメイク商品を作り販売しています。鯉のぼりを使って作られたジャンパーや、古着をリメイクして出来た小物やアクセサリーなどが販売されていました。

不用品交換場所では、町民が持ってきた不用品（主に食器類）をくるくるショップで展示し、訪れた人に無料で提供しています。

上勝町のごみ減量の取組についての説明

ゴミステーション分別の様子

リメイクショップ（くるくる工房）視察

不用品交換場所（くるくるショップ）視察

（２）３Ｒ推進展示コーナー

２階、３階のフロア（ホワイエ）では、３Ｒ推進展示コーナーが設けられ、３Ｒ推進全国大会開会前には、梶原環境省地球環境審議官、飯泉徳島県知事、細田３Ｒ活動推進フォーラム会長らが展示を視察しました。３Ｒ推進展示コーナーには 35 団体・企業等が出展し、取組などを紹介しました。

●出展者（順不同）

【２階展示コーナー】

○環境省○３Ｒ活動推進フォーラム○白井貴子さんコーナー
○リデュース・リユース・リサイクル推進協議会○段ボールリサイクル協議会
○飲料用紙容器リサイクル協議会○アルミ缶リサイクル協会○スチール缶リサイクル協会
○プラスチック容器包装リサイクル推進協議会○紙製容器包装リサイクル推進協議会
○ＰＥＴボトルリサイクル推進協議会○ガラスびん３Ｒ促進協議会○３Ｒ推進団体連絡会
○㈱四電工○リコージャパン㈱○㈱徳島機械センター○日清紡グループ徳島事務所
○㈱那賀ウッド○(株)旭金属○大塚製薬㈱徳島板野工場○（公社）食品容器環境美化協会
○ＮＰＯ持続可能な社会をつくる元気ネット○ＮＰＯ環境コミュニティみらい
○環境省中国四国地方環境事務所高松事務所○キーフォルダー作り○くるくる工房

【３階展示コーナー】

○３Ｒ促進ポスターコンクール入賞作品展示○徳島市○ＮＰＯ徳島環境カウンセラー協会○徳島県イーゼル○ＮＰＯゼロ・ウェイストアカデミー○徳島県○ＮＰＯ徳島共生塾一歩会・一歩会ユース○香川県○愛媛県○高知県

展示コーナーを視察する飯泉知事、梶原環境省地球環境審議官、細田３Ｒ活動推進フォーラム会長ら

四国４県の出展ブース

地元事業者や事業者団体も出展

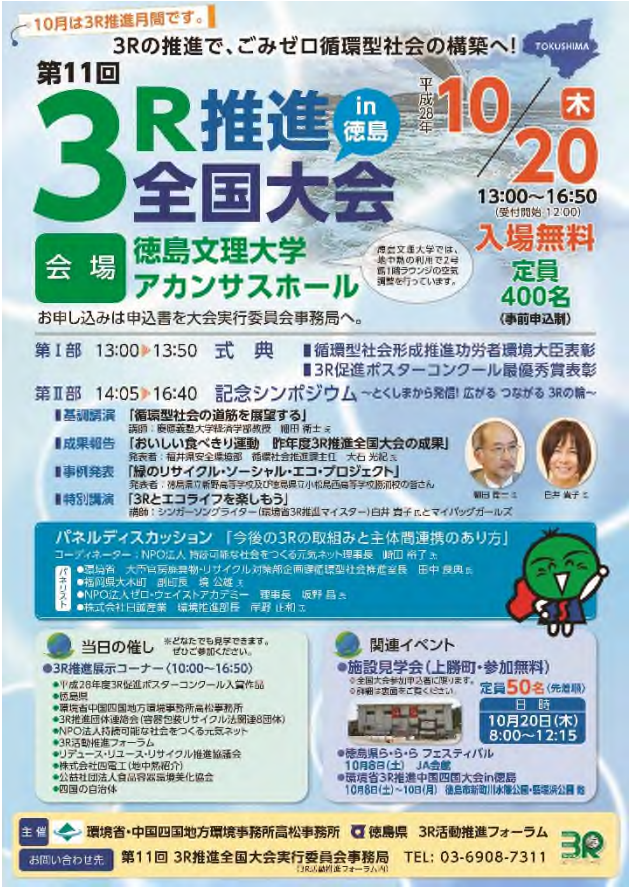
環境省高松事務所ブース

ＮＰＯ団体ブースで

キーホルダー作りに挑戦

５．資料

（１）３Ｒ推進全国大会開催案内（参加申込書）



表面

裏面

（２）参加者用パンフレット

１ページ

２ページ

３ページ

４ページ

（３）来場者アンケート

①アンケート票

第 11 回３Ｒ推進全国大会アンケート

アンケートへの御協力をお願いいたします。お帰りの際、受付の回収箱にお入れ下さい。

1　大会全体についてどのように感じましたか。
　①　大変よかった　　②　よかった　　③　普通　　④　よくなかった

2　特に良かったプログラムは何ですか？（複数回答可）
　①　施設見学会（上勝町ゼロ・ウェイストアカデミー）
　②　表彰式
　③　基調講演「循環型社会の道筋を展望する」
　④　成果報告「おいしい食べきり運動　昨年度３Ｒ推進全国大会の成果」
　⑤　事例発表「緑のリサイクル・ソーシャル・エコ・プロジェクト」
　⑥　特別講演「３Ｒとエコライフを楽しもう」
　⑦　パネルディスカッション「今後の３Ｒの取組みと主体間連携のあり方」
　⑧　３Ｒ推進展示コーナー（２Ｆ及び３Ｆ）

3　良いと思わなかったプログラムは何ですか？（複数回答可）
　①　施設見学会（上勝町ゼロ・ウェイストアカデミー）
　②　表彰式
　③　基調講演「循環型社会の道筋を展望する」
　④　成果報告「おいしい食べきり運動　昨年度３Ｒ推進全国大会の成果」
　⑤　事例発表「緑のリサイクル・ソーシャル・エコ・プロジェクト」
　⑥　特別講演「３Ｒとエコライフを楽しもう」
　⑦　パネルディスカッション「今後の３Ｒの取組みと主体間連携のあり方」
　⑧　３Ｒ推進展示コーナー（２Ｆ及び３Ｆ）

4．上記で回答いただいたものについて、具体的にどのようなところが良くなかったのか。また、どのように改善すればよいものになると思うか、お書きください。

5．大会に参加して、３Ｒに対する意識に変化がありましたか。
　①　意識に変化があり、行動につなげようと思った　　②　意識に変化はなかった

6．上記で①と回答された方は、具体的にどのように変化があったかお書きください。
　また、②と回答された方は、どう改善すれば、３Ｒ行動につながると思うか、お書きください。

7　３Ｒ推進全国大会については何でお知りになりましたか？　（複数回答可）
　①　案内状が送られてきた
　②　ネット・メール（具体的に　　）
　③　新聞、専門誌等（具体的に　　）
　④　被表彰者、施設見学先等ご参加者からの案内
　⑤　④以外の知り合い
　⑥　県等からの呼びかけ
　⑦　その他（　　）

8　大会の運営方法、スタッフの対応はいかがでしたか
　①　大変よかった　　②　よかった　　③　普通　　④　よくなかった

9　大会のプログラムや進め方等について御意見があればお書き下さい。

10．あなた自身について御尋ねします。
　（１）御参加のお立場
　　①　被表彰者又はそのご関係者　　②　施設見学参加者　　③　①及び②以外
　（２）御所属（複数回答可）
　　①　都道府県　　②　市町村　　③　一部事務組合
　　④　国・関係機関　　⑤　ＮＰＯ・市民団体　　⑥　個人
　　⑦　報道関係　　⑧　廃棄物・リサイクル関係業界　　⑨　⑧以外の企業、団体
　　⑩　大学、研究者、コンサルタント等
　（３）本日はどちらから御参加いただきましたか？
　　①　徳島県内　　②　徳島県以外（　　都道府県）

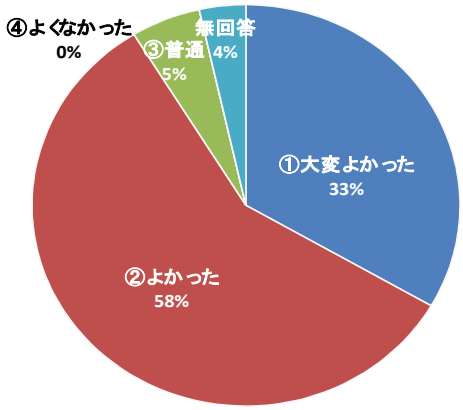
11．その他、御意見があれば御自由にお書き下さい。

御協力ありがとうございます。

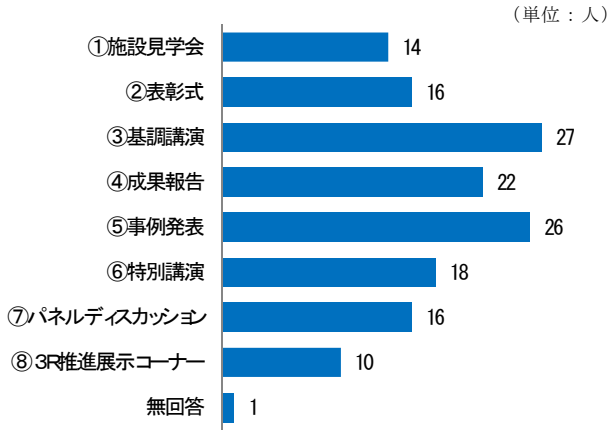
②アンケート集計結果

第 11 回３Ｒ推進全国大会来場者アンケート集計（回答数 57 名）

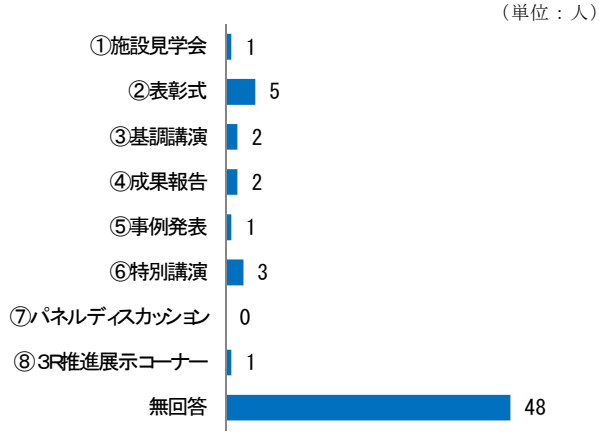
1　大会全体についてどのように感じましたか。



2　特に良かったプログラムは何ですか？（複数回答可）



3　良いと思わなかったプログラムは何ですか？（複数回答可）



4　上記で回答いただいたものについて、具体的にどのようなところが良くなかったのか。また、どのように改善すればよいものになると思うか、お書きください。

・結果のデータよりも我々がこれから積極的にやっていかなければならないこと等を詳しく説明してほしかった。
・スクリーン内容、字がわかりにくい。舞台のライトを消してほしかった。
・特に悪いというわけではないが、中央広域環境センターの溶融スラグが現在生産されているものと品質がだいぶ違うようだった。展示用の古いものだろうか。
・一部文字が多すぎて画面が見づらかったと思います。

＜②について＞

・表彰式の時間が長い。
・表彰者一人一人で写真を撮るより、全員で並んで写真を撮るようにしたらどうでしょうか。最後の全員写真だけでいいのでは。最初の表彰は個人的に撮れば良いと思います。時間が長い。
・他の場所で式をするべき
・表彰式の個々の写真は時間の無駄。

＜③について＞

・基調講演の内容は今日参加している方々は、知っているのではないか？あまり収穫になるものはなかった様な気がする。
・もう少し発表内容を分かりやすく発表してほしかった。

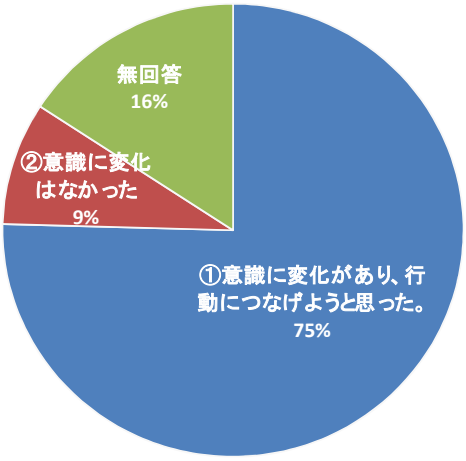
＜⑥について＞

・特にいらないのではないかと思った。せめて時間を短くし1 曲程度で。
・マイバッグガールズの啓発運動は良いと思いますが、何が目的かあまりわかりない。もう少し楽しく誰もが歌いやすい曲がいいのでは。

＜⑧について＞

・展示の説明を解説する人がいるべき

5　大会に参加して、３Ｒに対する意識に変化はありましたか。



6　上記で①と回答された方は、具体的にどのように変化があったかお書きください。また、②と回答された方は、どう改善すれば、３Ｒ行動につながると思うか、お書きください。

＜①と回答された方＞

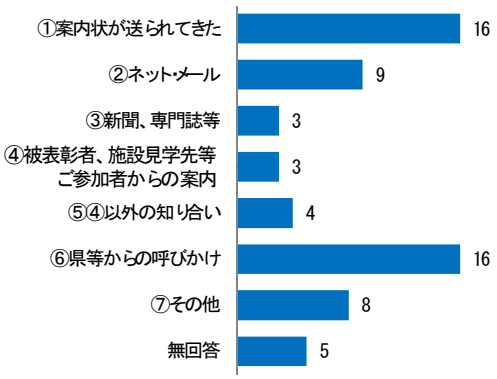
・使えるものはずっと使用することで3R行動推進につながると思う。
・3R活動に対する期待の大きさを改めて感じることができた。循環利用率を上げる必要性を再認識できた。
・畜産業における取り組み等を知ることができ、地元地域での普及活動につなげていきたいと感じた。
・食べきり運動に共鳴。実践していく。
・日常の考え方を変えてゆくことの大切さを学んだ。
・再資源化のために日々分別すること。
・市のルールに基づいて分別していますが、発生抑制が一番大切であることが再認識されてよかったです。
・高校生の「緑のリサイクル」は、大いに参考になった。ほとんどの所は焼却していると思います（公共事業を含めて）が、地球環境のためにも活用すべきであると思います。（まず、公共事業で見本をみせる）
・3Rをすすめようと思った。することで最終処分場の延命、また、資源の確保につながることがよくわかりました。
・徳島県内で脱炭素社会に取り組む新野高校及び小松島西高校等について知らなかったので、感動した。刈草がリサイクル堆肥になったことはすばらしい。
・製品を製造したところの責任、製品を買った消費者の責任を明確にし、それを3Rできるように最後までその製品に責任を持つ。（ごみリサイクルするための税を課す）
・個人的に意識は良くなったが、団体で活動が必要、社会を変える必要を感じた。
・市町村等単位で個人参加→社会が変化。これから期待。
・自分でどれだけできるか、考えてみる。
・発生抑制について興味をもった。
・自分自身3R運動に満足していたが、今回、もっと3Rを深刻に受けとめ、全国的スケールで教えていただいてよかったし、また聴きたい。今度認識新たに運動を進めるつもりです。
・今までも3Rは心がけていましたが、なお一層実施していきたい。
・再利用の％が悪いのでもっと資源として活かすこと。本日はグレードの高い良い会合でした。時間をもっととって、ゆっくり聞きたかったです。
・食品ロスをこれから、自分のまわりの人たちに広め見直そうと思う。
・小さな一歩かもしれませんが、今後意識して3Rに取り組んでいきます。
・事業と事業を結ぶブリッジが必要になってくると思った。
・食品ロスの多さを改めて知って、まずは自分の日々の食事から食品ロスを削減していこうと思った。
・より一層の分別を心掛けようと思います。
・ペットボトル、アルミ缶等少量の時は不燃物や一般空き缶に入れていたが、めんどうでも分別しようと思った。
・3Rのビンゴゲームをしましたが、わかっていたはずのアルミ缶、段ボールなど利用リサイクルが間違っていたものも１個あり、改めて勉強することができました。

＜②と回答された方＞

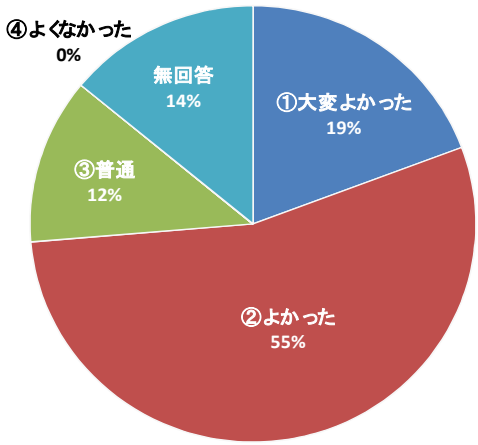
・もともと3Rに対する意識をしていた。
・自分自身としては、特に大きな変化はない。これまで同様にできる取組を考え行動につなげていこうと思います。
・関心のない人にどうすれば関心を持ってもらえるかを考える必要があると思いますが、なかなか難しい。
・もともと3R推進派なので、「意識に変化は特にないが、行動につなげようと思った」。

7　３Ｒ推進全国大会については何でお知りになりましたか？　　（複数回答可）

（単位：人）



8　大会の運営方法、スタッフの対応はいかがでしたか？



＜②と回答された方＞

･エコみらい徳島からのメール

＜⑦と回答された方＞

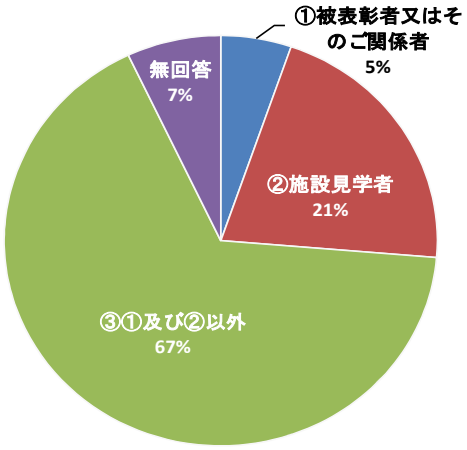
･先生からの呼びかけ
･表彰に応募
･出展
･職場
･徳島市消費者協会から

9　大会のプログラムや進め方等についてご意見があればお書き下さい。

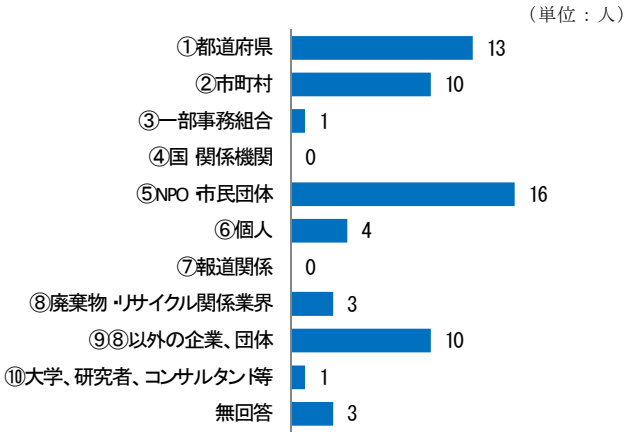
･パネルディスカッションの時間が少なかった。もう少し聞きたかった。
･全体的に時間が遅れた。時間配分に工夫を。
･徳島駅から会場へのシャトルバスの乗り場がわからない。パンフレットに記載すべき。
･式典のみ実施するのではなく開催県の先進地視察をプログラムに入れていただけることは参加動機につながりとても良いと思います。
･時間が押したのがおしい。休憩時に写真を撮るのはいいと思う。
･シャトルバスの「出発場所」を案内チラシに書いておいてほしかったです。
･予定の時間どおりに進行してほしい。遠方から来ているので、電車に乗り遅れる。
･表彰行事が長時間すぎる。時間がもったいない。
･午後からの開催で少し時間が短いのでは（発表が急ぎ気味）。10 時くらいから始めてはいかがでしょうか。発表に例え話が入れられる余裕をもたせてあげてほしいと思います。
･質問時間等がほしかった。
･良かったと思います。
･日程びっしりで実に協力的でみなさんの熱意も伝わってきた。本当に良かった。1 日ではもったいないくらいであり、また高校生の発表は心惹かれたし、エールを送りたい。特別講演は堅い話から一変してこれもよかった。食べきり運動は単になぜ？と思っていたが 3Rに結びつくことがわかり、自分自身にとってもこの運動に参画してよかったと思う。今後とも頑張る。
･前半の時間管理が甘く、パネルディスカッションが短くなったのが、非常に残念だった。
･高校生の「もったいない 2号」の取り組みには感動しました。
･内容、大会の進行、すごく良かったです。
･終了時間だけは守ってほしいです。
･基調講演や成果報告、事例報告等での質疑応答時間を設けてほしい。
･少々の時間のずれはあったけど、全体としてはよかったと思います。発表者の努力されているのがよくわかりました。
･質疑応答の時間を設けてある程度の意見を聞けばと思います。

10　あなた自身について御尋ねします。

（1）御参加のお立場



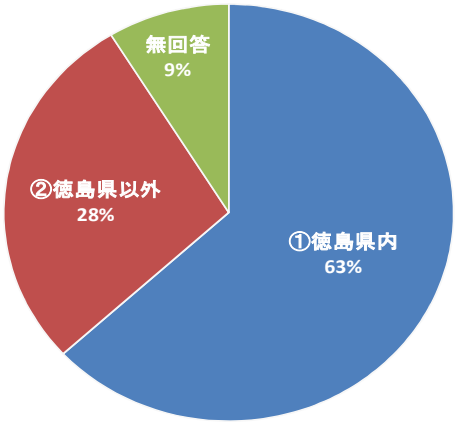
（2）御所属（複数回答可）



（3）本日はどちらから御参加いただきましたか？

＜②と回答された方＞

・青森県	・岐阜県
・岩手県	・愛知県
・東京都	・滋賀県
・神奈川県	・山口県
・富山県	・香川県
・長野県	・宮崎県



11　その他、御意見があれば御自由にお書き下さい。

・全国での取り組みを学んで、3R推進活動の重要性を再確認することができた。
・改善事例導入を検討するために受賞者連絡先がわかった方がよい。
・すばらしい基調講演で、たくさん知識を得ました。
・駐車場確保を充実してほしい。
・議会内でも「食べきり運動」について議論をいたしました。今後深めてまいりたいと考えます。進行についてはよかったと思います。
・流行に流されず、地道に続けていくことが大切であると思うので、世間で注目度が低くなっても継続してごみ減量、リサイクルを啓発していきたいと思います。
・会場がイスにテーブルもついていてメモがとりやすくてよかった。
・駐車場の確保と案内
・ごみになる製造された製品等をリサイクル可能にならないか、製造の段階でリサイクルの可能な材質にかえる方法など研究できる機関を徳島県で設ける。
・家庭内ごみのうち、特に多いごみから研究をすすめてみてはどうかと思います。
・包装（ビニール→包装紙）にして再利用。
・毎年参加しておりますが、今年度の徳島大会が一番良かったです。沖縄に行きます。
・徳島県が給食残しに取り組んでいると最後に言っていましたが、教師が子どもに強制的に食べさせるということがないようにしてください。過去に私の子ども時代にひどいことをする教師がいましたから。
・貴重な機会をありがとうございました。
・30 分延長は長い。
・駅発のシャトルバスの乗り場が表示されておらず困りました。
・バスの乗り場がわかりにくかった。何度も電話で問い合わせましたが、その度に返事の内容が違っていて困りました。
・会の呼び名「スリーアール」ですが、「サンアール」ですか。パネリストも両方使っていました。

（４）報道掲載記事

循環型社会 理解深める

徳島市で３Ｒ推進全国大会

徳島市の徳島文理大で20日、循環型社会の実現を目指す３Ｒ推進全国大会（環境省など主催）があり、行政関係者や研究者、事業者ら約４００人が出席して先進事例の紹介や講演に耳を傾けた。

資源を循環させることの重要性を説く細田教授＝徳島市の徳島文理大

環境省の中央環境審議会委員を務める細田衛士慶応大教授が、基調講演で国内のリサイクルの現状を解説。古紙やアルミ缶など回収した資源の一部が海外流出していることに懸念を示し「資源のない日本は国内で再生資源の市場を整備し循環利用を進めるべきだ」と強調した。

パネルディスカッションでは、古紙再生業・日誠産業（阿南市）の岸野正和環境推進部長がマラソン大会で廃棄される紙コップや広島市平和記念公園の千羽鶴を再生する事業を紹介。福岡県大木町の境公雄副町長は焼却ごみ削減のため、使用済みの紙おむつからパルプを取り出す取り組みについて説明した。

３Ｒはリデュース（発生抑制）リユース（再使用）リサイクル（再生利用）の頭文字をとった言葉。大会は毎年開いていて、中四国での開催は初めて。（青木寛倫）

徳島新聞 10 月 21日

徳島市で3R推進全国大会開催へ

環境省・3RFが主催
―ごみゼロ循環型社会を構築へ―
細田教授が基調講演

10回目を迎えた昨年の3R推進全国大会のようす（昨年11月に福井県福井市で）

毎年恒例の3R推進全国大会が、今年10月20日に徳島県徳島市の徳島文理大学アカンサスホールで開催される。今回は、細田裕十徳島文理大学教授が、「循環型社会の構築へ―」がテーマとなる。主催は環境省・中国四国地方環境事務所、徳島県、3R推進フォーラム。3R推進全国大会は、国民・事業者・行政が一堂に会し、循環型社会形成についての知識や経験についての情報を交換、ごみゼロ社会の実現と循環型社会の形成に向けた意識を高めることを目的に毎年行われている。

今回は、細田教授が基調講演を行う。また、「3Rの推進で、ごみゼロ型循環型社会の構築へ―」がテーマとなる。主催は環境省・中国四国地方環境事務所、徳島県、3R推進フォーラム。3R推進全国大会は、国民・事業者・行政が一堂に会し、循環型社会形成についての知識や経験についての情報を交換、ごみゼロ社会の実現と循環型社会の形成に向けた意識を高めることを目的に毎年行われている。

今回は、細田教授が基調講演を行う。また、「3Rの推進で、ごみゼロ型循環型社会の構築へ―」がテーマとなる。主催は環境省・中国四国地方環境事務所、徳島県、3R推進フォーラム。3R推進全国大会は、国民・事業者・行政が一堂に会し、循環型社会形成についての知識や経験についての情報を交換、ごみゼロ社会の実現と循環型社会の形成に向けた意識を高めることを目的に毎年行われている。

平成18年に3RFが発足

今回、環境省、徳島県とともに第11回3R推進全国大会を開催する3Rは、これまでのように「循環型社会の形成や3Rを通じた国際貢献」。同会議は、平成4年4月に設立され、同18年1月に、ごみゼロ・ロードナーシップ会議に改称され、その後、平成16年に開催された3Rシーアイランドサミットで、日本が3Rイニシアチブを提唱し、国際NGOやIGOなどを会員として、3Rに関する会議や情報を交換し、参加者一人ひとりがそれぞれが持っている広がるつながる3Rの輪をテーマに、簡略や成果事例報告会、パネルディスカッションなどが催される。

徳島文理大学で開催へ

今年度の3R推進全国大会は、徳島県徳島市の徳島文理大学アカンサスホールで開催される。第1部の式典では、「循環型社会形成推進功労者表彰」、「3Rシーアイランドサミットコンクール優秀表彰」などが行われる。第2部の記念シンポジウムは、「ひとしまから発信！広がる・つながる・3Rの輪」をテーマに、「循環型社会の構築へ―」と題した基調講演、昨年度の3R推進全国大会の成果報告、事例発表が行われる。また、おなじみのシンポジウムライターの白井敦子氏による特別講演、さらにはパネルディスカッション、3R推進展示コーナー、施設見学会など多彩な行事が予定されている。

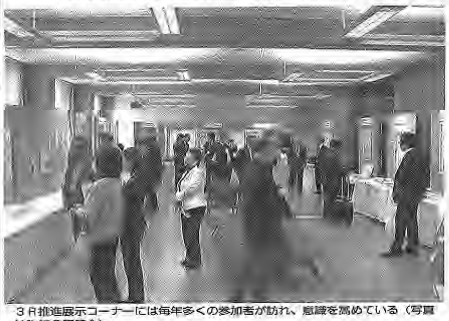
【第1部】13時～13時50分・式典
▽循環型社会形成推進功労者表彰式・3R推進全国大会表彰
▽徳島県知事賞表彰
【第2部】14時50分～16時40分・記念シンポジウム「ひとしまから発信！広がる・つながる・3Rの輪」
▽基調講演（「循環型社会の構築へ―」）
▽事例発表（「豊かなリサイクル・ソーシャル・エコ・プロジェクト」（徳島文理大学高等学校分校小松島西高等学校）、「3RとエコライフをEnjoyしちゃう」（白井敦子氏マイバッグガール、シンガーソングライター）、「廃棄物3Rの取組みと生活相談のあり方」（コーディネーター・増田智子NPO法人特定非営利活動法人ネットワーク理事長、パネリスト・田中吉晴環境省大臣官房廃棄物・リサイクル対策部企画調整課長、吉野正明日本産業廃棄物処理振興センター理事長、塚谷恒雄元本町副町長、岩野正明日本産業廃棄物処理振興センター理事長）
▽パネルディスカッション（「循環型社会の構築へ―」）
▽閉会式（「おいしい食べ方の提案」）

昨年度の3R推進全国大会は10月20日（木）13時から16時50分まで、徳島県徳島市の徳島文理大学アカンサスホールで開催される。テーマは、「3Rの推進で、ごみゼロ型循環型社会の構築へ―」。今年の全国大会では、細田裕十徳島文理大学教授による基調講演、昨年度の3R推進全国大会の成果報告、事例発表が行われる。また、おなじみのシンポジウムライターの白井敦子氏による特別講演、さらにはパネルディスカッション、3R推進展示コーナー、施設見学会など多彩な行事が予定されている。

【第1部】13時～13時50分・式典
▽循環型社会形成推進功労者表彰式・3R推進全国大会表彰
▽徳島県知事賞表彰
【第2部】14時50分～16時40分・記念シンポジウム「ひとしまから発信！広がる・つながる・3Rの輪」
▽基調講演（「循環型社会の構築へ―」）
▽事例発表（「豊かなリサイクル・ソーシャル・エコ・プロジェクト」（徳島文理大学高等学校分校小松島西高等学校）、「3RとエコライフをEnjoyしちゃう」（白井敦子氏マイバッグガール、シンガーソングライター）、「廃棄物3Rの取組みと生活相談のあり方」（コーディネーター・増田智子NPO法人特定非営利活動法人ネットワーク理事長、パネリスト・田中吉晴環境省大臣官房廃棄物・リサイクル対策部企画調整課長、塚谷恒雄元本町副町長、吉野正明日本産業廃棄物処理振興センター理事長）
▽パネルディスカッション（「循環型社会の構築へ―」）
▽閉会式（「おいしい食べ方の提案」）

昨年度の3R推進全国大会成果報告（「豊かなリサイクル・ソーシャル・エコ・プロジェクト」）

環境大臣表彰も予定されている（写真は昨年の全国大会）


3R推進展示コーナーには毎年多くの参加者が訪れ、意識を高めている（写真は昨年の展示会）

循環型社会部会では食り制度を検討（今年9月）

鷹岡教授では、廃棄物・リサイクル制度の検討、ロス削減がテーマのひとつとなったが、福井県の「おいしい食べ切り運動」について大石氏が紹介する。また、昨年の全国大会では福井県福井市で開催された、福井県産の農産物を使用した食品の試食会、環境省や緑水産、3R推進全国大会実行委員会、3R推進県・徳島県・徳島市・3R推進全国大会実行委員会・徳島県産業廃棄物処理振興センター、徳島県産業廃棄物処理振興センターの共催で行った初の、今年中に行われる、リサイクル制度の検討を含む、昨年度の全国大会の成果報告、昨年は食品廃棄物リサイクル法の規定、廃棄物処理法、特に食品廃棄物リサイクル、特に食品廃棄物の処理に関する

徳島市で3R推進全国大会

環境省・3RFなどが主催

今年の全国大会は徳島市の徳島文理大学で開催された

第11回3R推進全国大会が、20日午後1時から徳島県徳島市の徳島文理大学アカンサスホールで開催された。環境省・環境省中国四国地方環境事務所高松事務所、徳島県、3R活動推進フォーラムの共催。3R推進全国大会は、国民・事業者・行政が一堂に会し、循環型社会の形成に関する知識や経験を交換し、3R推進への理解を深める場として毎年開催されている。今回は大学での開催ということもあり、学生の参加も目立った。

はじめに環境省の梶原成元地球環境審議官が挨拶。昨年合意された「2030年に向けた持続可能な開発目標」やパリ協定等に触れて「ごみの発生を抑制し、自然と共生する社会を作るためには、わたしたち一人一人が生活を見直し、行動していく必要がある。この大会が3Rを広める良い機会になってほしい」とし、同大会の意義を強調した。

徳島県の飯泉嘉門知事は、同県上勝町が日本で初めて掲げたゼロ・ウェイスト宣言や、同県神山町のアドプト・プログラムを紹介し、「徳島全体が『環境首都とくしま』という方向で、様々な取り組みを先進的に進めている」とした。

大会では、平成28年度循環型社会形成推進功労者環境大臣表彰として、7企業、11団体、個人1名に対して表彰状が贈られた。また、3R促進ポスターコンクール最優秀賞表彰として、小学生低学年の部、中学年の部、高学年の部、中学生の部それぞれの最優秀賞受賞者4名が表彰された。

ポスターコンクールの表彰も行われた

記念シンポジウム「とくしまから発信！ 広がる つながる 3Rの輪」では、3R活動推進フォーラムの細田衛士会長が「循環型社会の道筋を展望する」と題して基調講演。廃棄物の発生抑制が進んでいる一方で、国内で回収された資源が海外に流出している現状を説明、「日本は高度な3R技術を有するが、それを有効活用できていない。国内での資源循環利用を進めるべく、消費者・生産者・企業・国・自治体がさらに連携・協力していくべき」と説いた。

成果報告「おいしい食べきり運動 昨年度3R推進全国大会の成果」は、福井県安全環境部循環社会推進課の大石光紀主任が発表。昨年度の大会を契機に、「全国おいしい食べきり運動ネットワーク協議会」を設立した経緯を説明した。

事例発表「緑のリサイクル・ソーシャル・エコ・プロジェクト」では、同プロジェクトに参加する徳島県立新野高等学校および同県立小松島西高等学校勝浦校の皆さんが、日頃の成果を発表。植物廃材（刈草）を原料とした土壌改良材を開発し、生産・配布している活動、緑のカーテンづくりを通じて温暖化対策、環境創生、地域活性化を図る活動について報告した。

特別講演「3Rとエコライフを楽しもう」では、シンガーソングライター（環境省3R推進マイスター）白井貴子氏と、「環境首都とくしま・未来創造憲章啓発用動画」の最優秀賞を獲得したマイバッグガールズが、歌とダンスで3RをPRした。

後半のパネルディスカッション「今後の3Rの取組みと主体間連携のあり方」では、3R活動推進フォーラムの崎田裕子副会長がコーディネーターとなり、環境省、福岡県大木町、NPO法人ゼロ・ウェイストアカデミー、㈱日誠産業、徳島県からのパネリストが意見を交換した。

3R推進展示コーナーには、ポスターコンクールの入賞作品や徳島県、団体、企業等のブースが設けられたほか、シンポジウムで事例発表した緑のリサイクル・ソーシャル・エコ・プロジェクト・チームが、土壌改良材「もったいない2号」を無料配布した。

The Waste Management 10月25日

第11回3R推進全国大会 20日に徳島市で

「とくしまから発信！広がるつながる3Rの輪」テーマに記念シンポジウム

19の企業・団体・個人に 循環型社会推進功労者表彰

3Rの推進に関する顕著な功績を称え、循環型社会形成に向けた取り組みを推進すること等を目的とした「第11回3R推進全国大会（全国3R推進フォーラム）」が20日、徳島市の徳島文理大学で開催される。同大会には、循環型社会形成推進功労者表彰を行う式典や記念シンポジウム、ブース展示、上勝町の視察等が盛り込まれている。

第1部：式典

循環型社会推進功労者表彰式と3R推進ポスターコンクール最優秀賞の表彰式が行われる。

【企業】

▽きのこや（北海道）

2005年にゼロエミッションの取り組みを開始し、資源ごみの回収、食品廃棄物の再資源化に、12年には設備の切り替えを行い乳酸菌の利用・販売を行なうなど、ゼロエミッションの取り組みを展開している。

▽生活クラブ生協千葉県組合（北海道）

全国の生活クラブ生協と連携し、生産者・地域の資源回収業者の協力のもと1993年に独自のびん再使用システムを構築し、回収率90%を自慢としている。14年度の回収率は76・9%となった。

▽エヌエスオカムラン（宮城県）

食品関連の廃棄に必要の無い量産では、スラッジの発生が不可避であるなか、処理工程の見直しと接着剤による年間15トン発生していたスラッジをゼロにするとともに、下水汚泥によるバイオガス（燃料）化により処理コストを大幅に低減した。

▽ゆうゆうき（岐阜県）

97年から下水汚泥の工業用形状へのリサイクル、99年に廃棄物処理業許可を取得し、01年11月にはチルド業界初のゼロエミッションを達成した。

▽ミツウロコ（東京都）

11年に徹底した気密化排水改良により廃棄物を導入して、再資源率を80%に向上するとともに、14年にはこれまで産業廃棄物として処理してきた石膏ボードを乾燥・粉砕し、商品として再資源化し全量販売するようになった。

【団体】

▽志木市くらしの会（埼玉県）

75年から資源の有効活用・生態調・環境保・消費者の相互の意識啓発をテーマに、資源の有効利用を考える消費生活展やリサイクル製品展の実施などを通じ、環境意識の向上に努めている。

▽石川県リサイクル協議会（石川県）

一のリサイクル、廃ボールペンボードを使用、また、14年から県内で出る廃ペット食品ロス削減の運動にも取り組んだ。

▽NPO法人ピロ・ウェイストアカデミー（徳島県）

05年からのゼロ・ウェイスト社会をつくるために、34分別を行う町内唯一の分別収集事業の運営や、不要になった衣類・雑貨のリユースや再販売する施設の運営販売やリサイクル商品の開発等も行っている。

▽本城郵便局（徳島県）

04年から資源ごみの回収を開始し、現在では全ての郵便局としてマイバッグキャンペーンを進めるなど、地域に根ざした郵便事業のための取り組みを展開している。

▽西宮ボーイズ（兵庫県）

多年にわたり3Rの推進に多大な貢献をされた。また、11年度からは市区長会長・環境部長連絡会議を通じてマイバッグキャンペーンを進めるなど、地域に根ざした郵便事業のための取り組みを展開している。

▽NPO法人無垢の会（熊本県）

義援金を熊本県の番号に寄付している。

▽NPO法人熊本県有機農業研究会（熊本県）

義援金を熊本県農業の番号に寄付している。

▽NPO法人ピロ・ウェイストアカデミー（徳島県）

義援金を熊本県の番号に寄付している。

▽日本ロジスティクス協会（東京都）

ロジスティクス業務・サプライチェーンの効率化等を通じた物流の合理化・高度化を図り、物流業界の発展に貢献している。

▽ヤマトホールディングス（東京都）

宅配便業界の先駆けとなる「クロネコヤマトの宅急便」を開発し、宅配便の定着化に寄与している。

▽NPO法人無垢の会（熊本県）

義援金を熊本県の番号に寄付している。

▽NPO法人ピロ・ウェイストアカデミー（徳島県）

義援金を熊本県の番号に寄付している。

【個人】

▽田中正明氏（東京都）

長年にわたり3Rの推進に多大な貢献をされた。また、11年度からは市区長会長・環境部長連絡会議を通じてマイバッグキャンペーンを進めるなど、地域に根ざした郵便事業のための取り組みを展開している。

▽岡田知子氏（徳島県）

徳島県の「ごみゼロ推進員」として、ごみ減量・資源化について市民への啓発活動を実施し、徳島市と徳島県の回収業者が共同で実施したペットボトルの回収システムを構築するなど、徳島県の3R推進に大きな貢献をされた。

▽宮田知子氏（徳島県）

07年から市のごみ処理施設のエフロ冬籠り、市民からの反不用品等引き取り、点検・修理して市民に提供・販売する活動を実施し、さらに不用品の再活用のための教室を実施。

▽島袋恵理子氏（女性部連合会）（徳島県）

「ごみの減量・リサイクル啓蒙の年間実施」11年からはミックスペーパーの分別収集による資源回収を行なうなど、地域に根ざした啓蒙活動を行っている。

▽岡崎西地区住民会（徳島県）

04年から資源ごみの回収を開始し、現在では全ての地区としてマイバッグキャンペーンを進めるなど、地域に根ざした郵便事業のための取り組みを展開している。

第2部：記念シンポジウム

前回大会では、「全国食べきりサミット～おいしい日本を食べきろう～」をテーマにパネルディスカッションが行われた

関連イベント

大会当日の5日から、日本初の「ごみゼロ宣言」をした「ごみゼロ全国サミット」の開催等、全国の各自治体による取組示が行われる。

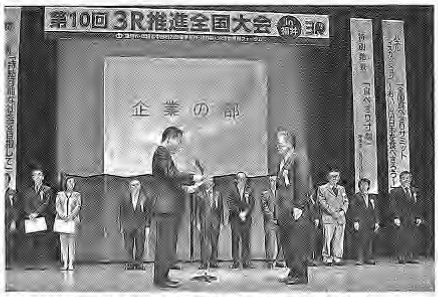
循環型社会推進功労者環境大臣表彰の表彰状を手渡す井上信治・前環境副大臣（前回大会）

3R推進展示コーナー

同展示コーナーでは、3R推進ポスターコンクール最優秀賞の作品等を展示する。

3R推進ポスターコンクール最優秀賞の受賞作品

左上から時計回りに、小学校・低学年の部、同・中学年の部、中学生の部、小学校・高学年の部



前回大会では、「全国食べきりサミット～おいしい日本を食べきろう～」をテーマにパネルディスカッションが行われた

環境新聞10月12日

第11回3R推進全国大会

徳島から3Rを全国に発信

3R推進活動フォーラムと環境省、徳島県は20日、徳島市の徳島文理大学アカンサスホールで「第11回3R推進全国大会」を開催した（写真）。同大会は国民・事業者・行政が一同に会し、循環型社会の形成に関する理解を深めるためのもので、今回は400人超が参加した。

冒頭、あいさつに立った環境省の梶原成元・地球環境審議官は、「3R推進全国大会は出席していただいた方が、3Rの推進に対する思いを共有し、具体的な取り組みを全国に発信する重要な大会。この大会が3Rに関する知識を深め、勉強を密にする良い機会になれば」と述べた。

続いて、循環型社会形成推進功労者環境大臣表彰では19の企業・団体・個人が表彰された他、3R推進ポスターコンクールの最優秀賞受賞者の表彰も行われた。

表彰式の後には、「とくしまから発信！広がるつながる3Rの輪」をテーマに記念シンポジウムが開かれた。シンポジウムでは、同フォーラム会長の細田衛士・慶応大学教授による基調講演「循環型社会の道筋を展望する」の他、地元の高校生による事例発表や、シンガーソングライターの白井貴子氏とマイバッグガールズによる「3Rとエコライフを楽しもう」と題した特別講演が行われた。その後のパネルディスカッションでは「今後の3Rの取り組みと主体間連携のあり方」をテーマに国、自治体、企業、NPOの代表者らが討論した。また、会場では企業・団体によるブース展示なども行われた。

環境新聞 10 月 26 日

若い人達と連携した未来環境創造を全国へ発信

徳島で第11回3R推進全国大会

文◉藤本　正
（3R活動推進フォーラム 広報担当部長）

環境省、環境省中国四国地方環境事務所高松事務所、徳島県、3R活動推進フォーラム主催による第11回3R推進全国大会が10月20日（木）13時から、徳島市内の徳島文理大学アカンサスホールで開催された。大会は式典と記念シンポジウムで構成され、第1部式典では2016年度循環型社会形成推進功労者環境大臣表彰と2016年度3R促進ポスターコンクール最優秀賞の表彰、第2部シンポジウムは「とくしまから発信！ 広がる つながる 3Rの輪」をテーマに基調講演、パネルディスカッションなどが行われ、約400人が参加した。

この大会は、循環型社会の形成に向け、国民・事業者・行政が一堂に会して3Rの推進に連携して取り組むことを目的として毎年開催されており、今年が11回目。今回は、昨年、環境省都とくしま・未来創造憲章を制定した徳島県での開催となり、四国では初めて。また大学での開催も今回が初めてで、会場のアカンサスホールのある建物の1階ラウンジは地中熱を使った空調で知られる。

13時から行われた第1部記念式典では、はじめに主催者の環境省から梶原成元地球環境審議官があいさつし、授賞者に祝辞を述べるとともに、「環境省は皆様とともに循環型の社会づくりに一層努力をして参りたい」とあいさつ。続いて徳島県の飯泉嘉門知事は「今議会に脱炭素社会実現へ向けた推進条例を提案している」と話し、大会が新機軸発信の場となることに期待を寄せた。

この後、細田衛士3R活動推進フォーラム会長（慶應義塾大学経済学部教授）と来賓の嘉見博之徳島県議会議長のあいさつが行われ、表彰式に移った。

1 第11回3R推進全国大会式典のもよう
2 あいさつする梶原地球環境審議官
3 受賞者による記念撮影
4 表彰式のもよう
5 講演する細田氏
6 高校生たちによる事例発表
7 パネルディスカッション
8 3R推進展示コーナーのもよう
9 会場の文理大学アカンサスホール

表彰式では、2016年度の循環型社会形成推進功労者環境大臣表彰（7企業11団体1個人）と3R促進ポスターコンクール最優秀賞表彰（4部門4人）が行われ、梶原地球環境審議官から表彰状が授与された。この後、梶原地球環境審議官も入って受賞者全員による記念撮影が行われた。

また、2部では、最初に「循環型社会の道筋を展望する」と題して基調講演を行った細田会長が、「最終処分場も天然資源も両方ともなくなっていく。これを将来世代に残していくには、消費者、生産者、企業、国、自治体がダイバーシティ（多様な発想）のうちにコラボ（連携、協力）して循環利用のパイプをどんどん太くする、再生資源の市場をもっと整備しなければいけない」と強調した。この後、昨年度の大会開催地の福井県の安全環境部循環社会推進課主任の大石光紀氏から、昨年度大会開催成果として「おいしい食べきり運動」のネットワークが設立されたとの報告があった。

引き続き、地元の徳島県立新野高等学校と徳島県立小松島西高等学校勝浦校の皆さんによる「緑のリサイクル・ソーシャル・エコ・プロジェクト」と題する事例発表、シンガーソングライターで環境省3R推進マイスターである白井貴子氏とマイバッグガールズによる特別講演「3Rとエコライフを楽しもう」が歌も交えて行われた。

第2部の最後は、「今後の3Rの取組みと主体間連携のあり方」をテーマにしたパネルディスカッションで、環境省大臣官房廃棄物・リサイクル対策部企画課循環型社会推進室長・田中良典氏、福岡県大木町副町長・境公雄氏、NPO法人ゼロ・ウェイストアカデミー理事長・坂野晶氏、㈱日誠産業環境推進部長・岸野正和氏、徳島県県民環境部環境首都課課長補佐・尾関勉氏の5人のパネラーが、3R活動推進フォーラム副会長（NPO法人持続可能な社会をつくる元気ネット理事長）・岡田裕子氏のコーディネータにより、意見を述べた。

その中で、環境省の田中氏は「地域の循環の輪の積み重ねを形成していくことが必要」と訴えた。また、徳島県の尾関氏は、「徳島県では徳島の4大学で学生地球温暖化防止活動推進員をつくったりしていて、今後も若い人達と一緒に環境活動を、環境政策を続けて行きたい」と強調した。

最後に、次年度開催地の沖縄県から環境部環境企画統括監の櫻原憲実氏があいさつして閉会した。

このほか、会場2～3階では、2016年度3R促進ポスターコンクール入賞作品展示コーナーや団体などによる3R推進展示コーナーが設けられた。また、関連イベントとして午前中、上勝町ゼロ・ウェイストアカデミーへのバスによる施設見学会が行われた。W

第 11 回３Ｒ推進全国大会

開催報告書

平成 29 年 3 月

第 11 回３Ｒ推進全国大会実行委員会
事務局：３Ｒ活動推進フォーラム
東京都墨田区両国 3-25-5　JEI 両国ビル８Ｆ
公益財団法人廃棄物・３Ｒ研究財団内

古紙パルプ配合率70％再生紙を使用

リサイクル適性の表示：紙へリサイクル可
本冊子は、グリーン購入法に基づく基本方針における「印刷」に係る判断の基準に従い、印刷用の紙へのリサイクルに適した材料〔Ａランク〕のみを用いて作製しています。

この製品は，古紙パルプ配合率 70％の再生紙を使用しています。このマークは，３Ｒ活動推進フォーラムが定めた表示方法に則って自主的に表示しています